

市 原 市 ^{きた} 北 ^の 野 ^{はら} 原 遺 跡

2 0 0 0

旭 硝 子 株 式 会 社
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県ほぼ中央に位置する市原市は、市内を南北に貫流し東京湾に注ぐ養老川を擁し、気候温暖で自然環境に恵まれた地にあり、縄文時代からの貴重な遺跡が数多く所在しております。

千葉県は、昭和40年代後半以降めまぐるしい宅地開発と道路網の整備が進展してまいりましたが、それに伴い埋蔵文化財の発掘調査件数も大幅に増加してまいりました。当市においてもこのような状況を反映し、多くの遺跡において発掘調査が実施され、稲荷台1号墳から出土した王賜銘鉄剣のような貴重な遺物の発見に至ったわけでございます。

今回、ここに報告する北野原遺跡は、宅地開発に伴い関係諸機関の御協力をいただき発掘調査を実施したものです。調査の結果、縄文時代後期の竪穴住居跡や、平安時代初めの頃に造られた方形周溝状遺構と呼ばれる墓跡などが検出されるなど原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果を得ることができました。

この報告書が、学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く市民の皆様に活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査並びに本書の刊行に際し御指導、御協力をいただきました旭硝子株式会社、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課をはじめとする関係諸機関に対し心から感謝の意を表します。

平成12年 3 月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 小 茶 文 夫

凡 例

1. 本書は、千葉縣市原市国分寺台中央6-10-1～7に所在する北野原遺跡（遺跡コード セ277）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、旭硝子株式会社の委託を受け、財団法人 市原市文化財センターが実施した。
3. 発掘調査及び整理作業の担当者は以下のとおりである。

確認調査 北野原遺跡 平成10年11月24日～平成10年12月25日
対象面積 11,829.37㎡のうちの1,183㎡（対象面積の10%）
担当者 小川浩一

本 調 査 北野原遺跡 平成11年1月25日～平成11年3月18日
本調査 2,340㎡ 担当者 小川浩一

整理作業及び報告書刊行 平成11年4月1日～平成12年3月31日
担当者 小川浩一・蜂屋孝之
4. 本書の執筆は、第2章第1節を蜂屋孝之が、それ以外を小川浩一が担当した。
5. 鉄器のX線写真撮影は、国立歴史民俗博物館 永嶋正春氏に御協力を頂いた。
6. 貝種及び動物遺存体の同定については、忍澤成視、鶴岡英一両氏の協力を得た。
7. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、旭硝子株式会社、市原市教育委員会ふるさと文化課ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
8. 出土遺物及び調査記録は、すべて市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。
9. 遺構及び遺物の縮尺は、それぞれのスケールに記した。
10. 本書で使用した地形図及び航空写真は国土地理院発行の下記のものを使用している。

1/25,000地形図「蘇我」（NI-54-19-15-2）、1/25,000地形図「五井」（NI-54-19-15-4）
1/25,000地形図「姉崎」（NI-54-19-16-3）、1/25,000地形図「海士有木」（NI-54-19-16-1）
約1/5,000航空写真（昭和36年撮影）（C16-(B)-10）
11. 遺構及び遺物実測図に使用したスクリーントーンは、下図のとおりである。



炉・炉の焼土



灰・炭



焼土



貝層

12. 本報告書に記載した遺構番号は、調査時の遺構番号と異なるため遺構番号対照表を下記に記す。

遺構番号対照表

報告遺構番号	調査時番号	報告遺構番号	調査時番号	報告遺構番号	調査時番号
001号跡	SI-22	011号跡	SK-03	021号跡	SK-114
002号跡	SI-25	012号跡	SK-113	022号跡	SI-101
003号跡	SI-104	013号跡	SK-110	023号跡	SI-102
004号跡	SI-107	014号跡	SK-111	024号跡	SI-103
005号跡	SI-27	015号跡	SK-104・SK-107	025号跡	SI-105
006号跡	SI-26・SK-112	016号跡	SK-105	026号跡	SI-106
007号跡	SI-21	017号跡	SK-101	027号跡	SI-101
008号跡	SI-23	018号跡	SK-109	028号跡	SK-103
009号跡	SI-102	019号跡	SK-106		
010号跡	SK-01	020号跡	SK-106		

本文目次

序 文

凡 例

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯	1
第2節 地理的環境	1
第3節 歴史的環境	1
第4節 調査の方法	4

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代	6
第2節 古墳時代	45
第3節 奈良・平安時代	53
第4節 動物遺存体について	60

第3章 まとめ

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図 周辺のおもな遺跡	2	第19図 010号跡及び出土遺物	22
第2図 北野原遺跡調査範囲図	2	第20図 011号跡及び出土遺物	22
第3図 周辺の地形図	3	第21図 012号跡及び出土遺物	23
第4図 調査区グリッド設定図	4	第22図 013号・014号跡	24
第5図 検出遺構配置図	5	第23図 015号跡及び出土遺物	25
第6図 001号跡	7	第24図 016号跡及び出土遺物	26
第7図 001号跡出土遺物	8	第25図 017号跡及び出土遺物	27
第8図 001号跡出土遺物	9	第26図 018号跡及び出土遺物	28
第9図 001号跡出土遺物	10	第27図 019号・020号跡及び出土遺物	29
第10図 002号跡及び出土遺物	11	第28図 021号跡	30
第11図 003号跡及び出土遺物	12	第29図 遺構外出土土器1	31
第12図 004号跡及び出土遺物	14	第30図 遺構外出土土器2	33
第13図 005号跡及び出土遺物	15	第31図 遺構外出土土器3	34
第14図 006号跡及び出土遺物	16	第32図 遺構外出土土器4	35
第15図 007号跡	17	第33図 遺構外出土土器5	36
第16図 007号跡出土遺物	18	第34図 遺構外出土土器6	37
第17図 008号跡及び出土遺物	19	第35図 土器片錘・土器片円盤	38
第18図 009号跡	20	第36図 土製品	40

第37図 土製品	41	第44図 0 2 6 号跡及び出土遺物	51
第38図 貝製品	42	第45図 0 2 7 号跡	54
第39図 石器	44	第46図 0 2 7 号跡地下式壙及び出土遺物	55
第40図 0 2 2 号・0 2 3 号跡	46	第47図 0 2 7 号跡地下式壙遺物出土状況 及び出土遺物	56
第41図 0 2 2 号・0 2 3 号跡及び出土遺物	47	第48図 0 2 7 号跡玄室出土遺物	57
第42図 0 2 4 号跡及び出土遺物	49	第49図 0 2 8 号跡	58
第43図 0 2 5 号跡及び出土遺物	50		

表 目 次

第1表 土器片錘計測表	39	第6表 0 2 7 号跡出土鉄器観察表	59
第2表 土器片円盤計測表	39	第7表 貝類組成表 1	63
第3表 腕輪状土製品計測表	41	第8表 貝類組成表 2	64
第4表 貝刃計測表	43	第9表 貝類組成表 3	65
第5表 土器観察表	52	第10表 ハマグリ殻高度数分布	65

図 版 目 次

図版 1	遺跡周辺の航空写真
図版 2	調査風景・027号跡・027号跡竪坑
図版 3	001号跡・002号跡・003号跡・004号跡
図版 4	004号跡・008号跡・022号跡・023号跡・024号跡・025号跡
図版 5	025号跡・026号跡・027号跡・
図版 6	010号跡・011号跡・012号跡・013号跡・014号跡・015号跡
図版 7	027号跡玄室・007号跡・007号跡遺物出土状況
図版 8	017号跡・018号跡・019号跡・020号跡・021号跡・028号跡・遺構出土縄文土器
図版 9	遺構出土縄文土器
図版10	遺構出土土師器ほか
図版11	遺構出土縄文土器
図版12	遺構出土縄文土器
図版13	遺構出土縄文土器
図版14	遺構出土縄文土器
図版15	遺構外出土縄文土器
図版16	遺構外出土縄文土器
図版17	土器片錘・土器片円盤・腕輪状土製品・土製蓋
図版18	出土石器・貝刃・貝加工品
図版19	027号跡出土鉄器

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

今回の発掘調査は、旭硝子株式会社による宅地開発に先行して実施されたものである。宅地開発の工事に先立ち、旭硝子株式会社から事業地域内の埋蔵文化財の有無およびその取扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化課と市原市教育委員会ふるさと文化課との三者により慎重に協議を重ねた結果、遺構の有無を確認するための確認調査を実施することとなった。

確認調査は、財団法人市原市文化財センターが実施することになり、旭硝子株式会社との間に平成10年11月10日に委託契約が締結され、平成10年11月24日から平成10年12月25日にわたって確認調査が実施された。確認調査の結果、検出された遺構・遺物の取り扱いについて千葉県教育庁文化課の回答を受け、本調査を実施することとなったため、旭硝子株式会社との間に、平成11年1月13日に委託契約が再び締結され、平成11年1月25日から平成11年3月18日にかけて、2,340㎡の本調査を実施した。整理作業及び報告書刊行は、平成11年度に実施した。

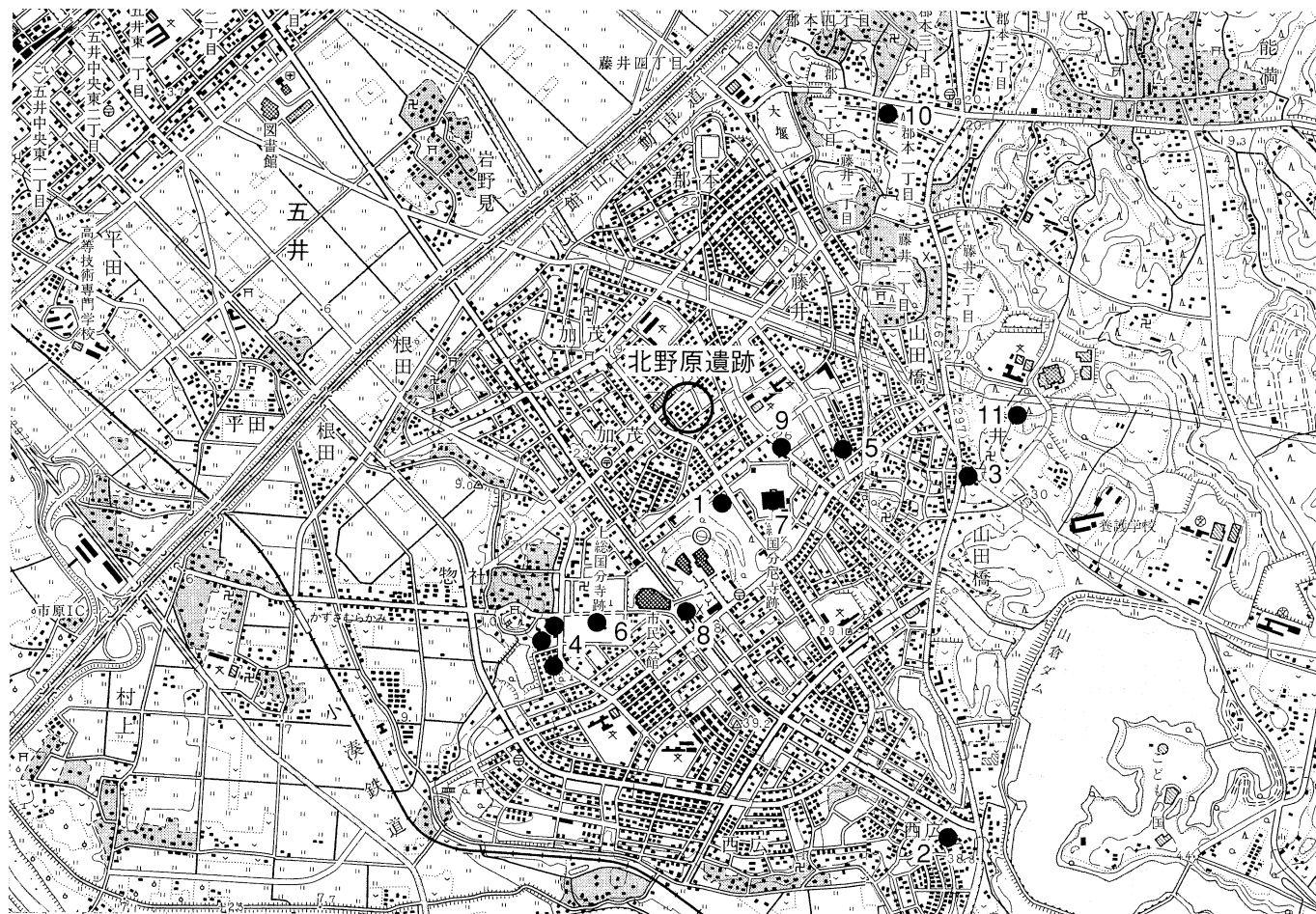
第2節 地理的環境

千葉県市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、北は千葉市と接し、北東は茂原市、長生郡長柄町、長南町、南は袖ヶ浦市、木更津市などに接している。北側には村田川が流れ、支流によって市の北部は樹枝状に開析されている。市域のほぼ中央を南北に縦断して流れる養老川はその源泉を清澄山系に求め、兩岸に河岸段丘を、また下流域には沖積地と三角州性低地とを形成して東京湾へと注いでいる。

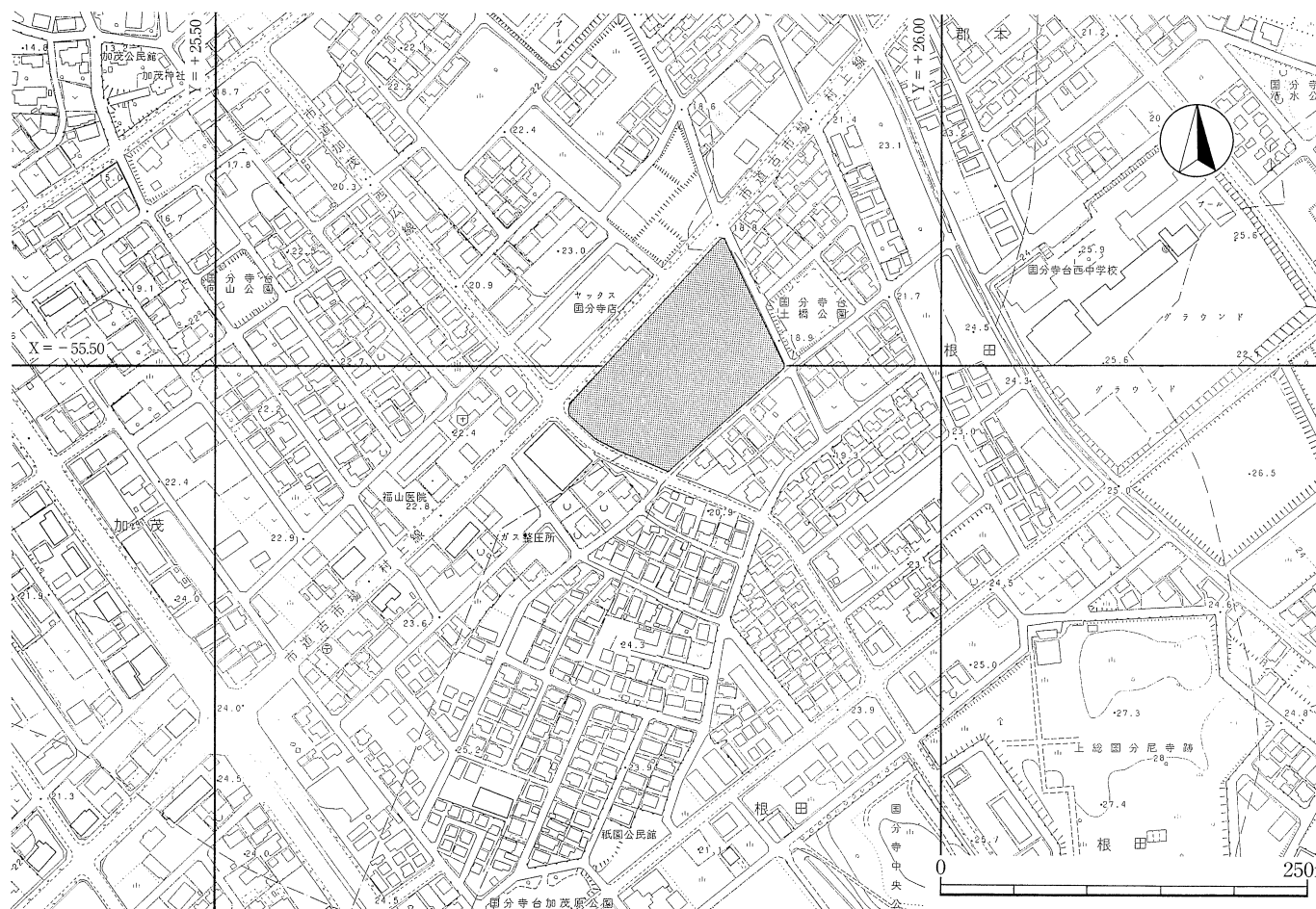
北野原遺跡は、養老川と村田川の間に位置する洪積世台地上に位置するが、遺跡が所在する台地は両河川から直接のびる支谷ではなく、旧海岸線から直接入り込む小谷によって開析された舌状の台地である。標高は約23m前後である。この小谷を南に逆上るとすぐに後・晩期の大規模な貝塚である祇園原貝塚が位置している。本遺跡が位置する台地の基本層序は、市原市北部地域の一般的な層序を示している。具体的には、表土（Ⅰ層）、縄文土器などを包含する漸移層（Ⅱ層）が堆積し、次いで立川ローム層最上層（Ⅲ層）のいわゆるソフトロームとなる。今回の調査範囲にはかつて一戸建ての住宅が立ち並んでおり、住宅の建設及び撤去に伴って発生した攪乱が各所で認められ、Ⅱ層の残存状況はあまりよくなかった。また、安定した層序を示している場所においてもⅡ層は薄かった。

第3節 歴史的環境（第1図）

北野原遺跡は、通称「国分寺台」と呼ばれる台地上に位置し、養老川水系によって樹枝状に開析された台地縁辺を中心にこれまで数多くの遺跡が発掘調査されてきた。市原台地上に展開する遺跡の数々は上総国分僧・尼寺に代表されるように、ここに説明するまでもなく枚挙にいとまがない。縄文時代においては、同じ谷の対岸には祇園原貝塚(1)が位置している。後期から晩期の竪穴住居跡51棟、埋葬人骨112体などが検出されている。今回北野原遺跡で検出された住居群などの時期は祇園原貝塚の貝層形成時期よりも若干先行すると思われる、周辺に展開する後期の集落の動態を検討する上で意義のある調査であったと考えられる。谷は異なるが近隣には西広貝塚(2)、山田橋亥の海道貝塚(3)等が



第1図 周辺のおもな遺跡 (1/25,000)



第2図 北野原遺跡調査範囲図 (1/5,000)

存在し縄文時代中～後期の豊富な資料を提供している。古墳時代においては、東国の方形周溝墓から古墳への過渡期の形態として注目された神門5・4・3号墳(4)や「王賜」銘鉄剣を出土した稲荷台1号墳(5)等は、あまりにも有名である。そして奈良・平安時代では、上総国分僧寺(6)・尼寺(7)をはじめそれと関わりを持つと考えられる集落跡の荒久遺跡(8)、坊作遺跡(9)が存在し、また市原郡家推定地となっている郡本遺跡(10)、「寺」銘の墨書土器が出土し、方形周溝状遺構の存在が確認された千草山遺跡(11)等数多くの遺跡を上げることができる。

参考文献

- 木村泰治 「第八章 市原市の地形と地質」『市原市史(別巻)』 市原市教育委員会 1979
 樋口義幸 「第九章 第五節 養老川下流地域」『市原市史(別巻)』 市原市教育委員会 1979
 田中清美 『千草山遺跡・東千草山遺跡』 (財)市原市文化財センター 1989
 高橋康男 『市原市 上総国府推定地確認調査報告書(1)』 市原市教育委員会 1994
 宮本敬一 「上総国分尼寺の成立—尼寺の造営過程を中心に—」『東海道の国分寺—その成立と変遷』 第8回企画展図録 1994
 田所 真 「上総国」『シンポジウム東国の国府 in WAYO—考古学からみた東国国府の成立と変遷—』 1998
 宮本敬一 『市原の遺跡(1) 史跡上総国分寺跡—国分僧尼寺とその時代』 市原市教育委員会 1999
 忍澤成規 『祇園原貝塚—上総国分寺台遺跡調査報告V—』 市原市教育委員会 1999
 『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図 北部編(改訂版)』 1998 市原市教育委員会



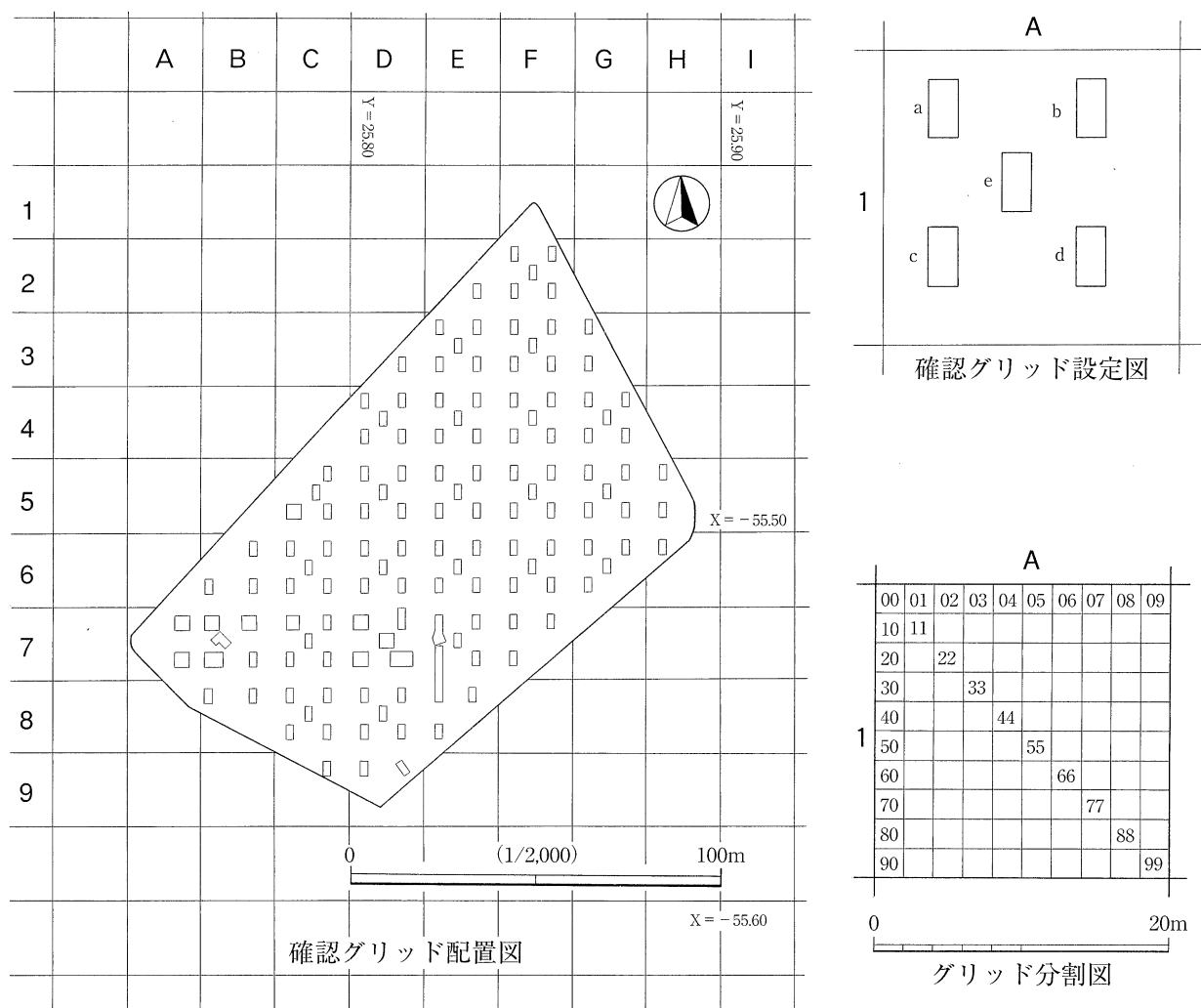
第3図 周辺の地形図(1/5,000)

第4節 調査の方法

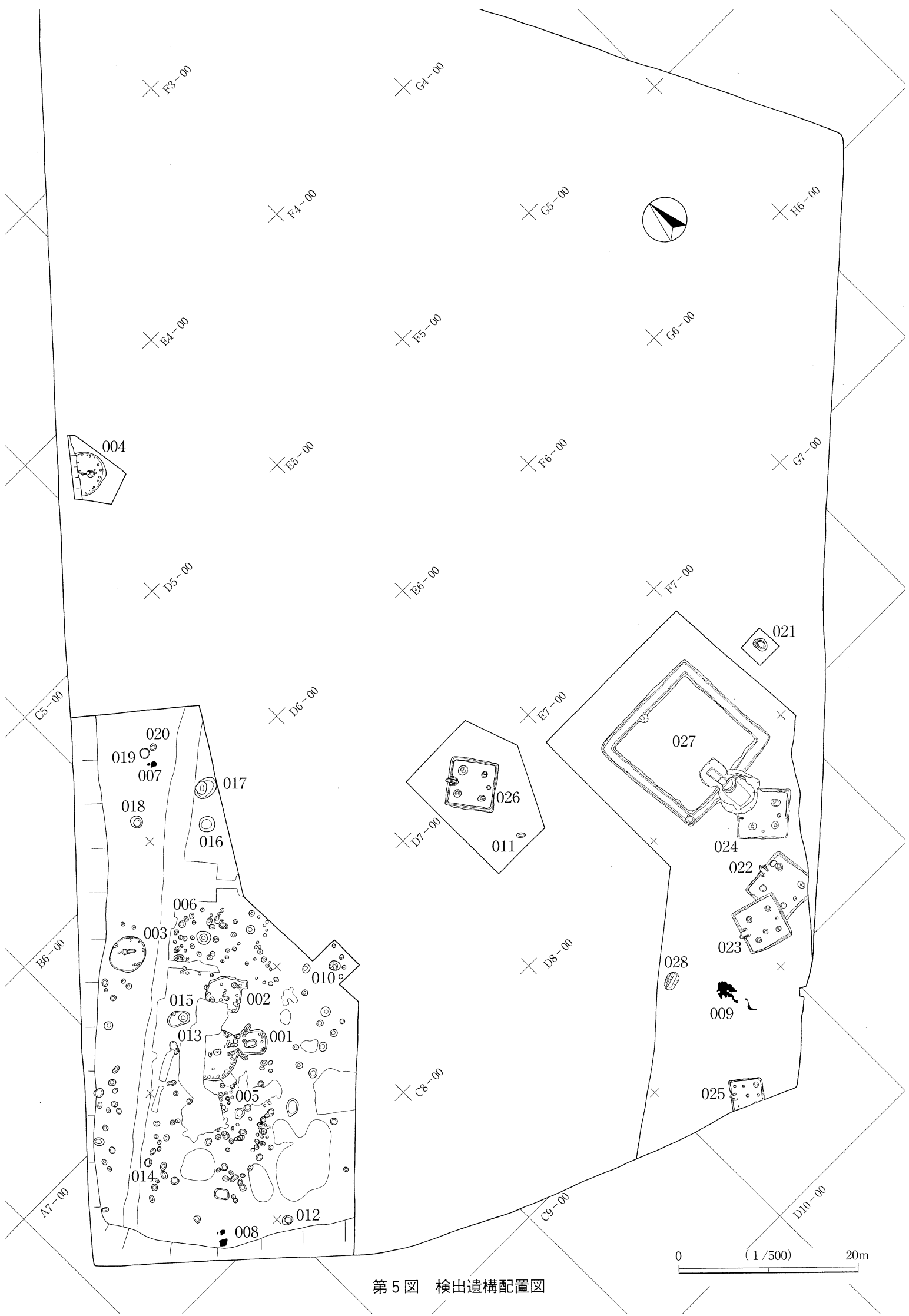
調査区の設定 調査対象範囲全域を公共座標に合わせて覆う20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。呼称は北西に起点をおき、西から東へA, B, C…、北から南へ1, 2, 3…の名称をつけた。その大グリッドを更に2m×2mの小グリッド100個に分割し、小グリッドは北西隅を起点に00～99の番号をふり、大小グリッドを組み合わせると例えばA 1-00のような呼称とした。

上層確認調査 縄文時代以降の上層の確認調査は、調査区全域に任意のトレンチを全対象面積の10%設定し、遺構・遺物の分布および帰属時期を確認し本調査に移行している。

本調査 縄文時代以降の遺構・遺物の本調査では、基本的に遺構内を4分割し土層観察用のベルトを設定して調査をおこなった。遺物の取り上げは、必要に応じて個別に番号を付し平面的位置とレベルを記録した。なお、遺構外出土の遺物については、基本的に小グリッド一括で採取している。



第4図 調査区グリッド設定図



第 5 図 検出遺構配置図

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代

1. 竪穴住居跡

概 要

調査によって検出された縄文時代の竪穴住居跡は、6棟である。すべて後期前半の称名寺Ⅱから堀之内Ⅰ式にかけての時期と考えられる。遺構の分布は本調査区の西部、かつての自然地形では台地の北西斜面に展開しているものと考えられる。6棟のうち4棟は竪穴状を呈するが、残る2棟は掘り込みが検出されておらず、炉跡と思われる焼土が堆積する大きめの土坑を中心に浅いピットが検出されているもので、一応竪穴住居跡の可能性が高いためこの項に含めて詳述することにしたい。

001号跡（第6～9図）

位置 B7-14グリッドを主体に検出された。西側本調査区の中央に位置している。

形態 いわゆる柄鏡形住居跡である。円形プランの北側約3分の1が大きな攪乱によって壊されている。円形プランの直径は、約6.0mである。張り出し部は長方形を呈し、中央に深い長楕円形のピットを伴っている。円形プランと張り出し部の接合部分にハの字状に開くピット列が検出されている。

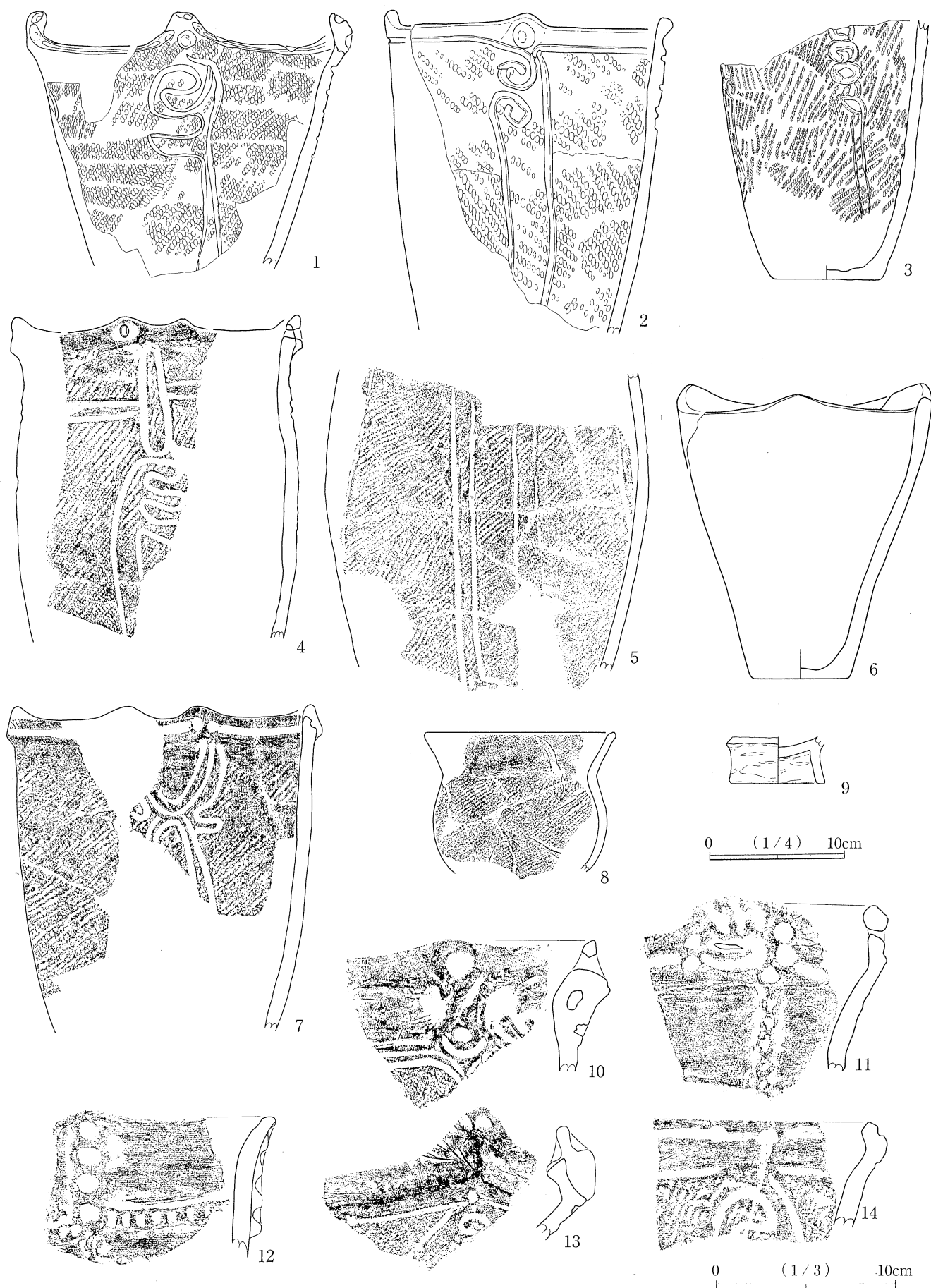
構造 比較的径の小さなピットが多数検出されている。円形プランの壁に沿って並ぶのはいわゆる壁柱穴である。20cmの間をおいて並び、深さは62cm～100cmと全体に深い。中央にピットが1つ検出されており、深さは床面から140cmあり、他のピットの深さを大きく上回っている。ハの字状に並ぶピット列は柄鏡形住居跡にみられる構造のもので、出入り口に伴う施設を支持するものと考えられる。ハの字状のピット列の外側には長方形の張り出し部があり、底面はほぼ円形プランの床面と同様のレベルを保っている。中軸線上に楕円形のピットがあり、床面からの深さは95cmである。炉は中央のピットと入り口施設の間に位置し、楕円形を呈する。規模は長軸長86cm、上面に焼土が認められたが床面から32cm程度の深さまで灰が充満していた。炉の掘り込みは最も深いところで床面から91cmに達していた。覆土は、竪穴の中央で3層に分層される貝層が検出された。ハマグリ・イボキサゴを主体としシオフキも多く混入する貝層からなり、床面からやや浮いた位置からの堆積で、竪穴の廃絶直後に廃棄が始まったものではなさそうである。貝類組成については第4節で詳述する。

遺物出土状況 土器の出土量は多く、張り出し部よりも円形プランの竪穴内から集中して出土している。堀之内Ⅰ式前葉の土器で占められている。ほぼ完形の注口土器が覆土下層から正位で出土しているほか3点の注口土器破片が出土している。このほかの遺物は、石鏃1点、磨石3点、土器片錘8点、土器片円盤6点、貝層中から貝刃5点が出土している。

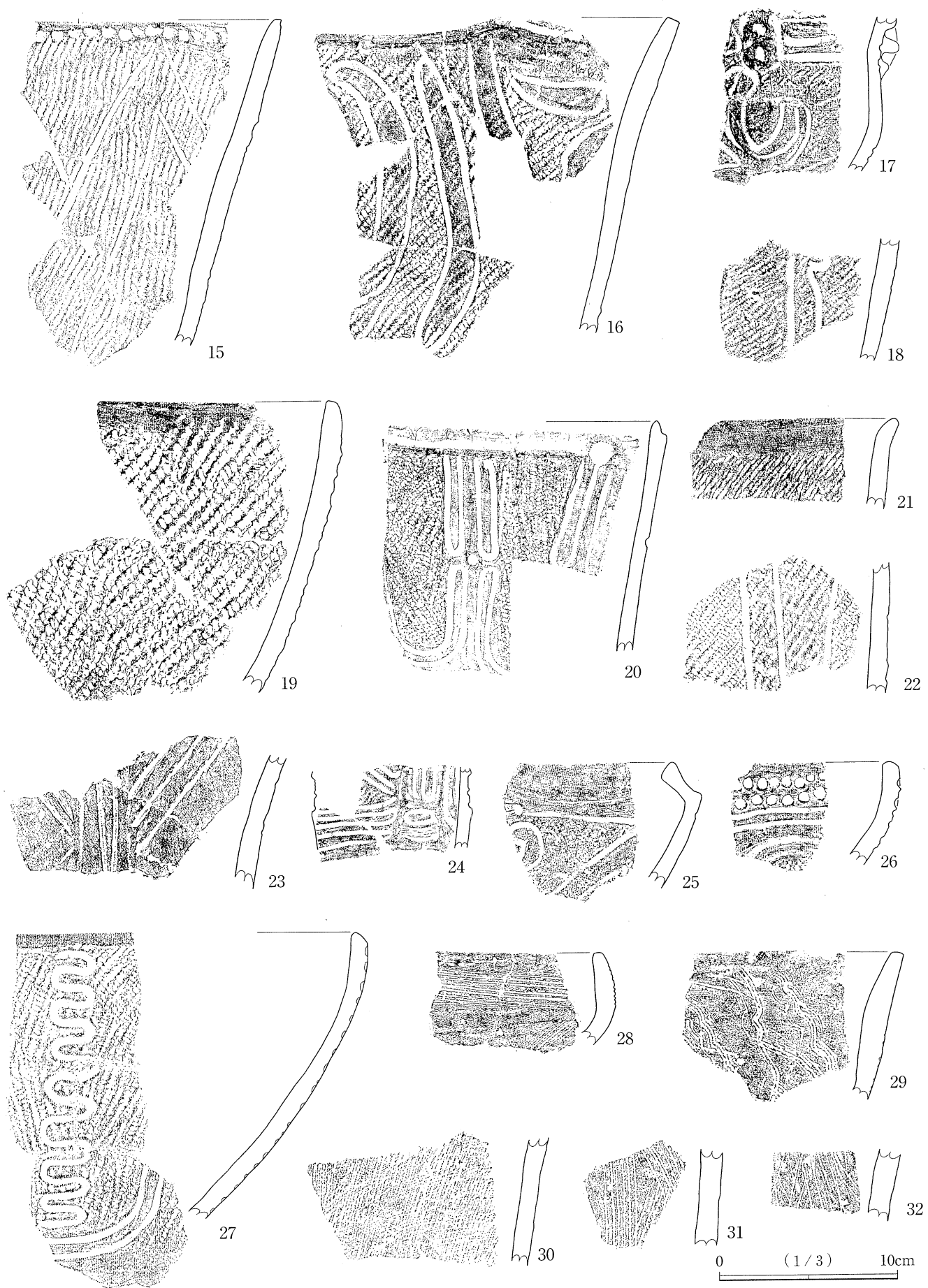
002号跡（第10図）

位置 B6-86グリッドを主体に検出された。西側本調査区の中央、001号跡に隣接している。

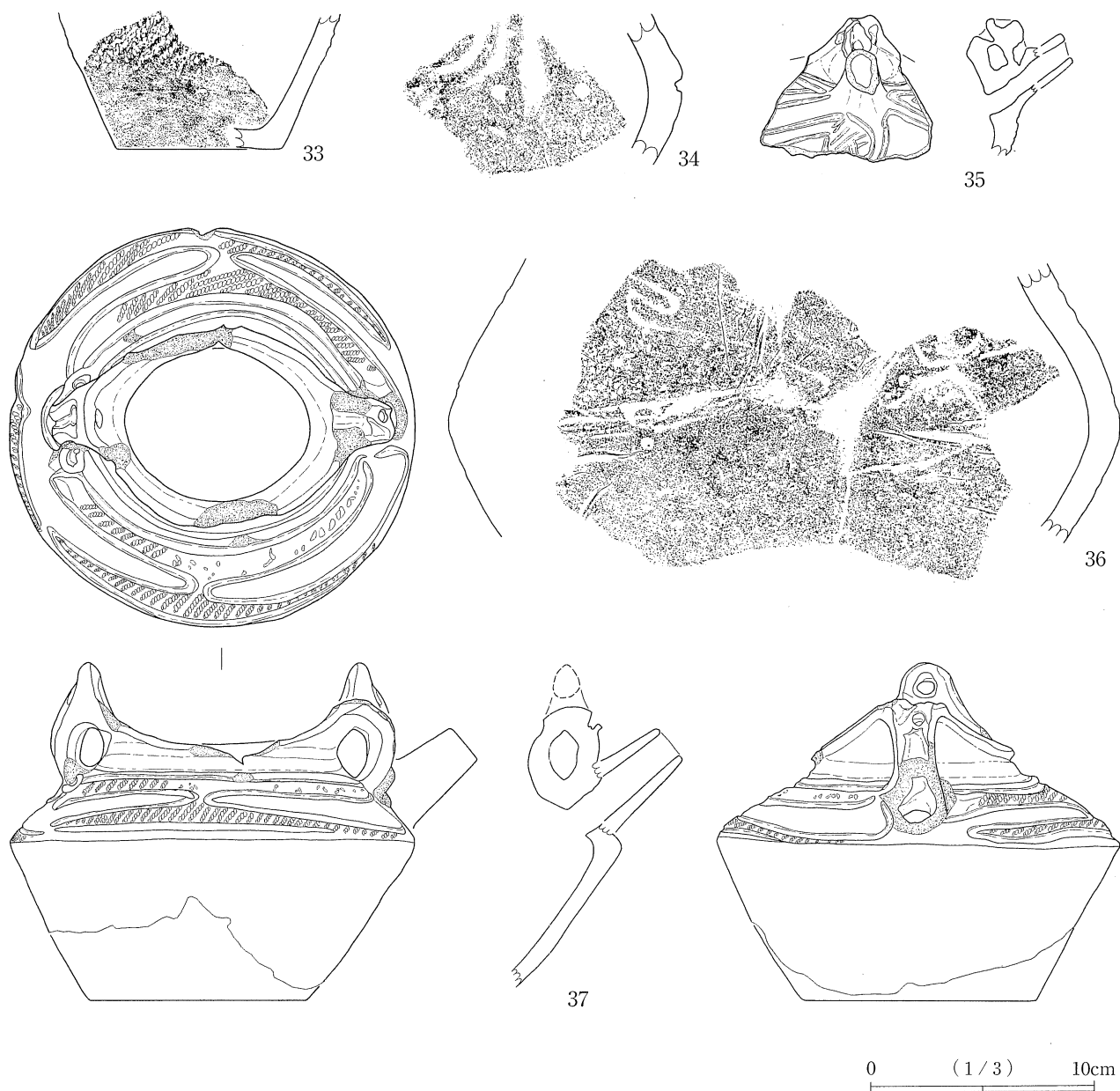
形態 円形プランと思われる竪穴住居跡である。西側約5分の1が攪乱によって壊されている。また、東側の壁には突出部があり、セクションでは切り合う前後関係が確認できなかったことから竪穴に伴う施設と考えざるを得ないが、焼土が突出部中層に堆積しており、竪穴とは前後する楕円形の土坑が



第7図 001号跡出土遺物



第8図 001号跡出土遺物

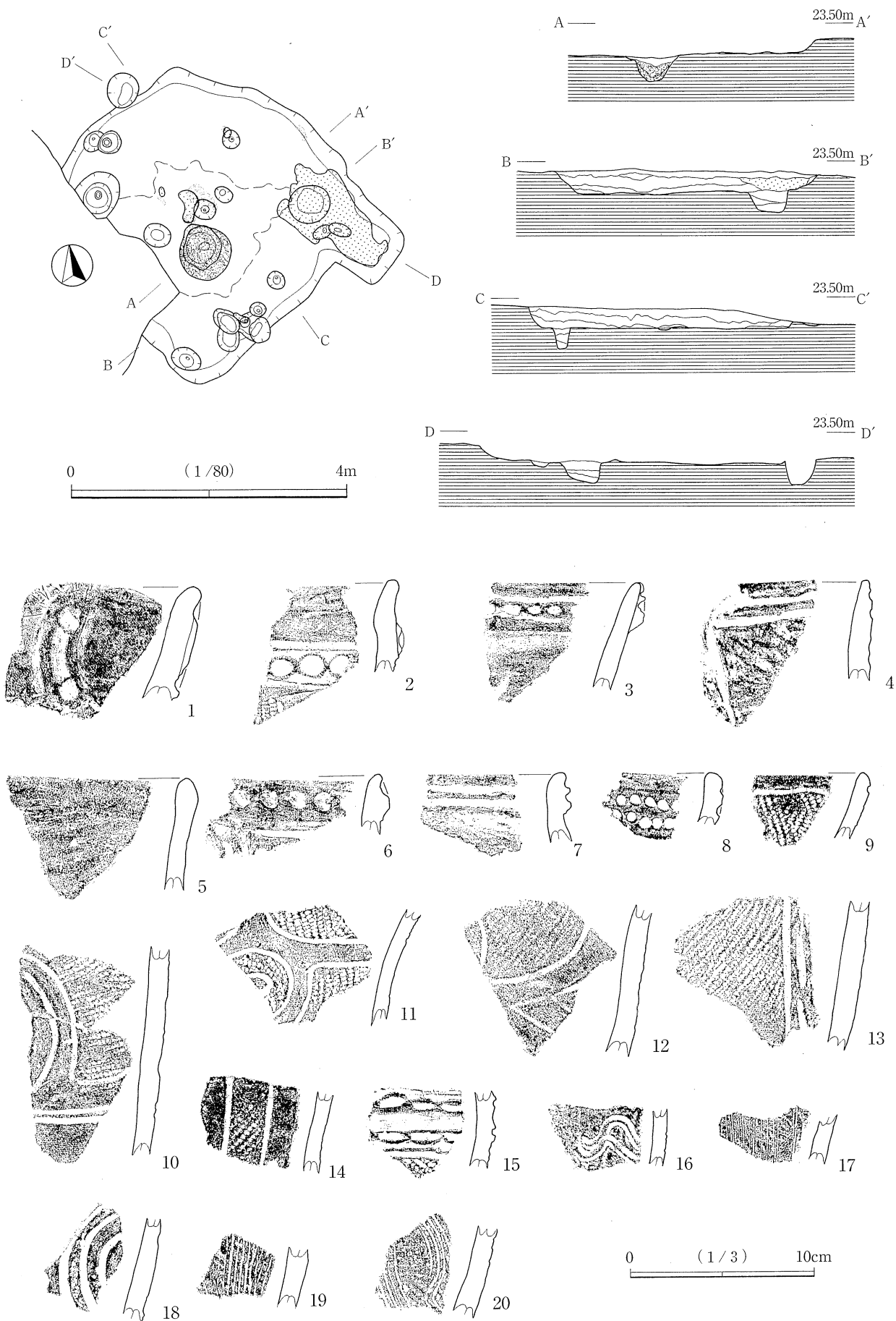


第9図 001号跡出土遺物

位置している可能性もある。竪穴のプランの直径は、約4.0mである。

構造 検出されたピットの数は少ない。ピットの配置に規則性はなく、深さも20cm～30cmと浅いもので占められている。唯一深いのが炉に隣接する中央のピットである。深さは床面から68cmである。炉はほぼ円形を呈し、規模は直径78cm、中層以下に焼土が厚く堆積していた。炉の掘り込みは最も深いところで床面から40cmである。竪穴の出入り口は炉が位置している南側であろうと推測される。覆土は、炉の付近から炭化物が多く含まれる層があり、東側突出部中層に焼土の厚い堆積層が認められた。

遺物出土状況 土器の出土量は少なく、しかも小破片が多い。称名寺Ⅱ式末から堀之内Ⅰ式にかけての土器で占められている。このほかの遺物は、土器片錘3点、腕輪状土製品の破片4点、凹石1点、石皿1点が覆土中から出土している。



第10図 002号跡及び出土遺物

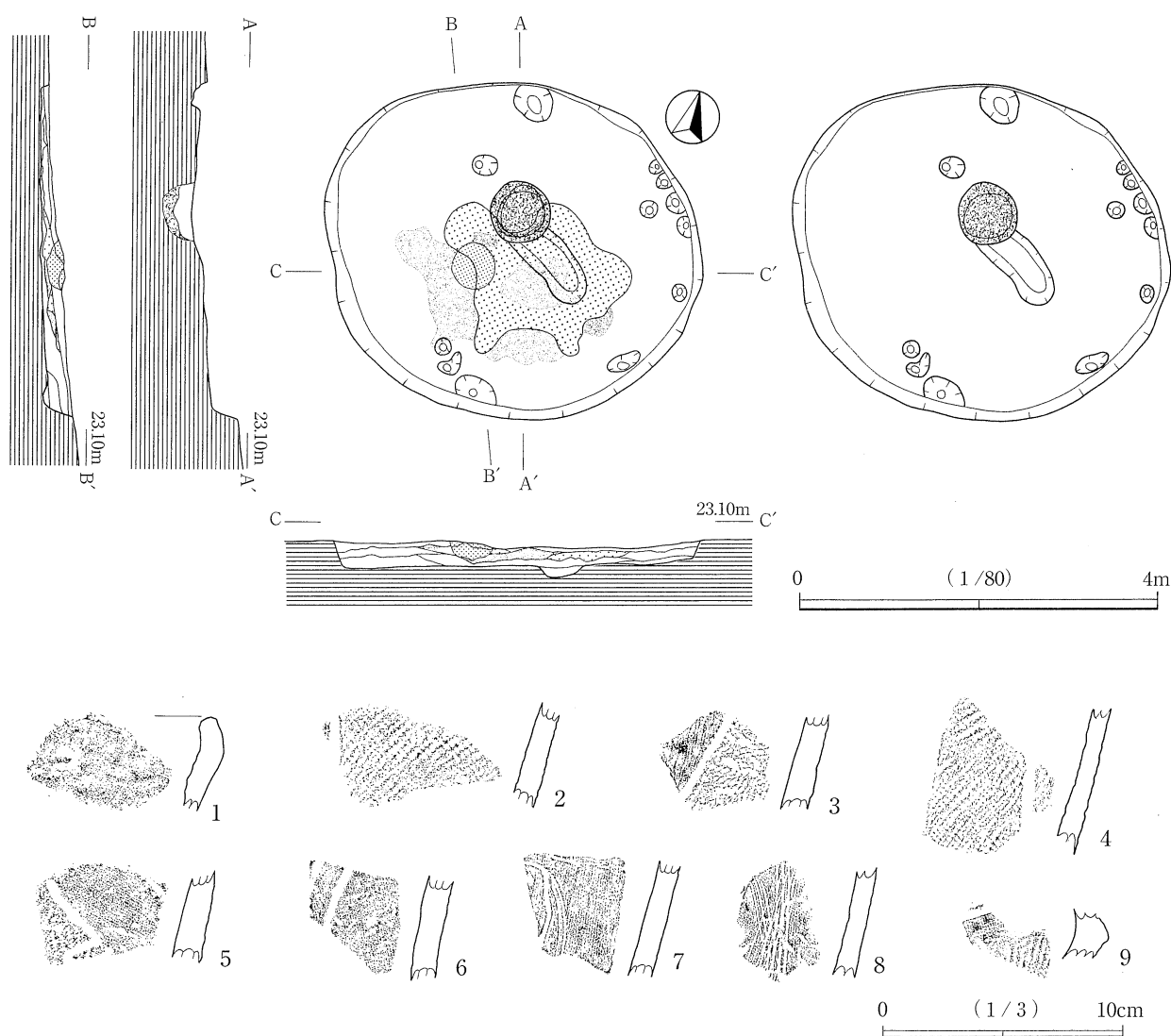
003号跡（第11図）

位置 B6-34グリッドを主体に検出された。西側本調査区の北東斜面に位置している。

形態 円形プランの竪穴住居跡である。検出面からの掘り込みは浅い。プランの直径は、約4.0mである。

構造 検出されたピットの数は少なく、配置に規則性はない。深さは20cmを下回る浅いもので占められている。炉は中央からやや北側寄りに位置している。ほぼ円形を呈し、規模は直径70cm、下層に純粹な焼土の堆積が認められた。炉の掘り込みは最も深いところで床面から40cmである。竪穴の出入り口は炉が位置している北側であろうと推測される。覆土は、竪穴中央の広い範囲に焼土が混入する層と灰・炭化物が多く混入する層が検出された。また、直径約40cm程度の貝ブロックが検出されている。土層断面の状況から貝ブロックのみが時期を異にして土坑状に廃棄されている可能性がある。検出された貝ブロックはハマグリ・イボキサゴからなる。貝類組成については第4節で詳述する。

遺物出土状況 土器の出土量は、少量でしかも小破片である。堀之内I式前葉の土器で占められている。このほかの遺物は、敲石1点、貝層中から貝刃が1点出土している。



第11図 003号跡及び出土遺物

004号跡（第12図）

位置 D4-22グリッドを主体に検出された。調査区の北部で1棟単独で本調査を行った遺構である。

形態 円形プランと思われる竪穴住居跡である。北西側約3分の1が失われている。検出面からの掘り込みは浅い。プランの直径は、約4.9mである。

構造 比較的径の小さなピットが多数検出されている。壁に沿って並ぶいわゆる壁柱穴である。間隔はやや不規則である。深さは最も深いもので59cmあるが、他のピットは、20cm前後の浅いものである。中央にピットが2つ検出されている。深さは炉の北側のものが床面から38cm、炉の南側のものが59cmである。また炉と南側壁の間に不定形の大きなピットが検出されているが性格は不明である。炉は楕円形を呈すると思われる。規模は短軸長60cm、炉の掘り込みは浅く、焼土が薄く堆積していた程度である。炉の北と南側に隣接しているピットは検出時に炉の焼土がピットの一部にかかっており、この2つのピットに柱があったとすれば、火床に極めて近い位置に柱が建っていたと考えられる。覆土は、竪穴の南東側に焼土を混入する層が認められた。また、南側の広い範囲にハマグリとイボキサゴを主体とする貝層が検出された。検出された貝ブロックの貝類組成については第4節で詳述する。

遺物出土状況 斜面に位置し、土器の出土量は、覆土量が少ないこともあり、少量であった。称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式前葉の土器で占められている。このほかの遺物は、土器片錘1点、土器片円盤2点、貝層中から貝刃が3点出土している。

005号跡（第13図）

位置 B7-42グリッドを主体に検出された。西側本調査区の南側に位置している。

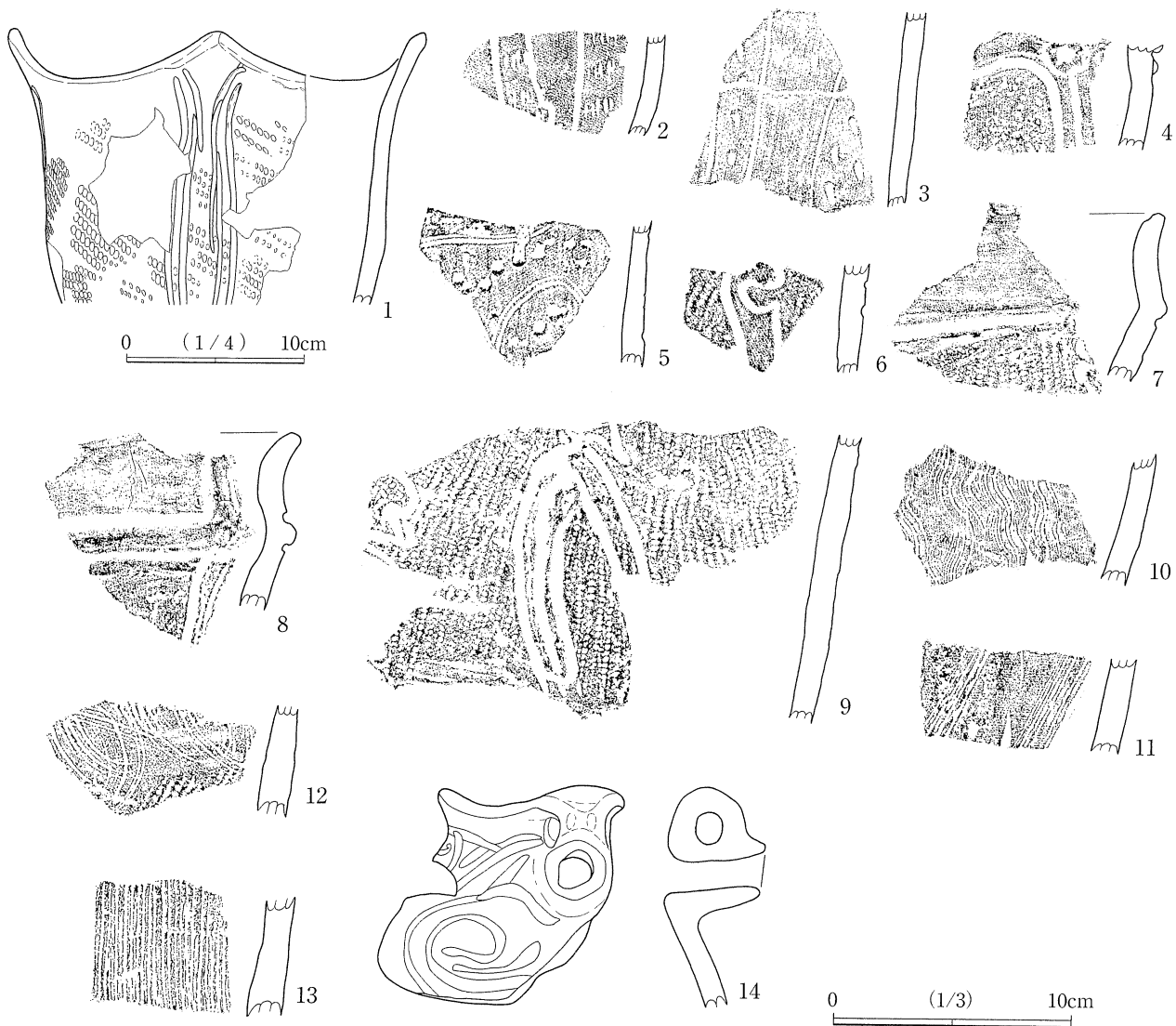
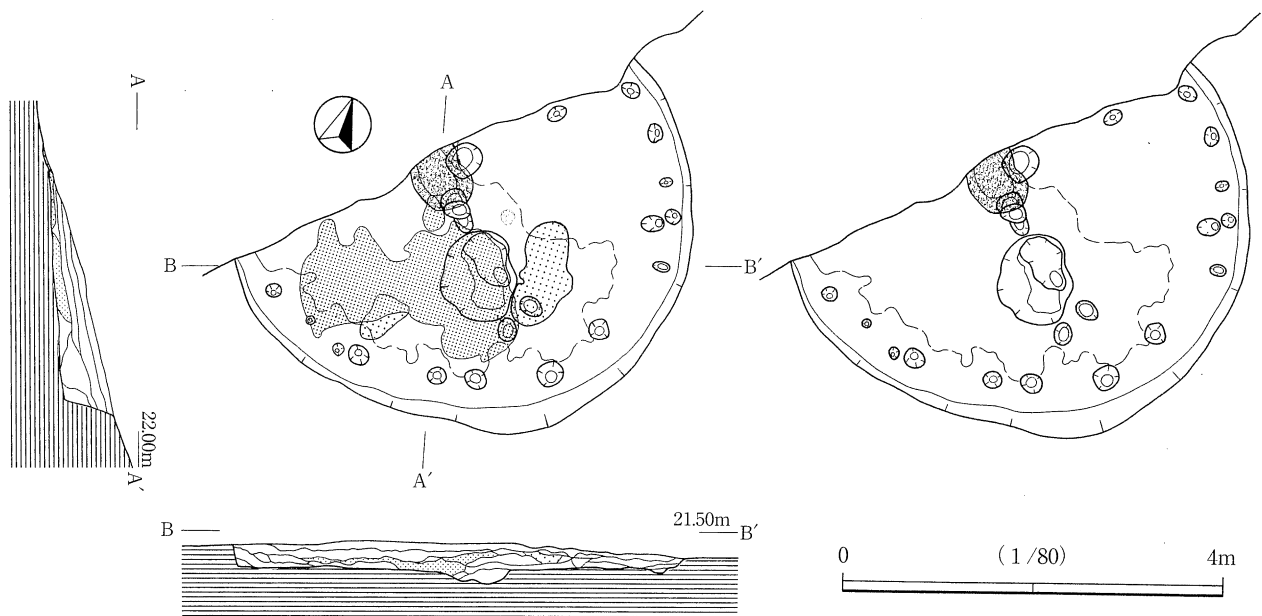
形態 検出時に焼土が充満した不定形の土坑が検出され、周囲からピットが検出されたことから竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構である。しかし、竪穴の掘り込みが検出されておらず、周囲のピットも規則性のある配置ではない。しかもピットの深さが柱穴としては浅いものが多い点など積極的に竪穴住居跡と判断する根拠に乏しい。また、中央の焼土を伴う土坑は、炉と考えるには長径が約120cmもあることも竪穴住居跡とするには難しい要素であるかもしれない。このため、竪穴住居跡としての規模を示さずに掲載した。仮にピットが検出された範囲を竪穴の規模とすれば、直径8m前後の大きな規模の竪穴である可能性がある。検出された土坑は、不定形を呈し長径120cm、短径115cm、深さは検出面から25cmである。堆積している焼土は3層に分層されたが中層が最も焼土量が多かった。

遺物出土状況 焼土が堆積する土坑内から熱を受けもろくなった土器が1個体出土している。口縁部に無文帯を伴い、櫛状工具で蛇行する条線文を施している。他の竪穴住居跡の時期とほぼ同様の称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式前葉時期と考えられる。このほかの出土遺物には土器片錘が1点出土している。

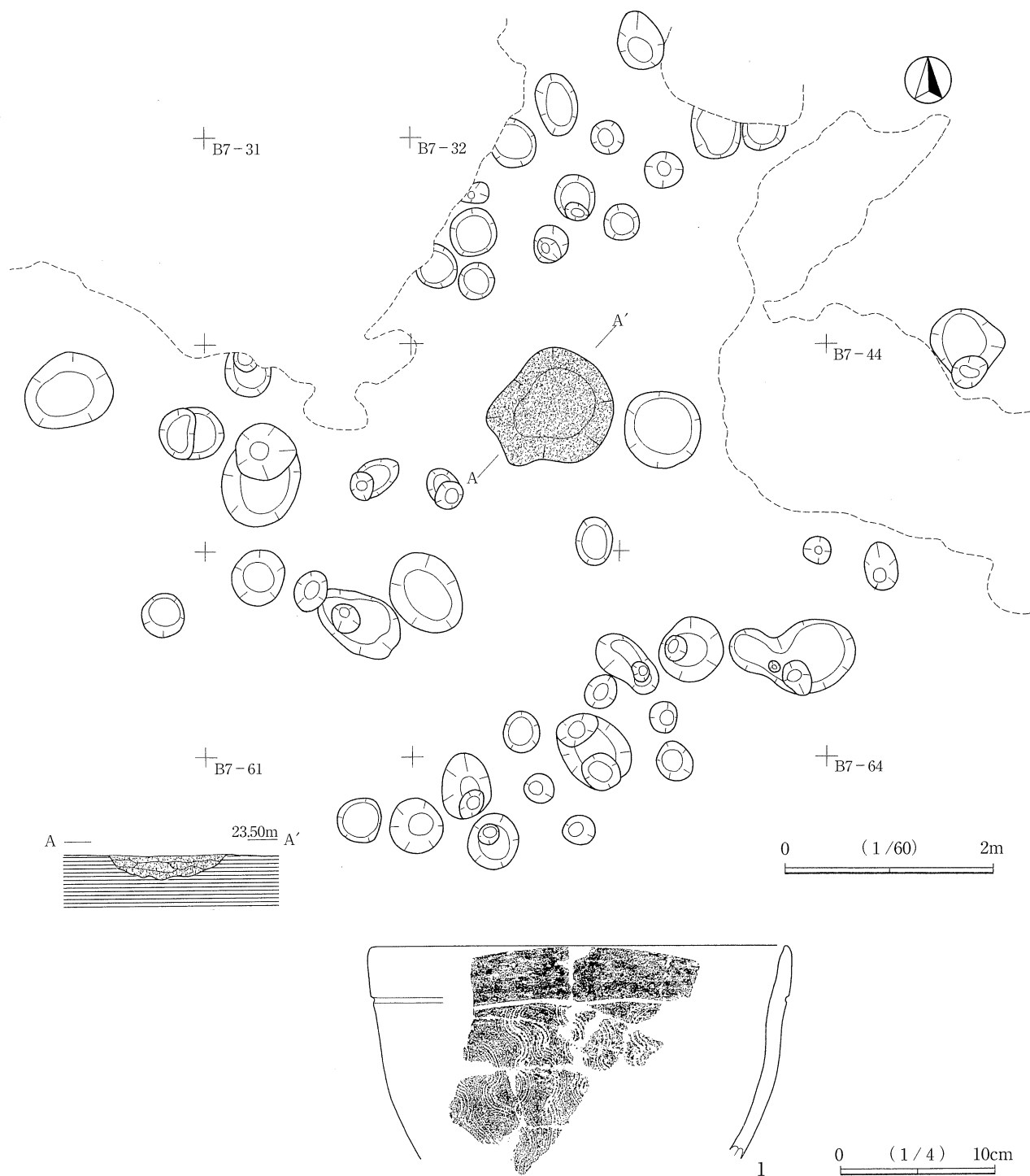
006号跡（第14図）

位置 B6-58グリッドを主体に検出された。西側本調査区の北寄りに位置している。

形態 検出時に焼土が充満した楕円形の土坑が検出され、周囲からピットが検出されたことから竪穴住居跡の可能性が考えられる遺構である。しかし、005号跡と同じく竪穴の掘り込みが検出されておらず、周囲のピットも規則性のある配置を認めにくい。ピットの深さは20cm～30cm前後のものが主体である。平面図からはピットが円形に並んでいるようにも見られるが周囲の攪乱によってそのよう

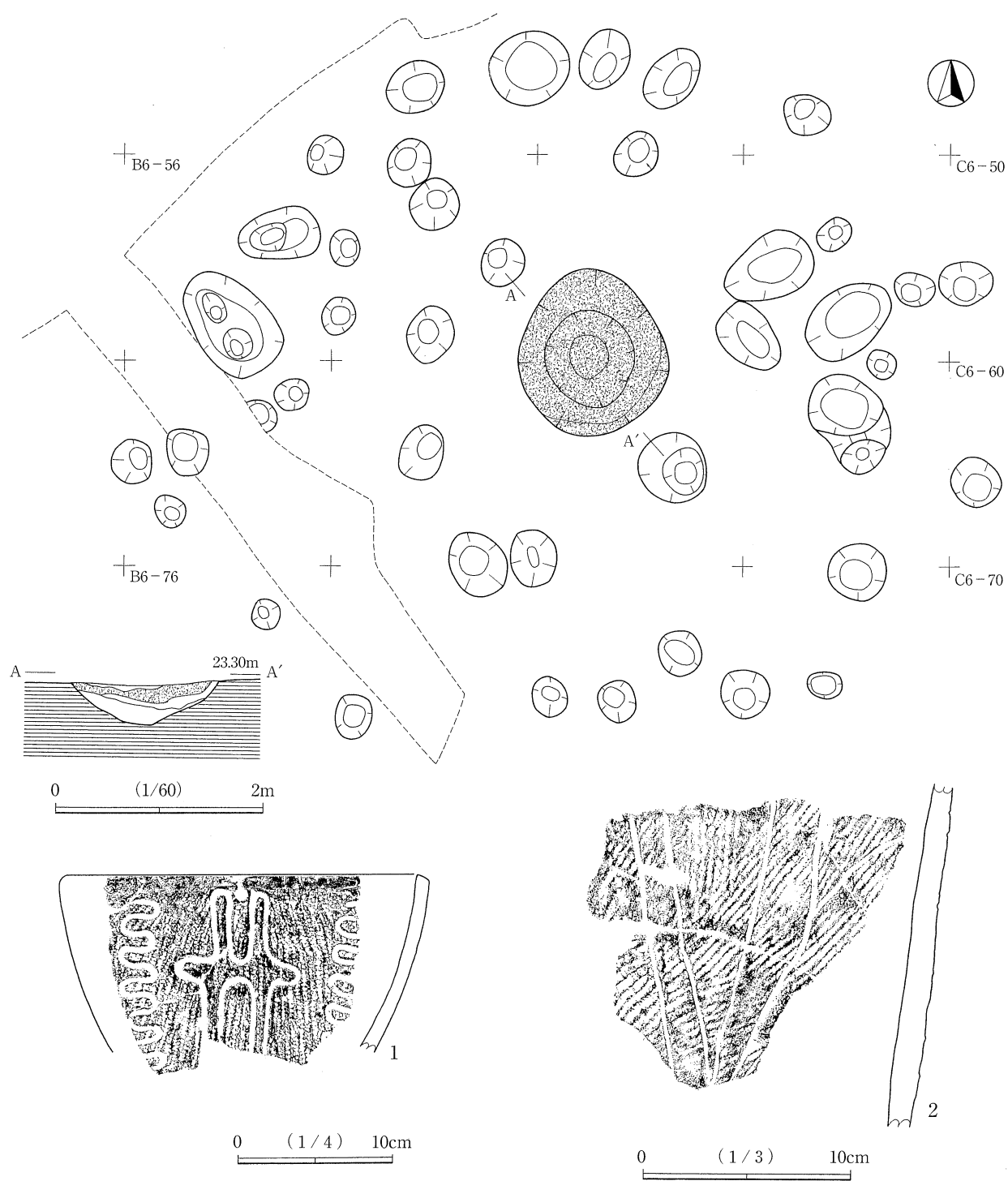


第12図 004号跡及び出土遺物



第13図 005号跡及び出土遺物

に見える可能性もある。また、中央の焼土を伴う土坑は、炉と考えるには長径が165cmもあることも竪穴住居跡とするには難しい要素であるかもしれない。このため、竪穴住居跡としての規模を示さずに掲載した。仮にピットが検出された範囲を竪穴の規模とすれば、直径8m前後の大きな規模の竪穴である可能性がある。検出された土坑は、楕円形を呈し長径165cm、短径145cm、深さは検出面から40cmである。覆土は4層に分層され上層に焼土が堆積していた。



第14図 006号跡及び出土遺物

遺物出土状況 大きな破片が2点出土している。蛇行沈線文とH字状沈線文を伴う浅鉢と蕨手文と思われる沈線文を伴う深鉢が出土している。堀之内I式前葉の時期と考えられる。

2. 貝 層

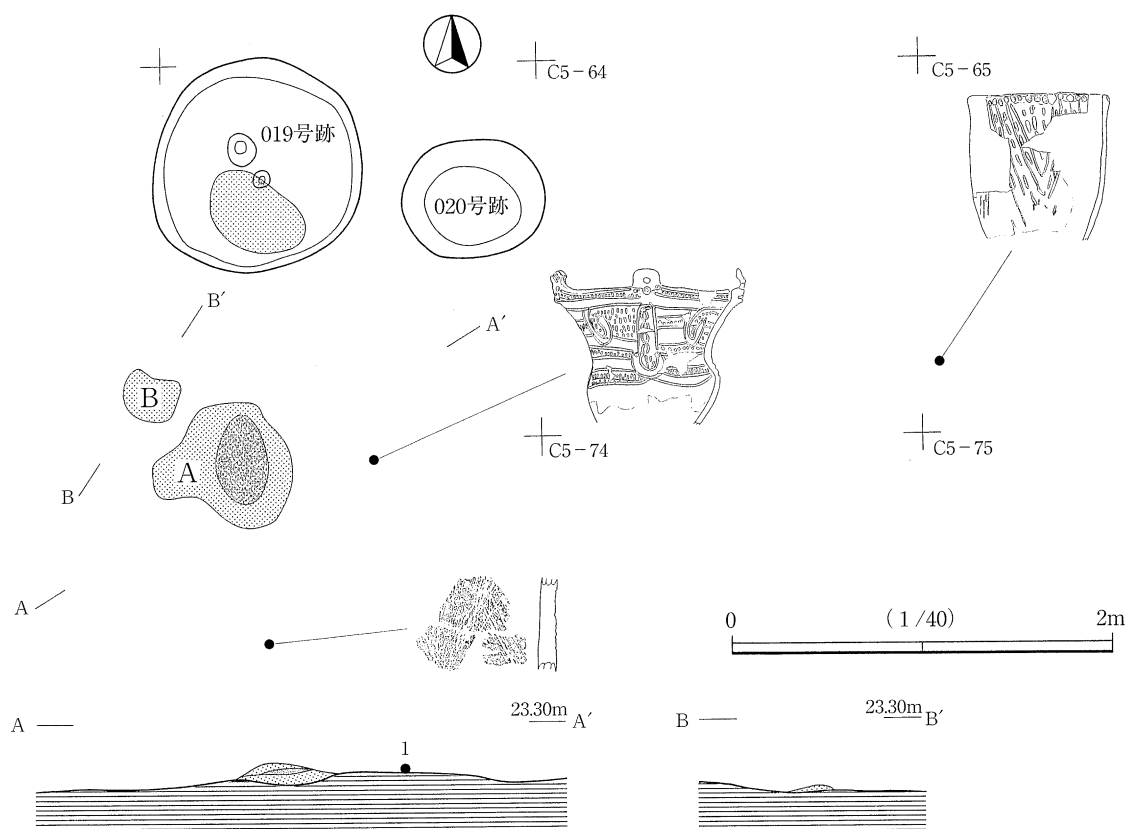
遺構に伴わない貝層が3地点で検出された。各貝層の規模はいたって小規模で貝層の厚さも薄いものであった。竪穴住居跡内に廃棄された貝層とともに北野原遺跡は、いわゆる地点貝塚であると考えることができる。

007号跡（第15～16図）

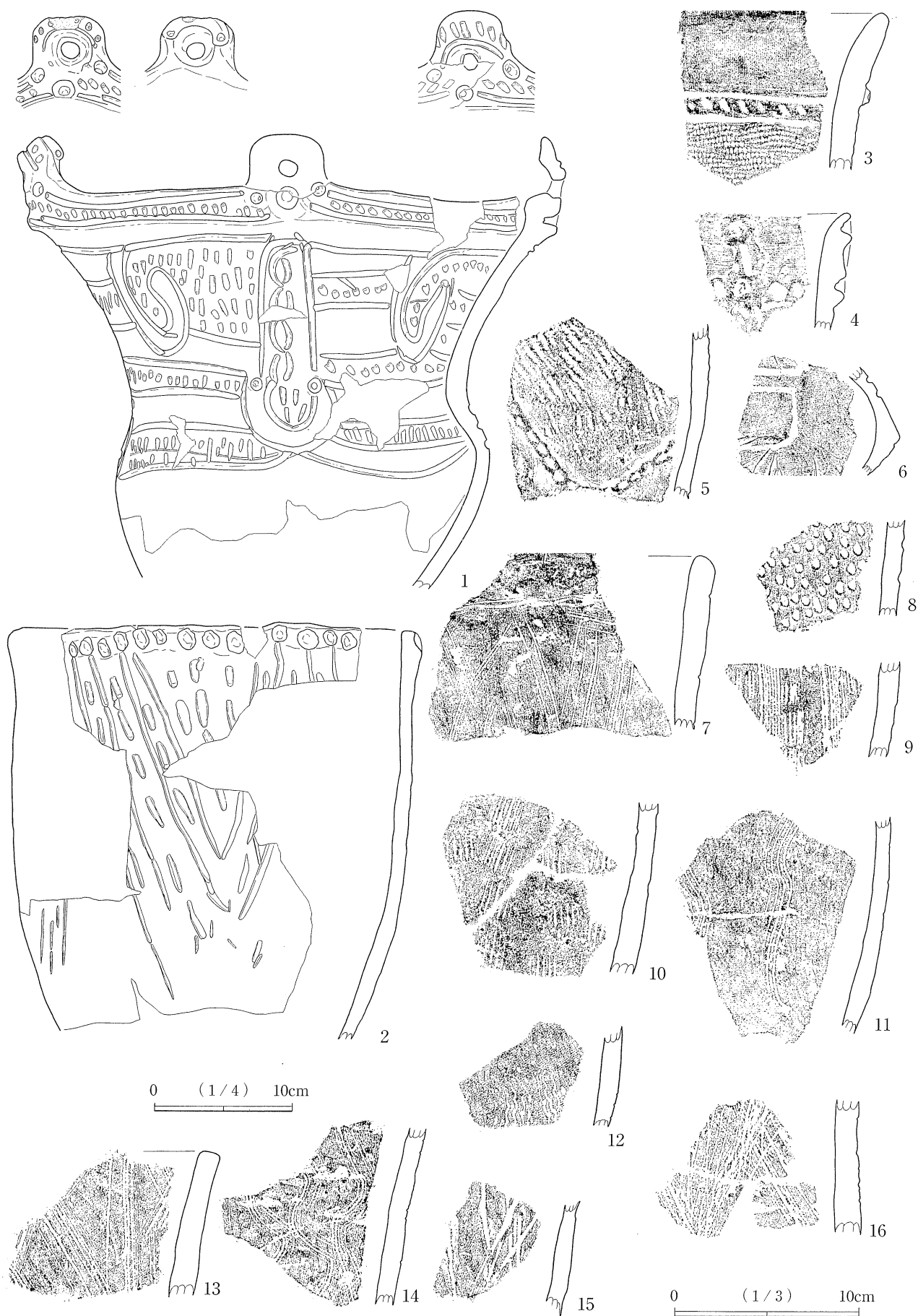
位置 C5-63 グリッドを主体に検出された。西側本調査区の北側に位置している。貝層の北側には019号跡・020号跡の2つの土坑が隣接している。

堆積状況 貝層は、A・Bの2ブロックからなる。Aブロックの堆積層厚は最大で23cmで、面積は0.33㎡を計る。平均層厚から求められる貝層の体積は約0.056㎡である。貝層の間に薄い灰層が含まれていた。また、Bブロックの堆積層厚は、最大で7cmで面積は0.06㎡を計る。平均層厚から求められる貝層の体積は約0.004㎡である。A・Bブロックを合わせた土を含む貝層の体積は約0.064㎡である。A・Bブロックの貝層は、ハマグリを主体とする混土貝層である。貝層中に灰が少量混入していた。貝層の分析は時間的制約があり実施できなかった。

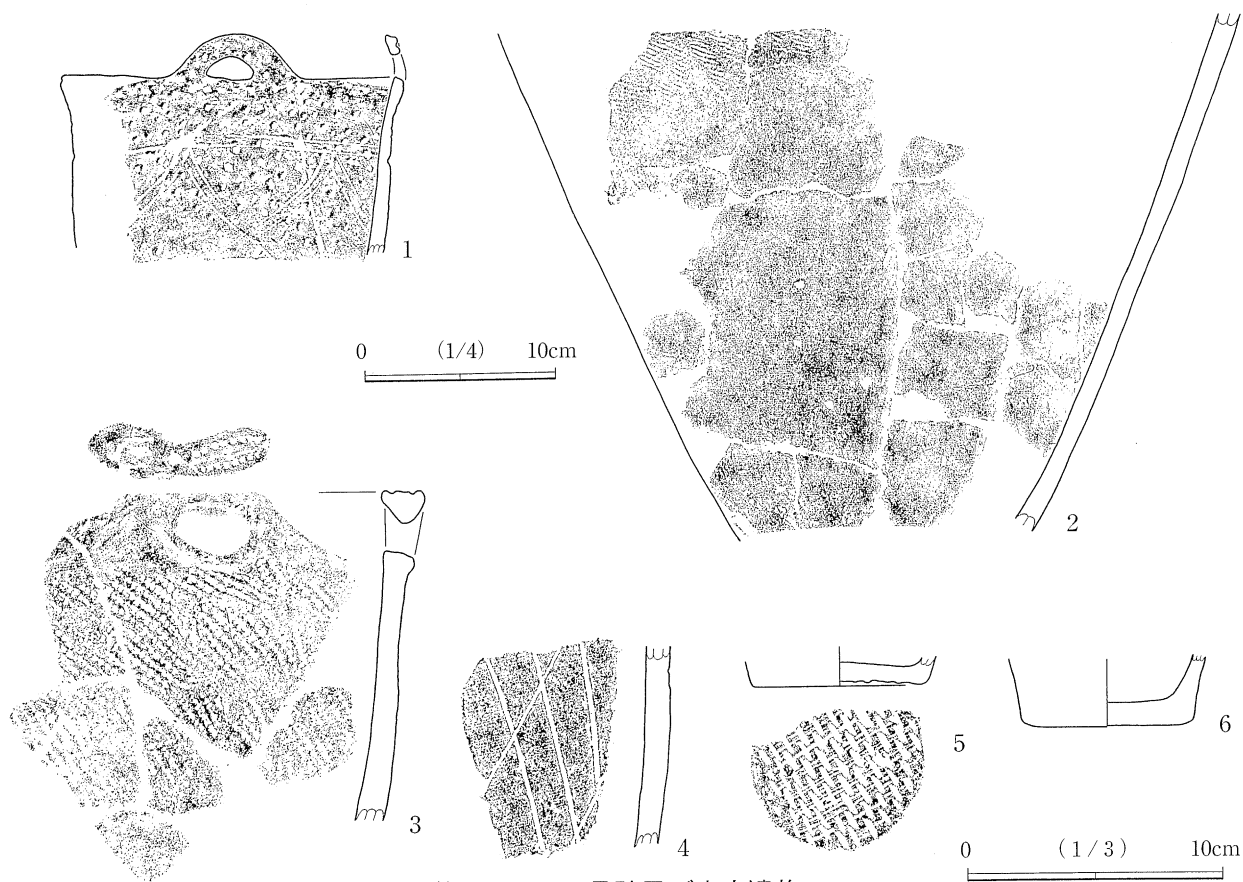
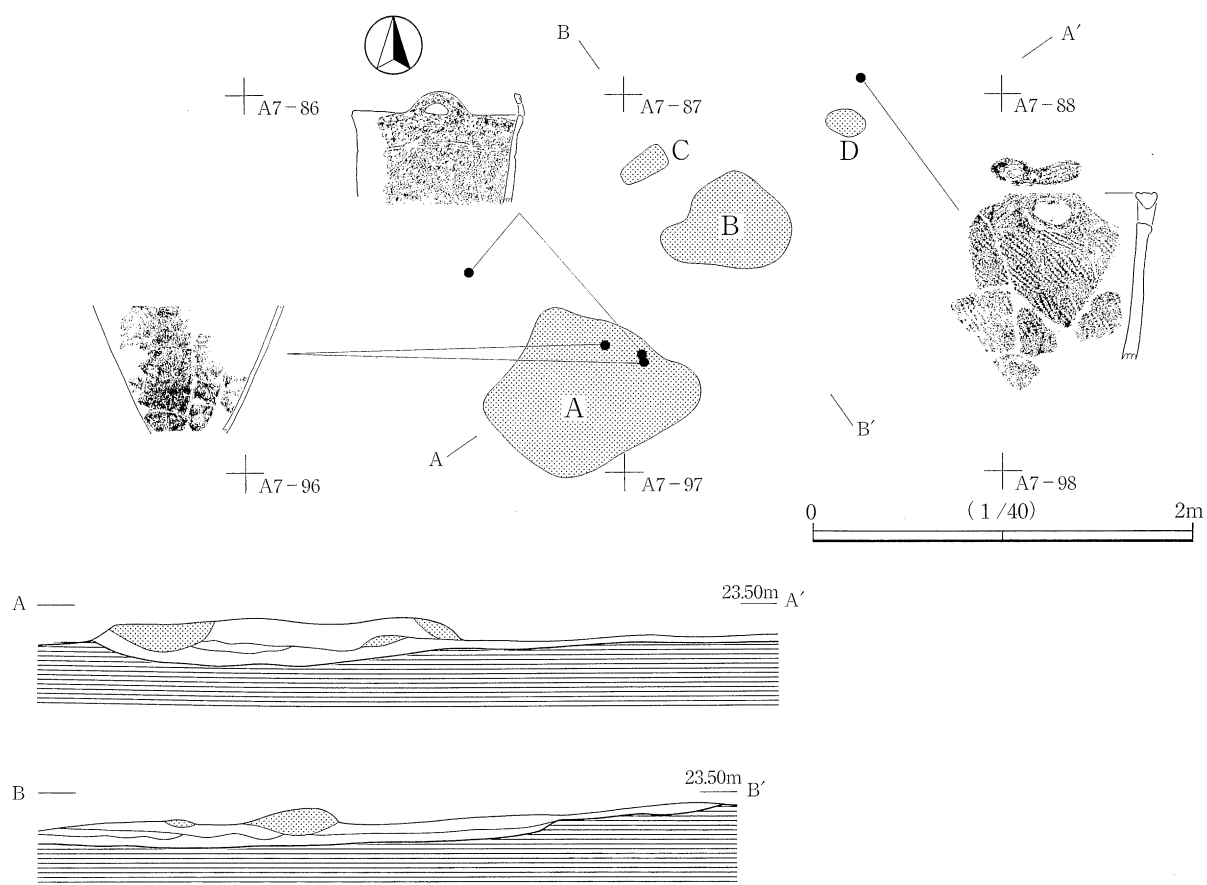
遺物出土状況 貝層内から出土した土器はなく、貝層の時期を特定しにくい、貝層周囲の包含層から比較的多くの土器が出土している。第16図1はAブロックの東側から横倒しに潰れた状態で検出された土器である。また、2は4mほど離れてはいるが、やはり横倒しの状態で出土している。このほかに出土している土器も称名寺Ⅱ式並行の時期と思われ、他の時期の土器を見いだせなかったことから貝層は、ほぼこの称名寺Ⅱ式期に廃棄されたものと考えられる。



第15図 007号跡



第16图 007号迹出土遺物

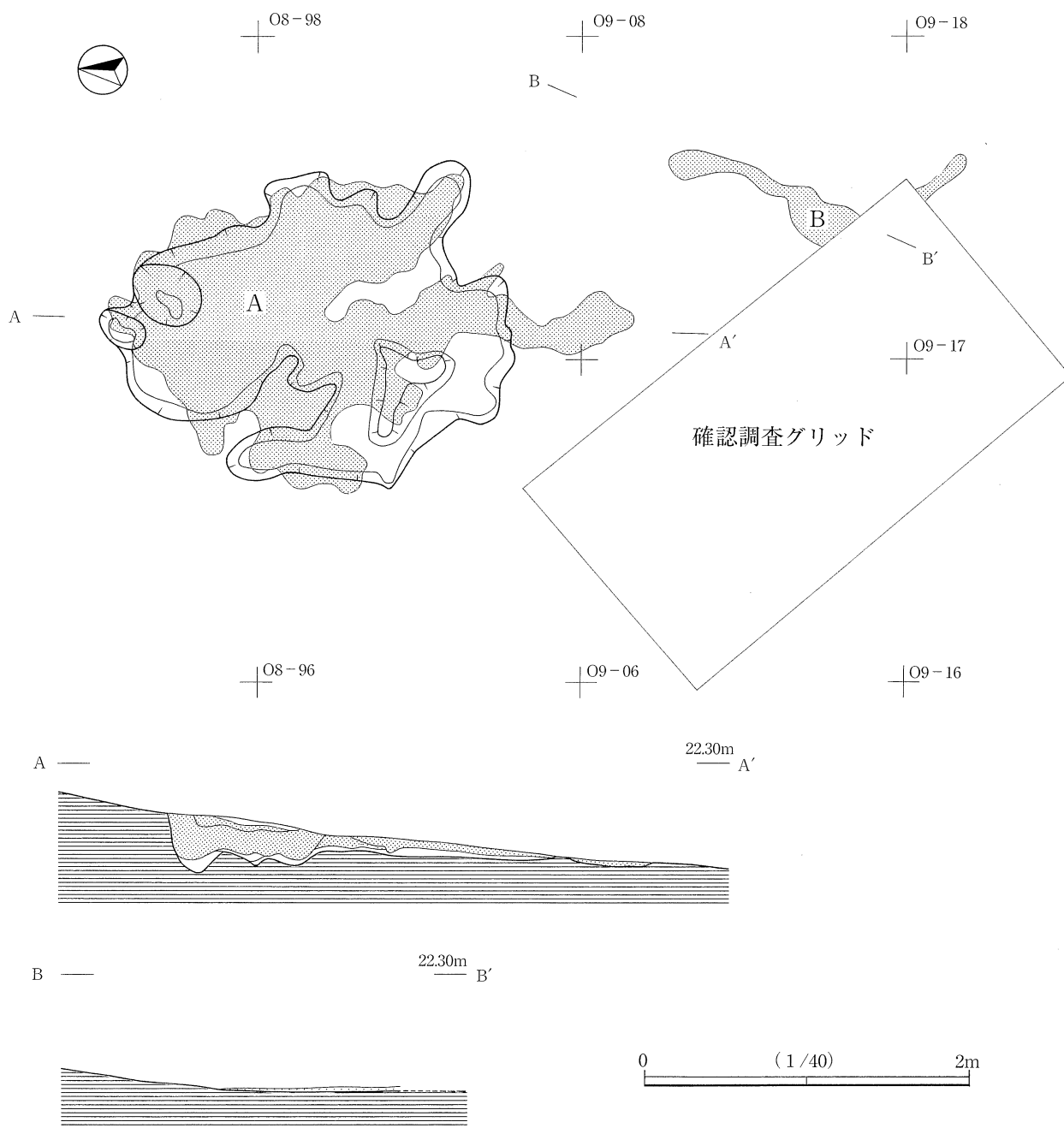


第17図 008号跡及び出土遺物

008号跡（第17図）

位置 A7-86 グリッドを主体に検出された。西側本調査区の南側に位置している。

堆積状況 貝層は、A・B・C・Dの4ブロックからなる。Aブロックの堆積層厚は最大で30cmで、面積は0.62㎡を計る。平均層厚から求められる貝層の体積は約0.12㎡である。Bブロックの堆積層厚は最大で16cmで、面積は0.23㎡を計る。平均層厚から求められる貝層の体積は0.023㎡である。Cブロックの堆積層厚は最大で18cmで、面積は0.02㎡を計る。平均層厚から求められる貝層の体積は0.004㎡である。Dブロックの堆積層厚は最大で8cmで、面積は0.03㎡を計る。平均層厚から求められる貝層の体積は0.003㎡である。A～Dブロックを合わせた貝層の土を含む体積は0.357㎡である。A～Dブロックの貝層は、純貝層でハマグリを主体とし、灰が少量混入する。貝層の分析は時間的制約があり実施



第18図 009号跡

できなかった。

遺物出土状況 貝層内から少量だが土器が出土している。第17図1はAブロックから検出されている。また、2も近接した地点から出土している。3はCブロックの近くから出土している。出土した土器は称名寺式並行の時期と思われ、他の時期の土器を見いだせなかったことから各ブロックの貝層は、ほぼこの称名寺式期に廃棄されたものと考えられる。

009号跡（第18図）

位置 D8-96 グリッドを主体に検出された。東側本調査区の南寄りに位置している。

堆積状況 貝層は、A・Bの2ブロックからなる。Aブロックの堆積層厚は最大で28cmで、面積は2.74㎡を計る。平均層厚から求められる貝層の体積は約0.329㎡である。Bブロックの堆積層厚は最大で8cmで、面積は0.28㎡を計る。平均層厚から求められる貝層の体積は0.02㎡である。A・Bブロックを合わせた貝層の土を含む体積は0.349㎡である。A・Bブロックの貝層は、ハマグリの破碎貝を主体とする混土貝層である。貝類組成の分析は、時間的制約があり実施しなかった。

遺物出土状況 貝層内からの出土遺物はなく、時期を特定することは困難であるが、先に記した007号及び008号跡の堆積時期及び東側本調査区から出土している縄文土器の時期から称名寺式から堀之内Ⅰ式にかけての堆積と推測される。

3. 土 坑

概 要

発掘調査によって検出された土坑のうち、遺物を伴って時期等を明確にできる土坑は少ない。縄文時代の土坑と判断できるものは全部で12基である。時期は、縄文時代後期称名寺式Ⅱ式から堀之内Ⅰ式に限られている。土坑の形態には、共通性があまりなく形態の分類等に行いにくい。12基のうち、7基に貝のブロックが認められた。

010号跡（第19図）

位置 C7-22 グリッドで検出された。西側本調査区に含まれているが、確認調査の段階で調査を終了している。本土坑の周囲に小ピットが検出されているが関連性はあまり見いだされない。

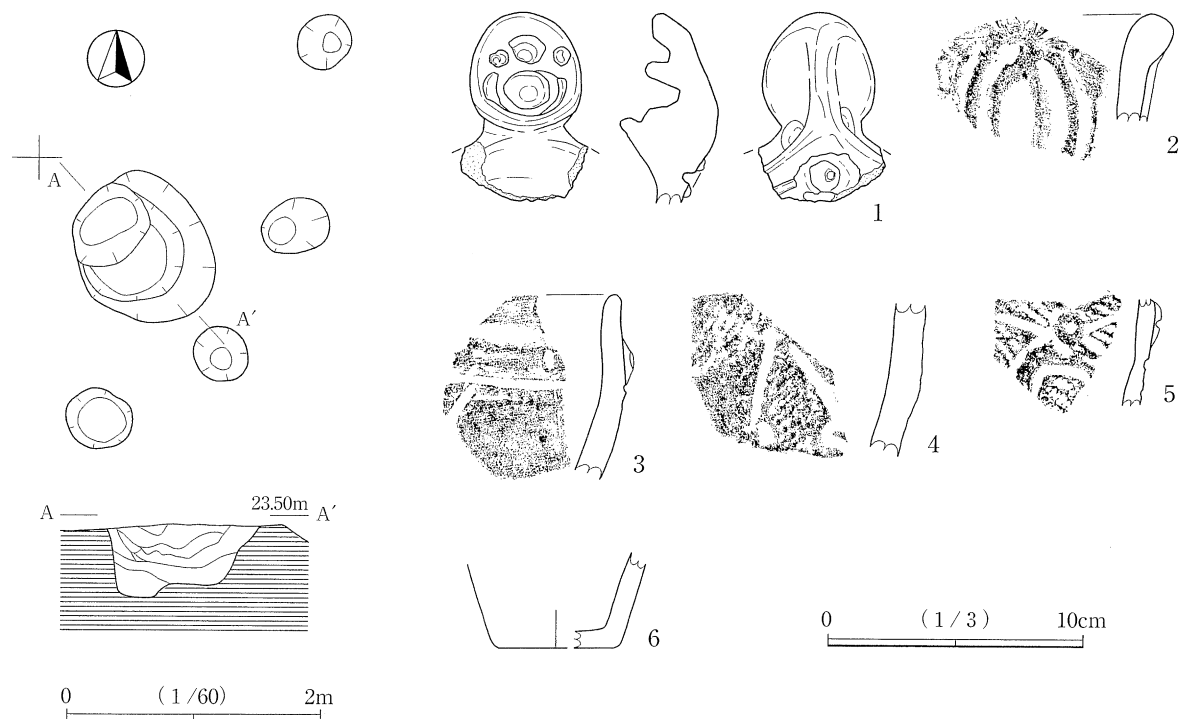
形態 やや歪む楕円形を呈し、長径1.23m、短径1.06mである。検出面からの深さは0.67mである。覆土は暗褐色土を主体する。

遺物出土状況 覆土中から遺物が比較的多く出土しているが、みな小破片であった。出土土器から本土坑は、称名寺式Ⅱ式から堀之内Ⅰ式にかけての時期と考えられる。

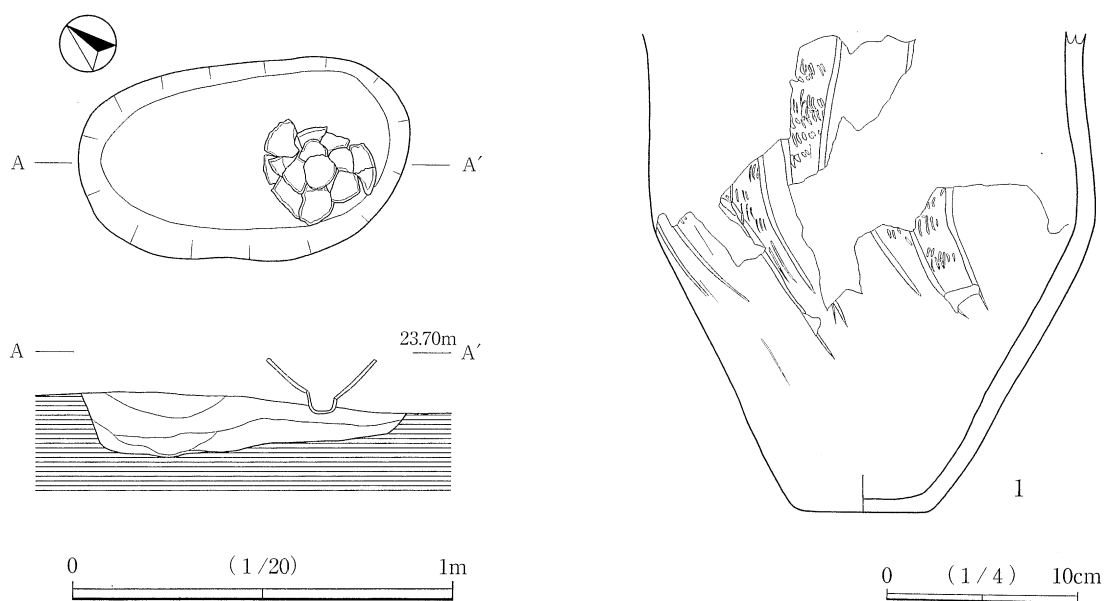
011号跡（第20図）

位置 D7-44グリッドで検出された。調査区の中央に位置し、周囲に縄文時代の遺構は検出されていない。形態 楕円形を呈し、検出時には割れてはいたが深鉢が正位の状態検出された。長径0.88m、短径0.53mである。検出面からの深さは0.17mである。あるいは埋甕の可能性も考えられるであろうが、一般的な埋甕に比べ深鉢の周囲の掘り込みが広すぎるかもしれない。覆土は暗褐色土を主体とする。

出土した深鉢は、口縁部を欠いている。二本の垂下する沈線の間に櫛状工具による刺突文を施している。称名寺Ⅱ式である。



第19図 010号跡及び出土遺物



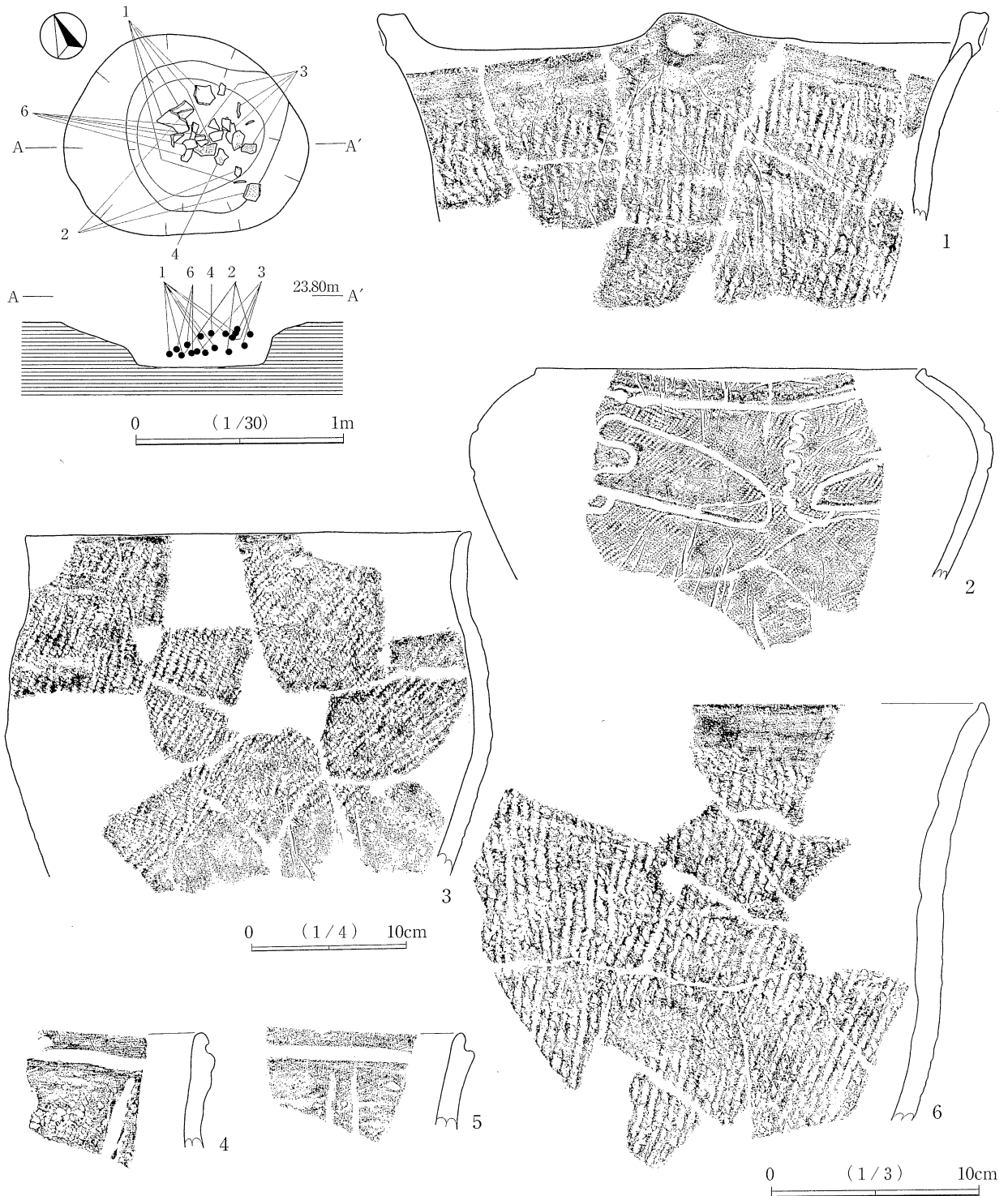
第20図 011号跡及び出土遺物

012号跡（第21図）

位置 B8-00グリッドで検出された。西側本調査区の南に位置している。

形態 ほぼ円形を呈し、直径約0.96m、検出面からの深さは0.4mである。覆土は暗褐色土を主体とする。

遺物出土状況 覆土中位から土器がまとまって出土している。比較的大きな破片で出土しているが、



第21図 012号跡及び出土遺物

形態が完全に復元できた個体はない。出土した土器はすべて堀之内Ⅰ式で占められており、本土坑はこの時期に属するものと考えられる。

013号跡（第22図）

位置 B6-82グリッドで検出された。西側本調査区の中央に位置し、竪穴住居跡の001号跡に隣接している。

形態 楕円形を呈し、長径2.15m、短径1.22mである。検出面からの深さは0.22mである。覆土は暗褐色土を主体とし、検出面中央に混貝土層が検出されている。貝層はハマグリとイボキサゴを主体としている。貝種組成については第4節で詳述する。底面にピットが検出されており、床面からの深さは7cmである。

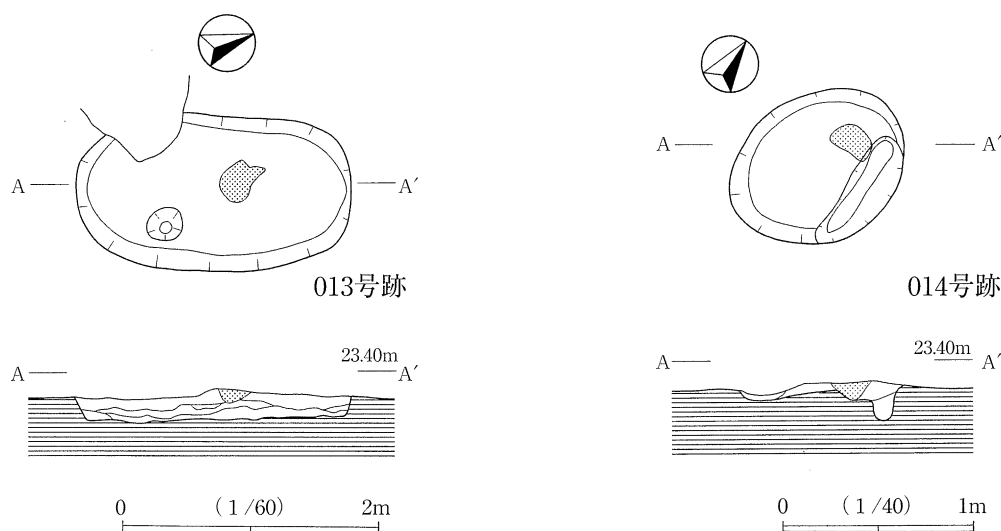
遺物出土状況 出土遺物は皆無であるが、貝層と覆土の状況から他の土坑と同じく縄文時代後期前葉の時期と推測される。

014号跡（第22図）

位置 A7-26グリッドで検出された。西側本調査区の最も西側に位置している。

形態 遺存状態は悪く、検出面からの深さはほとんどない。やや楕円形を呈し、長径0.98m、短径0.79mである。検出面からの深さは、最も深い溝状の部分で0.12mである。覆土は暗褐色土を主体とし、検出面に混貝土層が検出されている。貝層はハマグリを主体とし若干のシオフキとイボキサゴが混入する。貝種組成については第4節で詳述する。

遺物出土状況 出土遺物は皆無であるが、貝層と覆土の状況から他の土坑と同じく縄文時代後期前葉の時期と推測される。

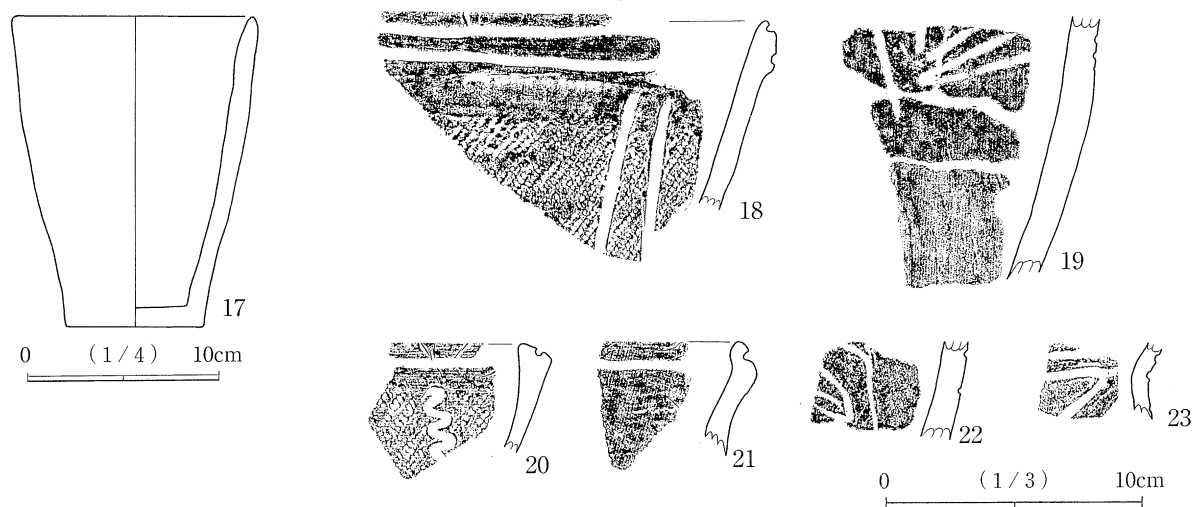
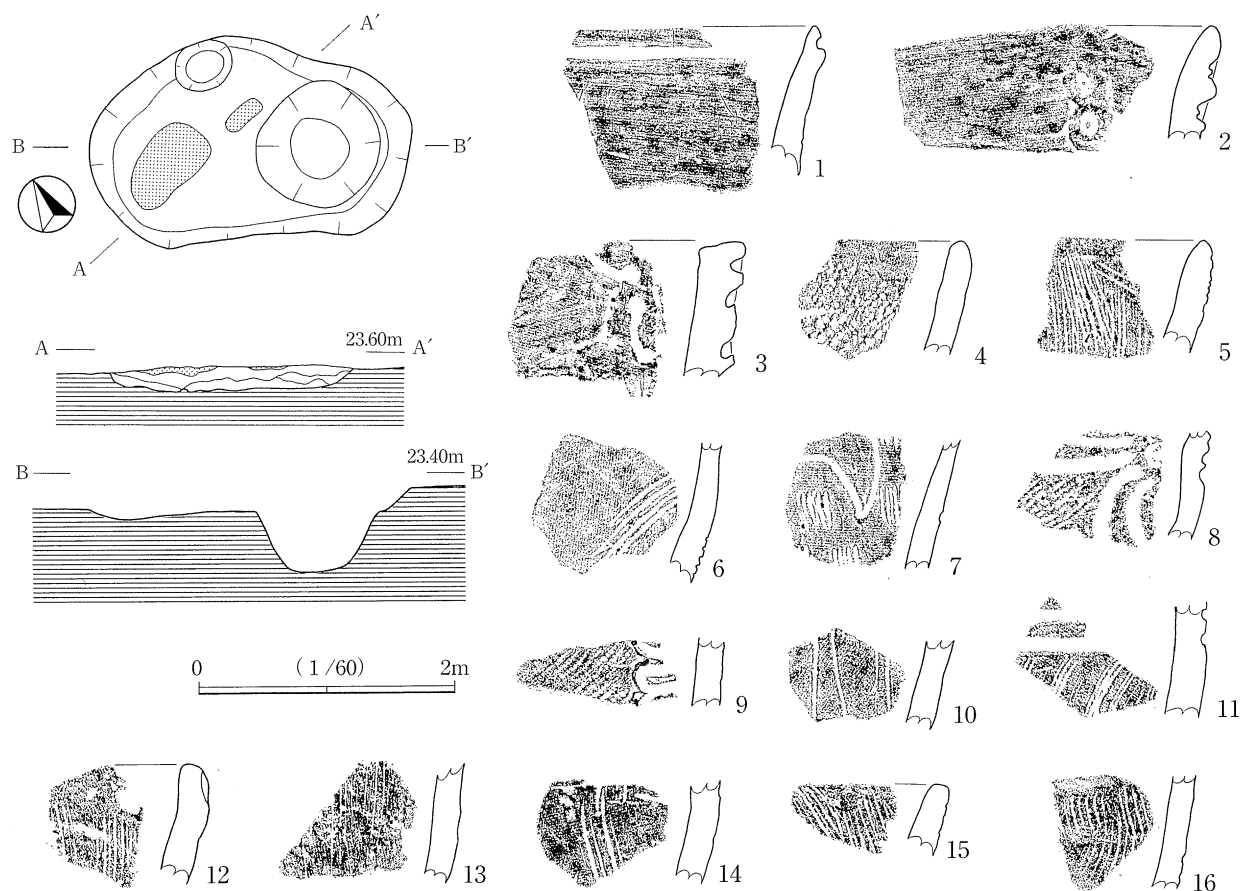


第22図 013号跡・014号跡

015号跡（第23図）

位置 B6-73グリッドで検出された。西側本調査区の中央に位置し、013号跡に隣接している。

形態 やや歪みのある楕円形を呈し、長径2.55m、短径1.60mである。土坑内に深いピットを伴ってい



第23図 015号跡及び出土遺物

る。検出面から底面までの深さは0.15m、底面から深いピットの底面までは0.45mである。検出面で貝のブロックが2か所認められたが堆積層厚は5cm程度しかなく、きわめて微量である。貝の混入量が少ない混貝土層で、ハマグリを主体とする。時間的な制約があり分析対象からはずしたため、貝種組成については提示できなかった。

遺物出土状況 出土遺物は比較的多く出土しているが、小さな破片が主体である。土器の出土状況は、

土坑内から出たものと、ピット内から出たものに分けられる。17～23がピット内から出土しているもので、土坑覆土中のものと若干時期差があるかもしれない。17～23は堀之内Ⅰ式前葉と思われるもので、土坑内から出土した土器には称名寺Ⅱ式の土器が含まれている。ピットの方が土坑よりも若干新しい可能性がある。

016号跡（第24図）

位置 C6-12グリッドで検出された。西側本調査区の北側に位置している。

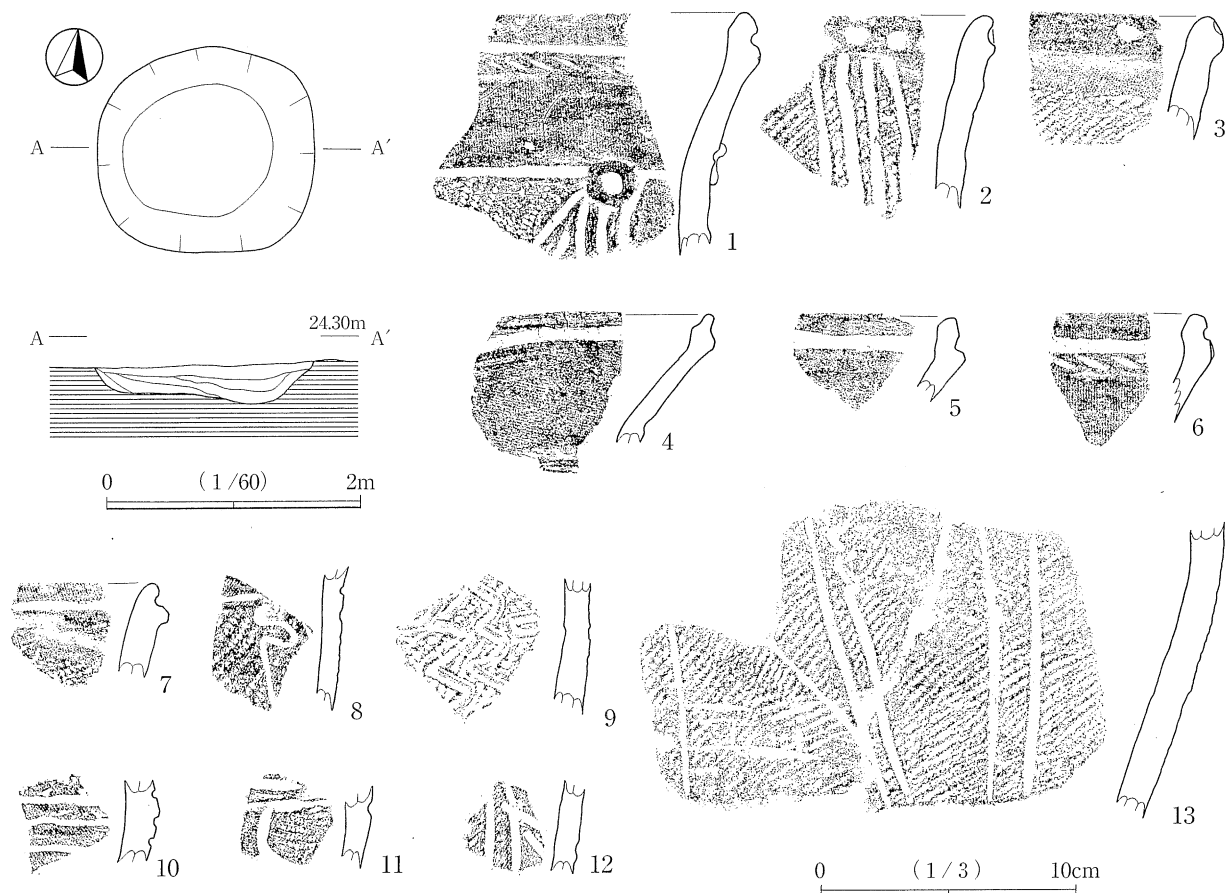
形態 遺存状態は悪く、検出面からの深さはほとんどない。やや楕円形を呈し、直径は1.70mである。検出面からの深さは、最も深い部分で0.29mである。

遺物出土状況 出土遺物は比較的多く出土しており、すべて堀之内Ⅰ式で占められている。このほかの出土遺物では土器片・土器片・土器片2点が出土している。

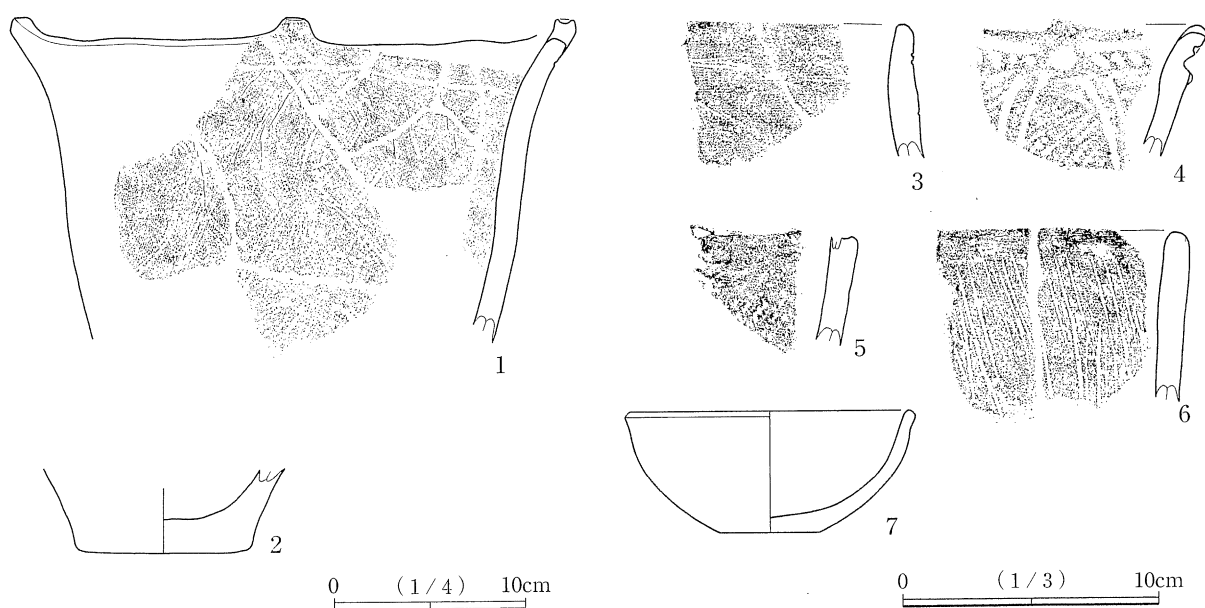
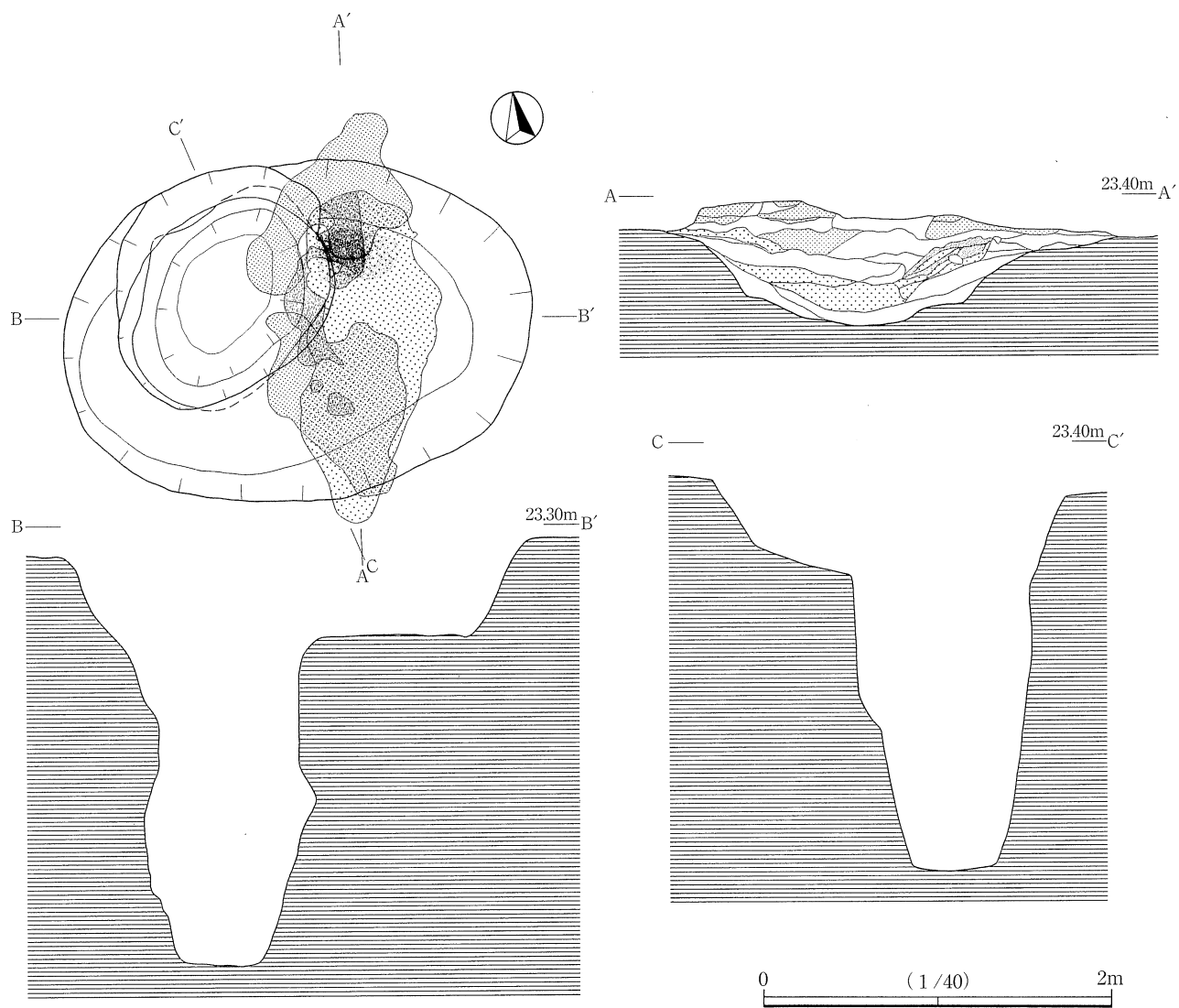
017号跡（第25図）

位置 C6-04グリッドで検出された。西側本調査区の北側に位置している。

形態 楕円形を呈し、北西側に深いピットを伴っている。長径は2.70m、短径は、1.94m、検出面からの深さは、0.55mである。また、底面の深いピットは、底面から1.68mもある。この深いピットと土坑とは切り合い関係にはない。調査開始時点では薄い貝層が検出され、掘り進むうちに焼土と灰が充填していることが判明した。貝層は薄く範囲も限られている。7層に分層されたが、各貝層の違いは極端



第24図 016号跡及び出土遺物



第25図 017号跡及び出土遺物

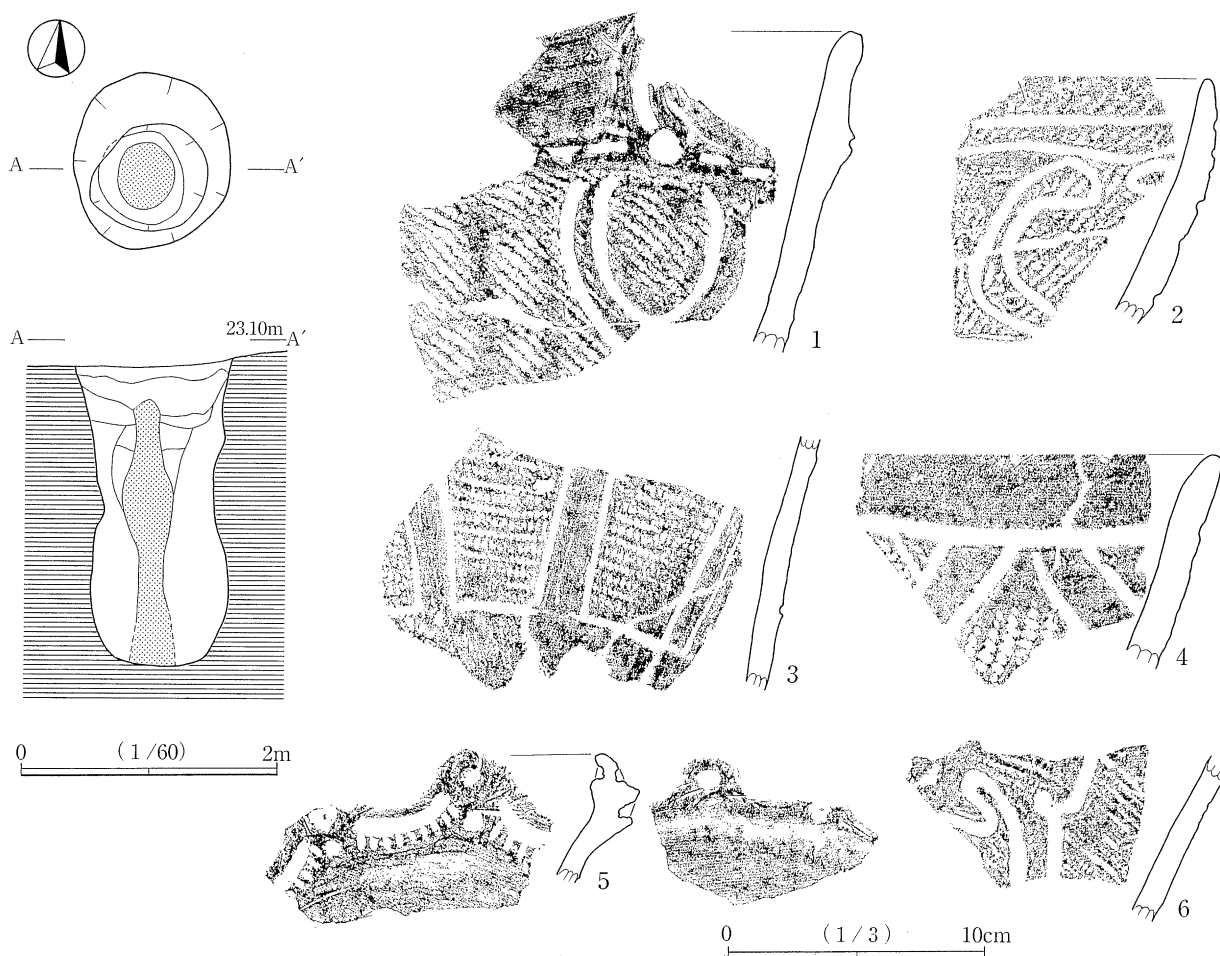
にはなく、ハマグリを主体とし、シオフキ、イボキサゴなどを混入する。貝種組成については第4節で詳述する。検出された貝は土坑が埋まる過程で凹地となったところに廃棄されたと思われるが、焼土と灰は土坑とあまり時期差を持っていないのではないと思われる。竪穴住居に見られる炉に比べ規模が大きいうえ、多量の焼土と灰の存在は屋外で大規模に火を焚いたことを示していると考えられる。検出された焼土は硬く焼きしまった状態で、高熱で多量の焼土が生成する作業が行われたものと思われる。

遺物出土状況 出土土器は比較的多く、すべて堀之内Ⅰ式で占められている。このほかの出土遺物では土器片錘1点が出土している。

018号跡（第26図）

位置 C5-80グリッドで検出された。西側本調査区の北側に位置している。

形態 円形を呈し、直径は1.25m、検出面から底面までの深さは、2.40mである。底面までの深さが異常にあり、検出面から約25cm掘り込んだ位置から貝層が検出されはじめ、ほぼ底面まで土坑の中央に柱状の貝層が認められた。貝層はハマグリを主体とするがイボキサゴの混入も多く、シオフキ・アサリなど貝種に富んでいる。貝種組成については第4節で詳述する。貝の堆積状況は特殊な条件での堆積経緯を示していると考えられ、検出された土坑に当初は柱のような棒が埋め込まれており、この柱



第26図 018号跡及び出土遺物

が抜き取られた後の空洞に貝が捨てられたといった状況が考えられる。本土坑の周辺にはピットなど他の遺構が検出されていないことから、竪穴住居跡の一部とは考えにくく、特殊な土坑であると言えよう。

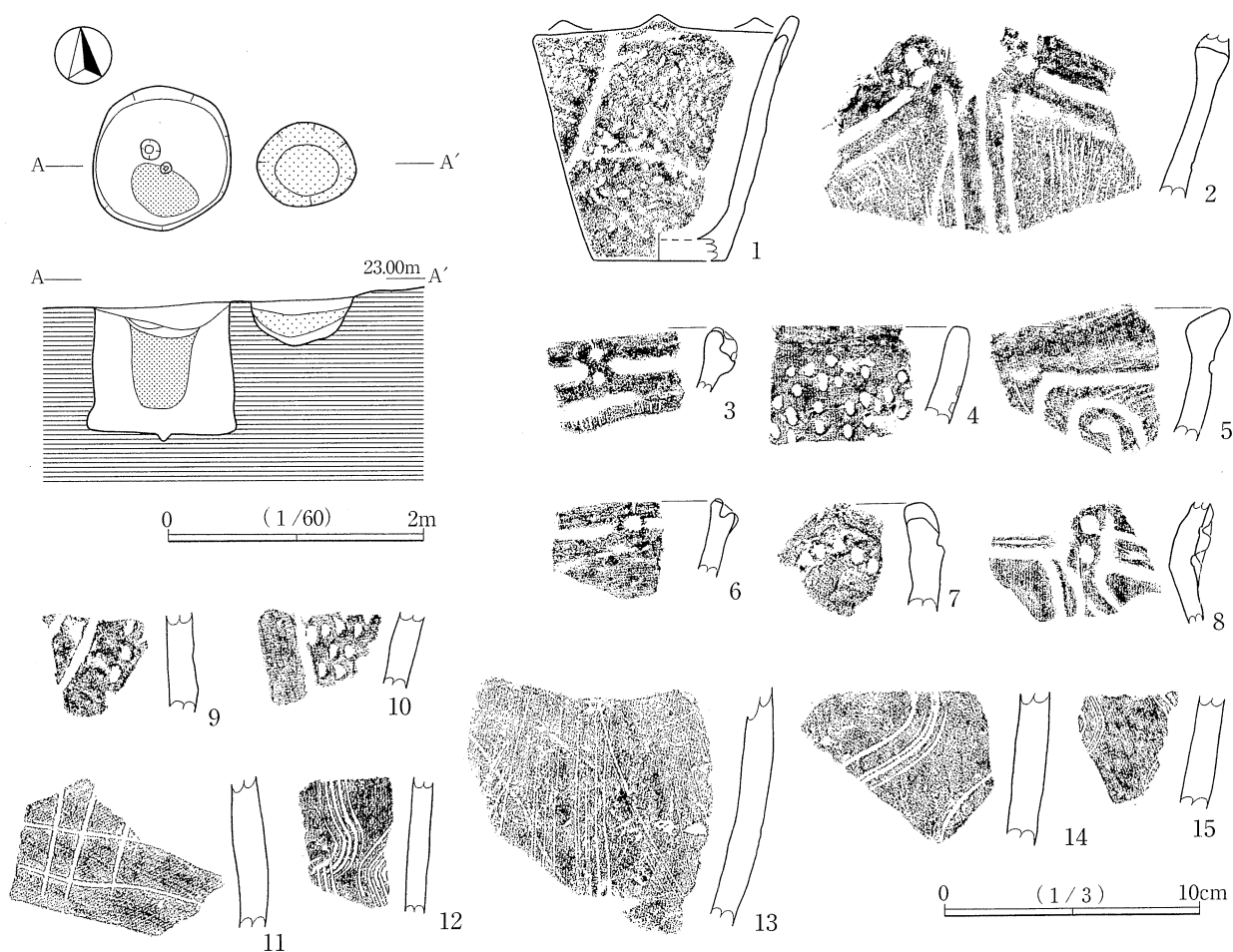
遺物出土状況 出土土器は比較的多く、堀之内Ⅰ式で占められている。このほかの出土遺物は土器片錘2点、土器片円盤1点、石皿1点、貝刃3点などである。

019号跡（第27図）

位置 C5-52グリッドで検出された。西側本調査区の北側に位置している。020号跡が隣接している。

形態 円形を呈し、直径は1.10m、検出面から底面までの深さは、0.99mである。検出面から約20cm掘り込んだ位置から貝層が検出されはじめ、深さ約60cmの柱状の堆積ブロックが認められた。貝層はハマグリ・イボキサゴを主体とし、シオフキ・アサリ・カガミガイなど貝種に富んでいる。貝種組成については第4節で詳述する。土坑底面には小ピットが検出されている。

遺物出土状況 出土土器は比較的多く、称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式にかけての土器が出土している。このほか貝刃2点が出土している。



第27図 019・020号跡及び出土遺物

020号跡（第27図）

位置 C5-53グリッドで検出された。西側本調査区の北側に位置している。019号跡が隣接している。

形態 円形を呈し、長径は0.74m、短径は0.63m、検出面から底面までの深さは、0.34mである。覆土が3層に分層され、第2層は純焼土であった。また、3層は熱を受けブロック状になったロームが認められ、炉のように使われたものと考えられる。019号跡と関連があるのかは不明である。

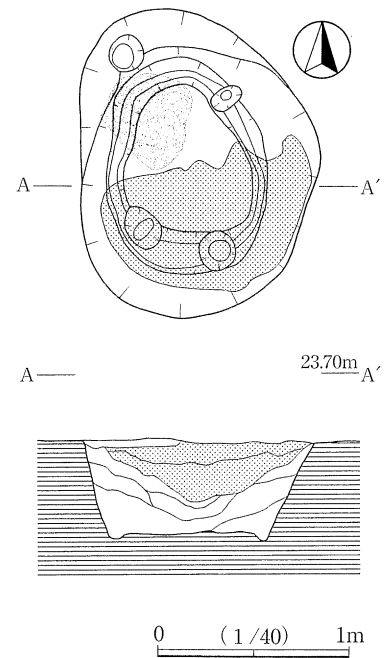
遺物出土状況 出土土器はなく、隣の019号とは対照的である。

021号跡（第28図）

位置 F7-41グリッドで検出された。調査区の東側、方形周溝状遺構027号跡の東側に位置している。

形態 不整楕円形を呈し、長径は1.30m、短径は1.26m、検出面から底面までの深さは、0.52mである。検出面で貝層と炭化物を多く含む部分が認められた。炭化物を含む部分は攪乱の可能性が高い。貝層は覆土中位にレンズ状に堆積していた。貝層はハマグリが圧倒的に多く、シオフキが若干混入するだけの限られた貝種組成である。貝種組成については第4節で詳述する。土坑の底面壁際には溝が巡っており、小ピットが認められた。

遺物出土状況 出土土器はほとんどなく縄文時代後期前葉と思われる土器片2点と、土師器片1点、貝層中から貝刃1点が出土している。3点の土器片は検出面近くから出土し、攪乱を受けている可能性があり、土坑の時期を決める根拠に乏しい。他の貝層を伴う土坑の状況から、本土坑も縄文時代後期の可能性が高いと考えられる。



第28図 021号跡

4. 遺構外出土縄文土器

出土した縄文土器は早期、前期、中期、後期に及んでいるが、後期を除けば極めて微量であった。今回の調査区内では早期から中期の遺構は検出されておらず、土器を除けばこれらの時期の痕跡は極めて希薄である。ただ、調査区のほぼ全域で、Ⅱ層いわゆる遺物包含層の残りが悪く、表土層からの攪乱を受けている場所が多かったことも一因である。ここでは早期から後期にかけての土器を4群に大別し、さらに細分を行うことにしたい。

第Ⅰ群 早期の土器（第29図1・2）

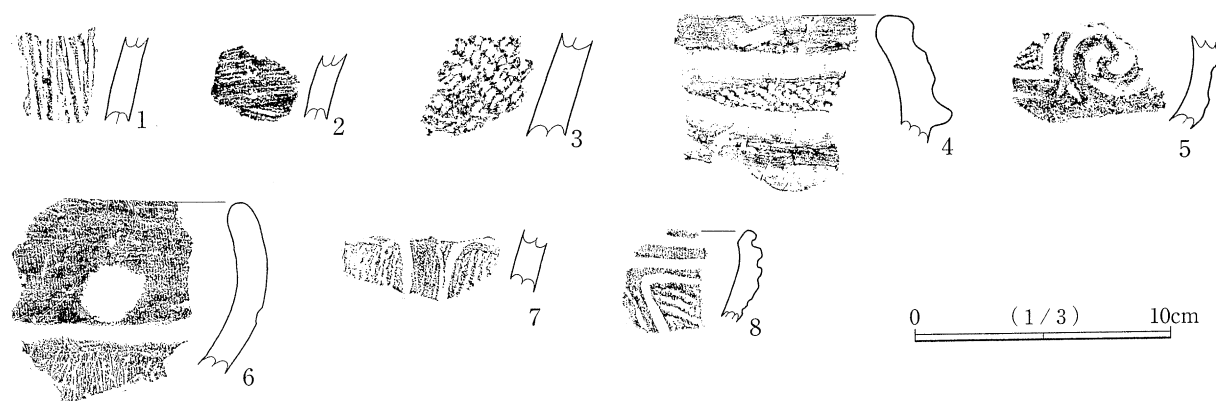
わずか2点の出土である。1は外面にのみ貝殻条痕を伴う。繊維を若干混入する。2は擦痕状の調整痕を外面にとどめている。やはり若干の繊維を混入する。2点とも早期の田戸上層式から野島式にかけての時期と思われる。

第Ⅱ群 前期の土器（第29図3）

1点のみである。繊維を多量に含み、外面にRLの単節縄文を施文している。内面の調整は丁寧である。黒浜式か。

第Ⅲ群 中期の土器（第29図4～8）

わずか5点である。みな加曾利EⅡ式から末葉までの時期と思われる。4はキャリパー形の深鉢の口縁である。5は頸部の無文帯にかかる部分である。6は内湾する鉢形を呈すると思われる。沈線で口縁部の無文帯を画し、櫛状工具による条線を施している。あるいは称名寺式に含まれるかもしれない。7は沈線の区画の中にLの撚糸を施している。8は口縁に深い沈線を施している。沈線の区画内にRL単節縄文を充填している。



第29図 遺構外出土土器 1

第Ⅳ群 後期の土器

最も出土量が多かったのが、本群の土器である。検出された遺構もほぼこの時期に限定されている。称名寺式、堀之内式の土器を主体とし、加曾利B式を微量含んでいる。今回の調査で検出された堅穴住居跡の出土土器は、称名寺式から堀之内Ⅰ式にかけての過渡期の様相を示しており、それぞれの型式に峻別するのがやや難しい状況を呈している。以下各型式を3類に分け、さらに文様で細分する。

第1類 称名寺式を本類とする。(第30・31・34図)

出土した本類の土器は、第2類に次いで多かったが、遺構から出土したものの方が多いようである。量的には称名寺Ⅱ式が主体であり、Ⅰ式の量は限られている。また、条線を施文した深鉢が多く出土しているが、本類のみに限られるわけではなく第2類にふくまれるものもあろう。

a種 縄文を施文した後沈線で区画文を施すもの(第30図9～11、第34図100)。

11は区画文以外の部分は磨り消している。施文される縄文はみなLRの単節縄文である。

b種 沈線で区画した中に列点文などを充填するもの(第30図12～14・16～18)。

沈線は太い棒状工具によって施され、列点文は間隔をややあけて施文される。器面調整は内外面ともに丁寧である。

c種 沈線で区画した中に櫛状工具による連続刺突文を充填するもの(第30図15・19～22)。

櫛の本数は19・22が3本、その他が5本程度である。

d種 沈線による区画を施さず櫛状工具のみによる連続刺突文を施すもの(第30図23・24)

櫛による列点状の刺突文である。24は櫛状工具によってまったくの刺突文のみの構成である。何らかの文様を構成するかもしれない。また、口唇部にキザミを施しており櫛とは違う工具による。この時期の土器でキザミを伴う例は少ない。

e種 沈線のみで文様を構成するもの(第30図25～28、第34図102)

25のように斜行する沈線が交差するもの、曲線文を施すものなどがある。

f種 刺突文を密に施すもの(第30図29～33)

三十稲葉式類似のものが含まれる。29・30は半截竹管による刺突文、31・32は棒状工具による刺突文、33は先端のささくれた棒状工具による密な刺突文である。32は隆帯上とその上下に刺突を施している。また、地点貝層の008号跡から出土した第17図1の土器は全面に刺突文が施され、横位の沈線と山形の沈線文が施文されている。

g種 櫛状工具によって蛇行する条線を施すもの(第30図34～44・第31図45～52)

34～39は細かい波状の条線を施している。40～51は直線状の条線を斜行ないしは垂下させている。52は条線と沈線文が施されている珍しい土器である。条線の文様は称名寺式に限らず堀之内Ⅱ式にも含まれ、さらに中期の段階でも認められ、本種に限定することは難しい。

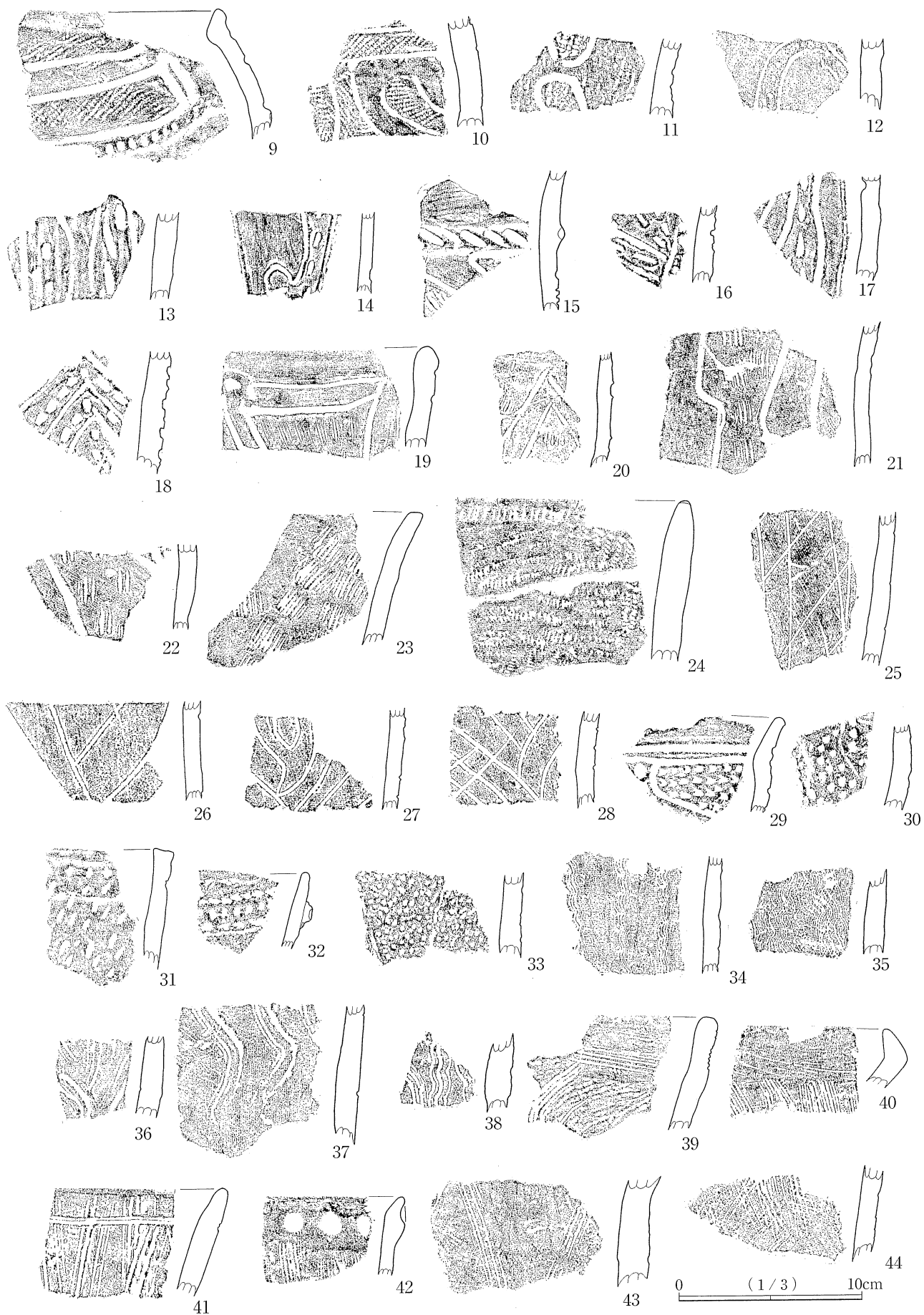
h種 沈線文のみによって文様を施すもの(第34図103)。

103は地文の縄文を伴わず、胴部下位に横位の沈線を巡らせ、鋸歯状に沈線を施している。堀之内Ⅱ式とも思われる文様だが、明らかな堀之内Ⅱ式が1点も出土していないことや008号跡から出土した第17図1に類似した鋸歯状の沈線文があることから称名寺式に含まれるものと考えられる。

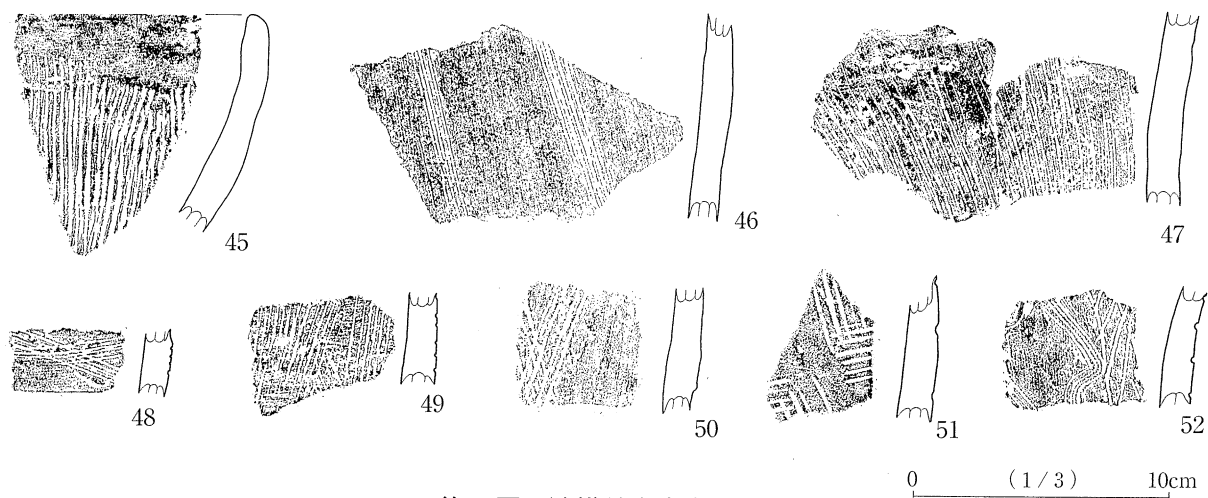
第2類 堀之内Ⅱ式を本類とする。(第32～33図)

出土した本類の土器は、遺構も含めると今回の調査では最も多かった。地文に縄文を施し、その上に沈線で文様を施すものが圧倒的に多く、千葉県すなわち関東南東部の様相をよく示している。出土した堀之内Ⅱ式土器にはⅡ式と思われるものは含まれておらず、Ⅰ式を3段階に分けるとすれば前葉の最も古い段階のものがほとんどを占めている。

a種 C字状ないしはJ字状の貼付文を伴うもの(第32図53～68)。



第30図 遺構外出土土器 2



第31図 遺構外出土土器 3

53～62は口縁部に無文帯を伴っている。小波状口縁をなすものが多く、波頂部にC字状ないしはJ字状の貼付文を施している。この張付文は型式的に幅があり、53～59・68などは称名寺式に含まれる可能性が高い。60～67は堀之内I式としてもよからう。

b種 蕨手文を伴うもの（第32図69～72、第33図73～76）。

蕨手文は極めて単純なものが多く、堀之内I式前葉の最も古い時期に位置づけられる。001号跡の出土土器は本種に含まれるものが多い。

c種 蛇行沈線文や重層化した蕨手文を伴うもの（第33図77～87）

堀之内I式初頭にみられる蕨手文のような単純な文様構成はしだいに複雑化するが、堀之内I式中葉以降にみられるより重層化した単位文様は見いだされなかった。本種の文様は依然単純な段階を示している。78・79は単位文様の間を埋める斜行する沈線が施されている。82～87は並行する沈線の中に刺突文を充填している。

d種 地文に縄文を伴わないもの（第33図89～91）。

89は沈線が太めで蕨手文と思われる文様が施されている。90はくびれ部に太いキザミを伴う。器形は鉢か。91は透かし孔の間に竹管による刺突文を施している。内外面の調整は丁寧である。浅鉢か。

e種 縄文のみが施されるのもの（第33図92・93、第34図101・104）。

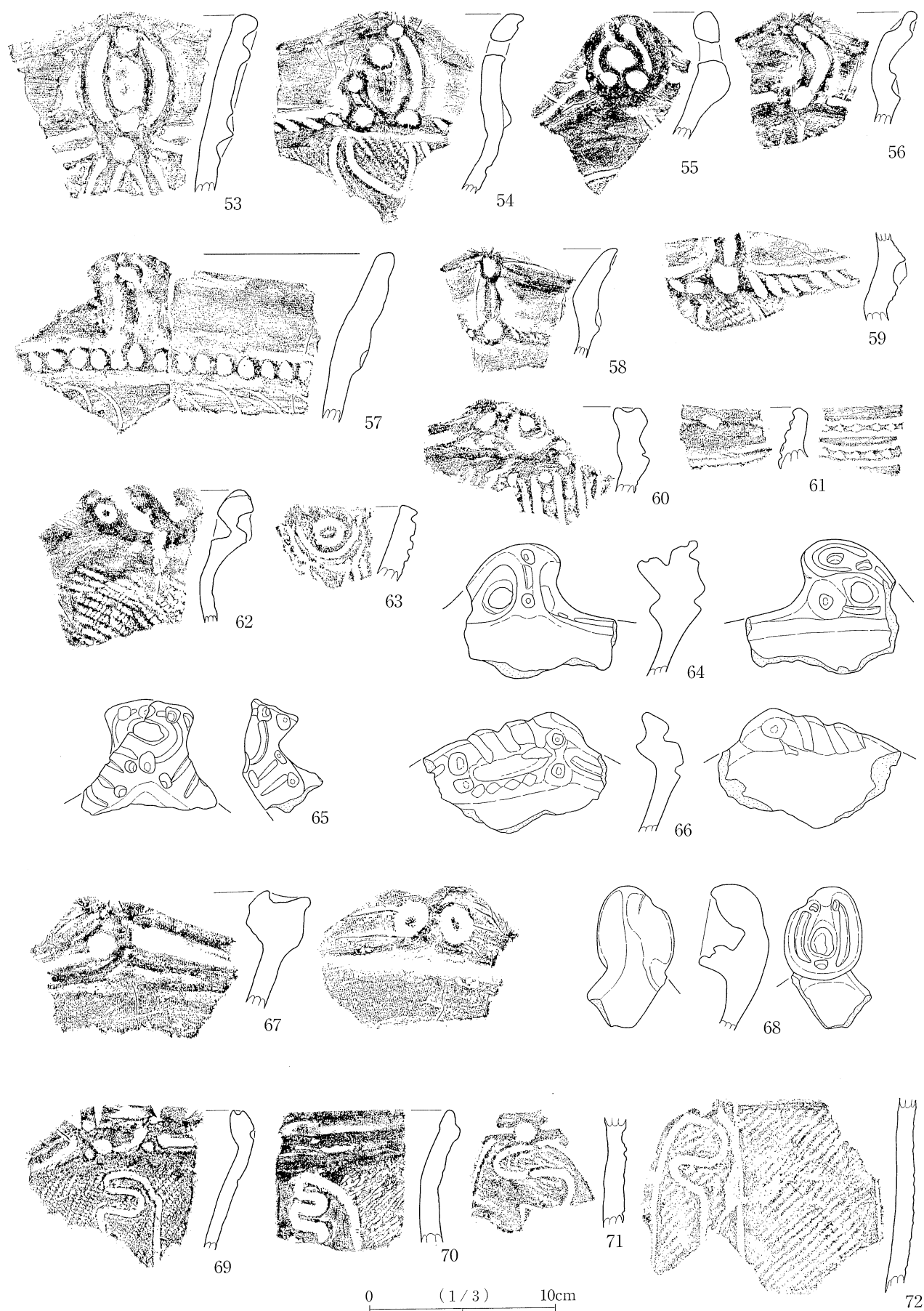
地文縄文のみで沈線文などが施されない土器は、一定量伴うものと思われるが今回の調査ではほとんどみられなかった。92・93ともに横位のLR単節縄文である。

f類 注口土器、その他を本類とする（第33図88・94～99）。

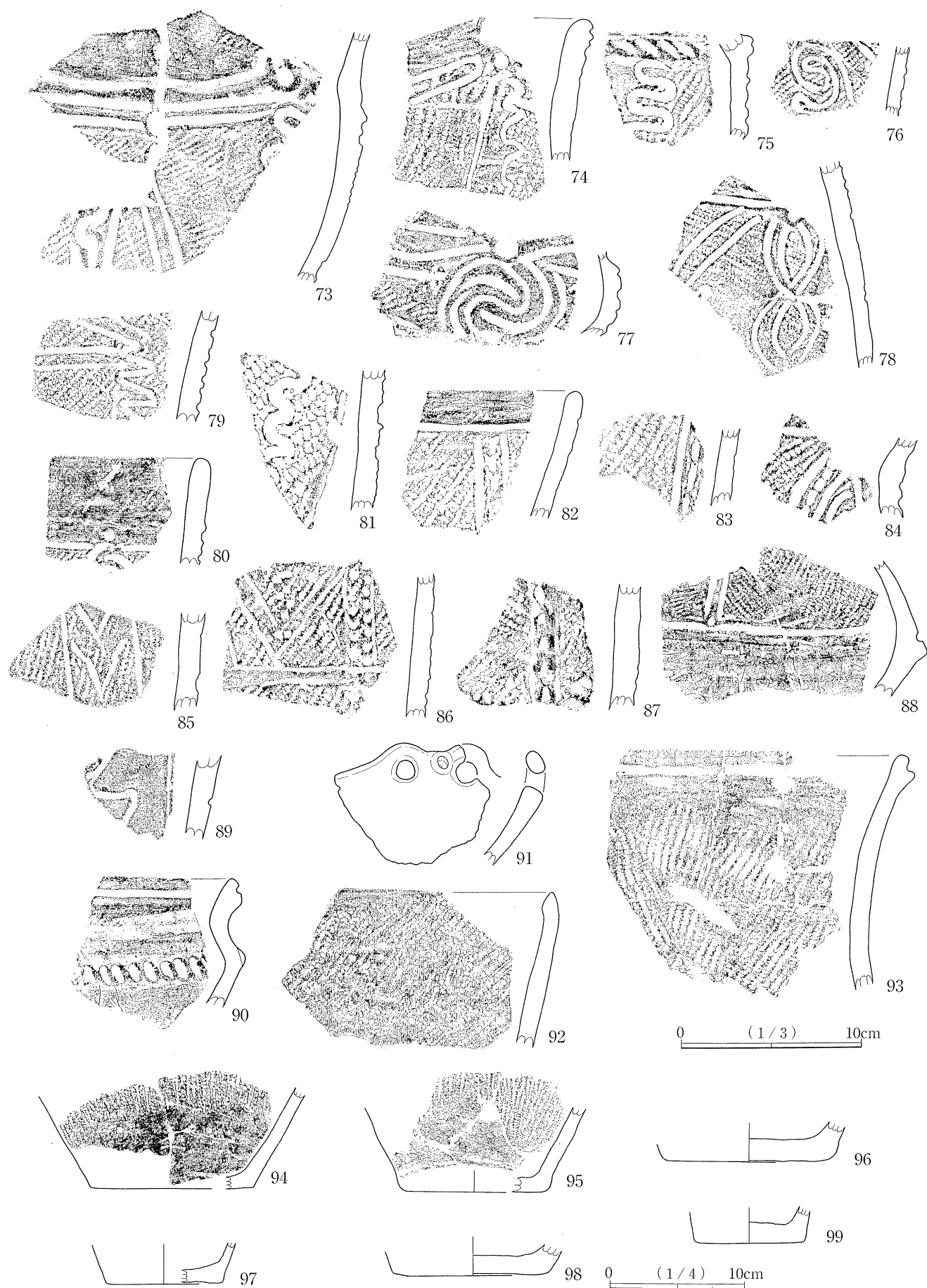
今回の調査で出土した注口土器は、全部で6個体出土している。001号跡や004号跡から出土したものは注口土器の時期としては古い段階の注口土器である。88はソロバン玉状の形態で注口土器と思われるが、かなり大きな個体である。あるいは内湾する鉢かもしれない。94～99は底部である。全体の土器量に対して底部の破片は少ない感がある。94・95は堀之内式の底部であろう。他は称名寺式乃至は加曾利B式の可能性もある。

第3類 加曾利B式を本類とする（第34図105）。

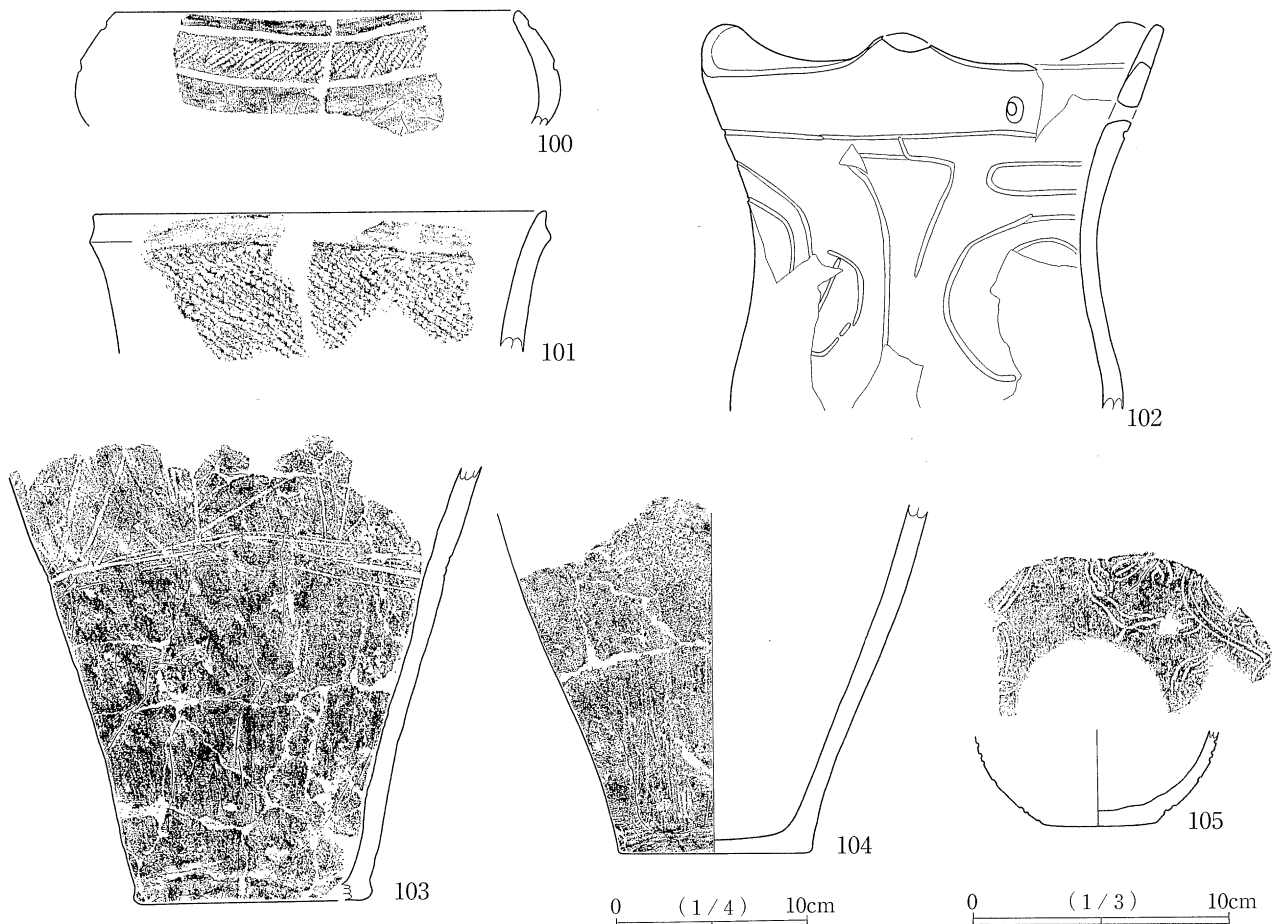
1点のみである。方形周溝状遺構の027号跡の周溝から出土している。器面は丁寧に磨かれており、沈線文が施されている。注口土器の下半部分と思われ、器面の色調は内外面ともに黒色である。



第32図 遺構外出土土器 4



第33図 遺構外出土土器 5



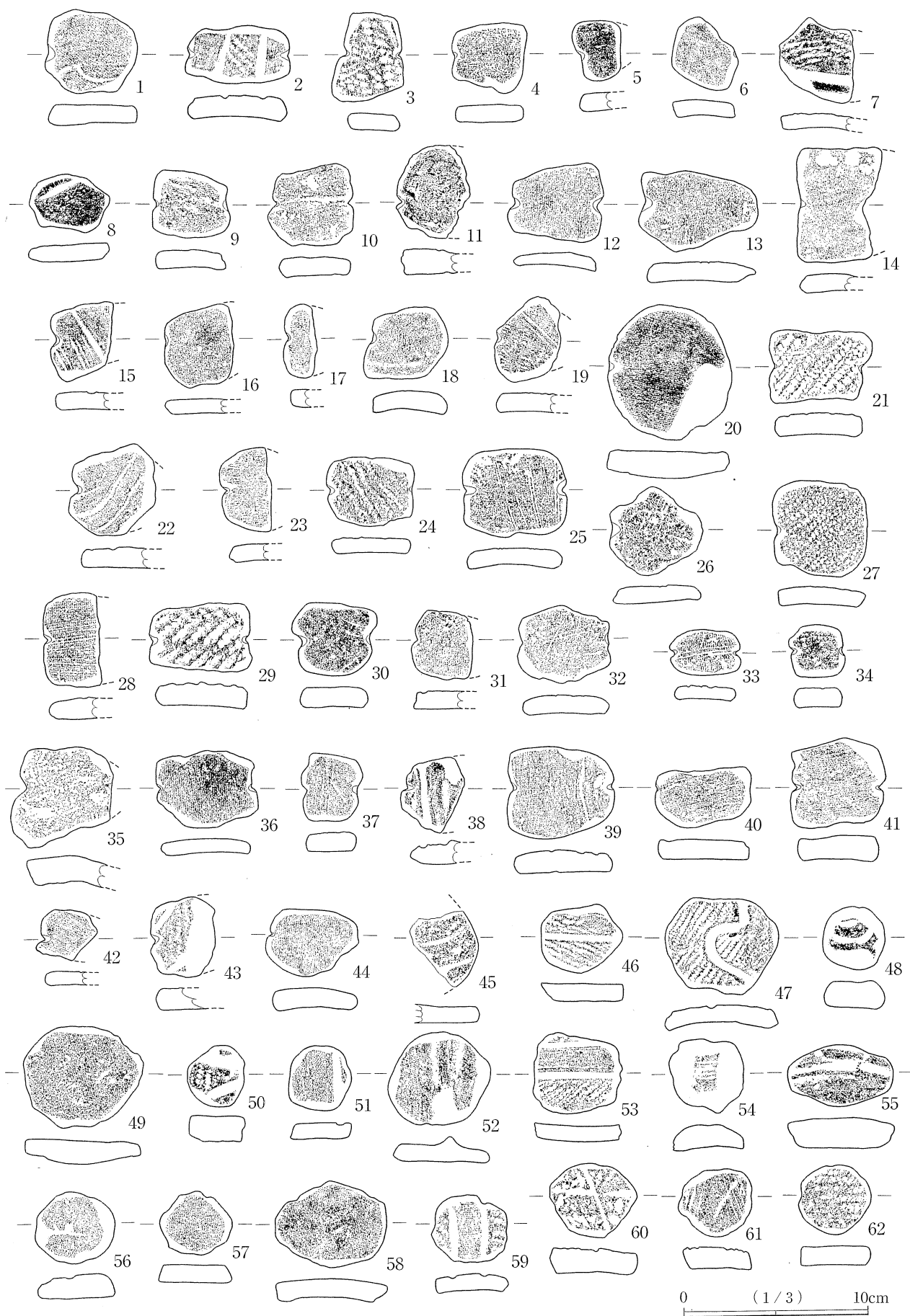
第34図 遺構外出土土器 6

5. その他の遺物

発掘調査によって出土した縄文時代の遺物のうち、遺構に伴わない遺物はあまり多くなかった。土器は遺構に関連した時期の縄文時代後期の土器が圧倒的に多く、他の時期の遺物は微量であった。その他の遺物は、土器片錘、土器片円盤、腕輪状土製品、土製蓋などが出土している。以下各遺物について詳述する。

土器片錘（第35図 1～44）

全部で44点の土器片錘が出土している。完形のものが32点、欠損しているものが12点である。遺構に伴うものが多く、遺構外の方が少ない。竪穴住居の001号跡から8点出土しているのが最も多い出土例である。加工されている土器片の時期は、縄文時代後期称名寺式から堀之内式である。称名寺式と思われる土器片は微量であった。土器片の使用部位は深鉢の胴部中位が最も多いと思われるが、20のように底部加工のものもある。紐かけ用の挟りは、比較的明瞭なものが多く長軸両端の中央に加工を加えている。平面の形態は隅丸長方形タイプが主体で、2のように長軸が長いタイプは限られるようである。欠損品を除く土器片錘の平均重量は、24.6gである。20は平均値の2.6倍の重量があり、重量比に大きなばらつきがあることから用途により重いものと軽いものが使い分けられていたものと考えられる。



第35図 土器片錘・土器片円盤

第1表 土器片錘計測表

() は残存長

挿図 番号	出土位置	注記番号	最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重量 g	部位	挿図 番号	出土位置	注記番号	最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重量 g	部位
1	001号跡	SI-22.4	4.91	4.57	1.10	29.7	胴部	23	008号跡	SI-23.4	2.74	4.62	0.80	15.2	胴部
2	001号跡	SI-22.57	5.65	3.16	1.10	28.2	胴部	24	B6-78	B6-78.1	4.73	3.73	0.70	20.0	胴部
3	001号跡	SI-22.4	3.90	4.83	0.90	18.8	胴部	25	002号跡	SI-25.33	5.50	4.73	1.00	36.1	胴部
4	001号跡	SI-22.1	3.92	3.77	0.95	17.0	胴部	26	005号跡	SI-27.3	4.83	4.76	0.75	19.0	胴部
5	001号跡	SI-22.182	2.57	3.39	1.00	9.0	胴部	27	B7-25	B7-25.1	5.02	5.00	0.80	31.0	胴部
6	001号跡	SI-22.11	3.58	3.98	0.90	13.0	胴部	28	007号跡	SI-21A.8	(3.00)	5.15	1.10	23.9	胴部
7	001号跡	SI-22.195	(4.07)	4.28	0.70	15.7	胴部	29	007号跡	SI-21A.13	5.54	3.77	1.10	36.8	胴部
8	001号跡	SI-22.1	4.37	2.94	0.85	13.8	胴部	30	007号跡	SI-21A.2	4.60	3.93	1.10	24.1	胴部
9	002号跡	SI-25.96	4.19	3.50	0.90	19.3	胴部	31	007号跡	SI-21A.14	3.14	3.63	0.80	12.7	胴部
10	002号跡	SI-25.113	4.65	4.41	1.00	27.3	胴部	32	C5-82	C5-82.1	5.02	4.29	0.85	21.7	胴部
11	004号跡	SI-107.48	(3.90)	4.98	1.20	24.0	胴部	33	007号跡	SI-21A.8	3.89	2.47	0.70	9.2	胴部
12	017号跡	SK-101.1	5.07	4.09	0.65	18.1	胴部	34	007号跡	SI-21A.2	3.10	2.81	1.05	11.8	胴部
13	023号跡	SK-102.1	6.45	4.41	1.00	29.3	胴部	35	007号跡	SI-21A.13	(5.32)	5.51	1.40	45.2	胴部
14	023号跡	SK-102.1	(4.60)	6.27	0.95	38.3	胴部	36	D9-06	D9a.4	5.41	4.19	0.65	21.0	胴部
15	016号跡	SK-105.5	(3.68)	3.81	0.90	16.8	胴部	37	D9-06	D9a.1	3.36	3.71	1.00	15.9	胴部
16	016号跡	SK-105.1	(3.65)	4.18	0.85	18.0	胴部	38	F4-66	F4d.26	(3.39)	4.01	1.15	14.3	胴部
17	018号跡	SK-109.1	(1.74)	3.97	0.95	7.3	胴部	39	F4-66	F4d.2	5.75	5.02	1.20	43.7	胴部
18	018号跡	SK-109.1	4.54	3.87	1.05	21.5	胴部	40	F4-66	F4d.26	5.21	3.20	1.05	23.9	胴部
19	027号跡	SX-101.1	3.44	4.63	1.05	19.7	胴部	41	F4-66	F4d.26	5.05	4.66	1.30	39.5	胴部
20	A7-07	A7-07.1	6.19	7.25	1.40	63.9	胴部	42	F5-07	F5b.2	(3.07)	2.76	0.70	7.8	胴部
21	A7-82	A7-82.1	5.67	4.09	1.10	35.4	胴部	43	包含層	遺跡一括	(3.54)	4.43	1.20	19.7	胴部
22	B5-05.	B5-c5.1	4.65	4.55	1.20	30.3	胴部	44	包含層	遺跡一括	4.85	3.60	1.10	21.2	胴部

土器片円盤（第35図 45～62）

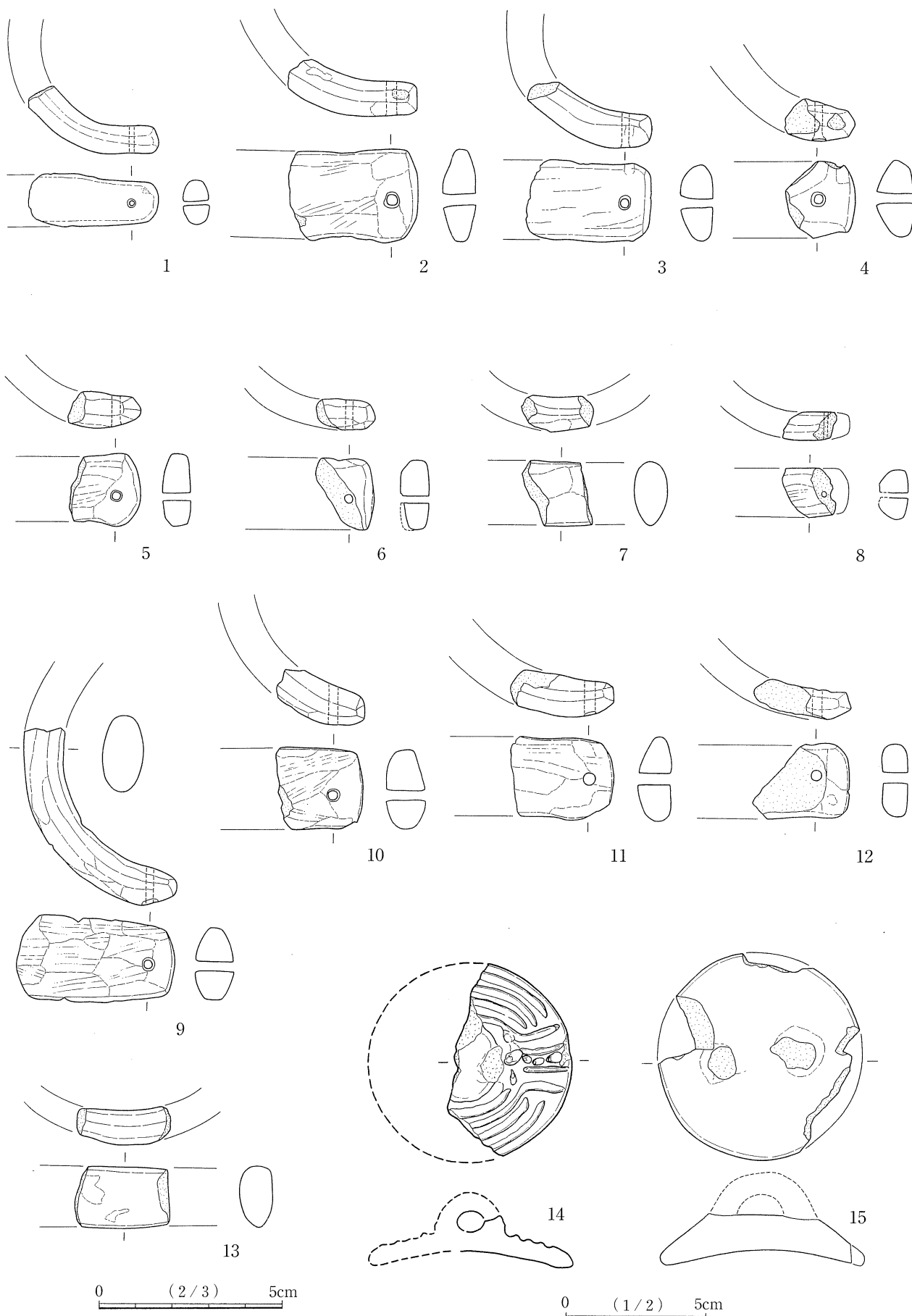
全部で18点の土器片円盤が出土している。土器片の周囲を丁寧に磨って丸みをつけている。土器片錘と同じく遺構に伴うものが多く、遺構外の方が少ない。堅穴住居の001号跡から6点出土しているのが最も多い例である。加工されている土器片の時期は、縄文時代後期称名寺式から堀之内式である。土器片の使用部位は深鉢の胴部中位が最も多いと思われる。円形のをを主体とするが、53のように隅丸長方形のものがあり、土器片錘として加工される途中のものもあるかもしれない。

第2表 土器片円盤計測表

挿図 番号	出土位置	注記番号	最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重量 g	部位	挿図 番号	出土位置	注記番号	最大長 cm	最大幅 cm	厚さ cm	重量 g	部位
45	004号跡	SI-107.58	4.07	3.11	1.07	11.7	胴部	54	020号跡	SK-106.5	3.99	4.02	1.20	20.6	胴部
46	001号跡	SI-22.4	4.33	3.55	1.05	19.7	胴部	55	018号跡	SK-109.1	5.90	3.41	1.70	33.8	胴部
47	001号跡	SI-22.3	6.10	5.12	1.00	39.5	胴部	56	A7-81	A7-81.1	4.31	3.94	1.25	24.4	胴部
48	001号跡	SI-22.3	3.38	3.38	1.60	17.7	胴部	57	B6-65	B6-65.1	3.97	3.54	0.95	15.6	胴部
49	001号跡	SI-22.4	6.55	5.68	1.20	40.7	胴部	58	007号跡	SI-21A.1	6.06	4.82	1.05	35.5	胴部
50	001号跡	SI-22.3	3.14	3.38	1.50	16.7	胴部	59	G4-71	G4-c.1	4.22	3.67	0.90	17.4	胴部
51	001号跡	SI-22.193	3.33	3.61	0.90	13.7	胴部	60	包含層	遺跡一括	4.74	4.12	1.40	28.9	胴部
52	004号跡	SI-107.48	5.14	5.17	1.40	37.8	胴部	61	包含層	遺跡一括	3.94	3.64	1.10	19.5	胴部
53	020号跡	SK-106.5	4.72	4.55	0.95	27.1	胴部	62	包含層	遺跡一括	3.83	3.78	1.05	18.1	胴部

腕輪状土製品（第36図 1～13）

特殊な形態の土製品が13点出土している。管見にふれる限りでは、類例はない。仮に腕輪状土製品として報告するが、垂飾品などの可能性もあり使用した名称が適切であるとは言えない。すべて破片で出土しており完形のものはない。形態については、9と10が同一地点から出土し、表面の調整・胎土が類似していることから同一個体の可能性が高いものの、接合しないことから確かな形態を示せなかった。9の形態から明らかに曲線を呈すると考えられ、10が9の欠損部分の端部に当たるとすれば半円状の形態で両端に穿孔を伴っている可能性が高い。胎土には砂が多く混入し、一般の土器の胎土と変わりはない。表面の調整は粗くヘラ状の工具によって調整されたような面取りが認められる。穿



第36図 土製品

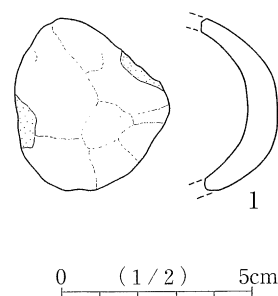
孔を伴う例が11点あり、いずれも焼成前に穿孔されている。穿孔径は2mm程度の細い棒状工具によるものである。時期は、竪穴住居の002号跡から出土しているものが5点あり、堀之内Ⅰ式期であることは確かである。また、地点貝層である008号跡の周辺からも土器とともに出土しているものが4点あることから称名寺式期から堀之内Ⅰ式期に属するものと考えられる。穿孔を伴わない例としては、栃木県河内郡河内村古宿遺跡からの出土例がある。栃木県小山市寺野東遺跡や同県下都賀郡藤岡町藤岡神社遺跡などから大量に出土している貝輪状土製品は、断面がハの字状を呈し明らかに貝輪を模していると言え、穿孔がある例が皆無であることから本遺跡で出土した土製品とは一線を画するものと考えられる。穿孔を伴う似たような形態のものとしては、イノシシの雄の牙を加工し、端部に穿孔を伴う例があり、これらとの関連性の方が強いかもしれない。

第3表 腕輪状土製品計測表

図版 版号	出土位置	注記番号	最大幅 cm	最大厚 cm	備 考	図版 版号	出土位置	注記番号	最大幅 cm	最大厚 cm	備 考
1	002号跡	SI-25.1	1.42	0.86	称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式	8	008号跡	SI-23	1.38	0.75	称名寺Ⅱ式
2	002号跡	SI-25.71	1.58	1.12	称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式	9	D8-11	D8-a2.2	2.27	1.13	後期前葉
3	002号跡	SI-25.1	1.21	0.96	称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式	10	D8-11	D8-a2.3	2.29	1.11	後期前葉
4	002号跡	SI-25.25	2.03	1.06	称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式	11	A7-91	A7-91.1	2.27	1.06	後期前葉
5	008号跡	SI-23.4	1.98	0.94	称名寺Ⅱ式	12	A7-07	A7-07.1	2.04	0.75	後期前葉
6	008号跡	SI-23	1.97	0.79	称名寺Ⅱ式	13	D9-06	D9-06.1	1.64	0.95	後期前葉
7	008号跡	SI-23.1	1.78	0.88	称名寺Ⅱ式						

土製蓋・その他（第36図14・15、第37図1）

土製蓋は、2点出土している。いずれも欠損している。14は約半分遺存している。沈線による重弧文が施されている。001号跡から出土している。15は把手の部分欠いている。文様は施されていない。14に比べ厚みがある。E4-07から出土している。第37図1は手捏土器の可能性がありますが、底部や全体の形態が推測できないものである。時期は不明。B6-65グリッドから出土。



第37図 土製品

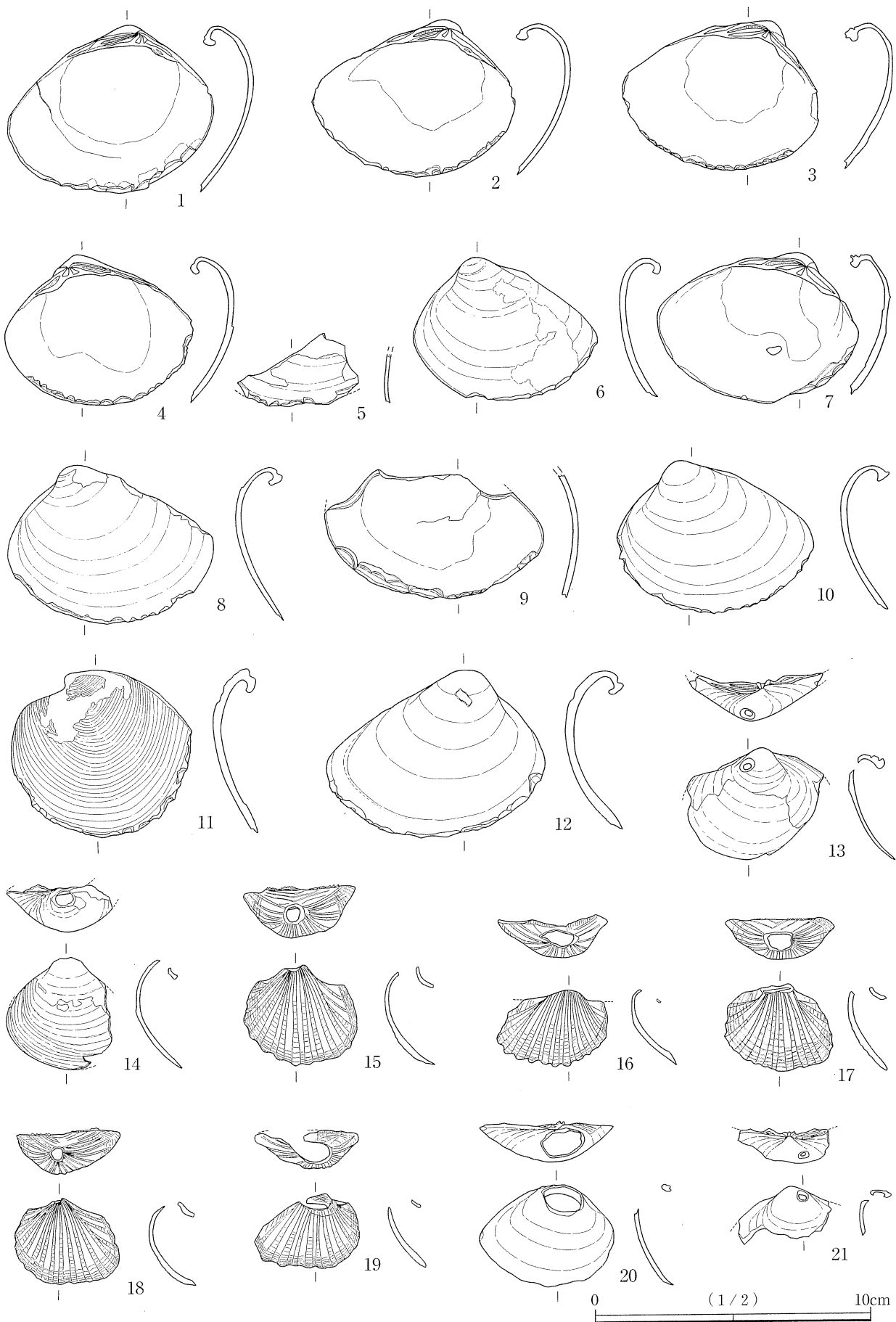
6. 貝製品

貝 刃（第38図 1～12）

検出された貝層の中から貝刃15点が出土している。ハマグリ製が13点、カガミガイ製2点である。剥離は貝殻の腹縁が主体で、前背縁や後背縁にまで及ぶものもある。一般的に見られる剥離は、外面に認められるが、内面に認められるものが6点あった。左殻を使用するものが10点と多く、3分の2を占めている。殻長は9が8.0cmで最も大きい。ハマグリの大きさとしては殻高が5cm～6cmの大きな個体を選択されており、分析を経ていないが3・4歳程度の個体を選択されている割合が高いのではないと思われる。

加工品（第38図 13～21）

加工品と思われるものが9点出土している。いずれも殻頂部を穿孔ないし破碎して穴を開けているものである。ハマグリ3点、シオフキ1点、ハイガイ5点である。13は001号跡から、14～19は004号跡から20は008号跡から、21は021号跡から出土している。



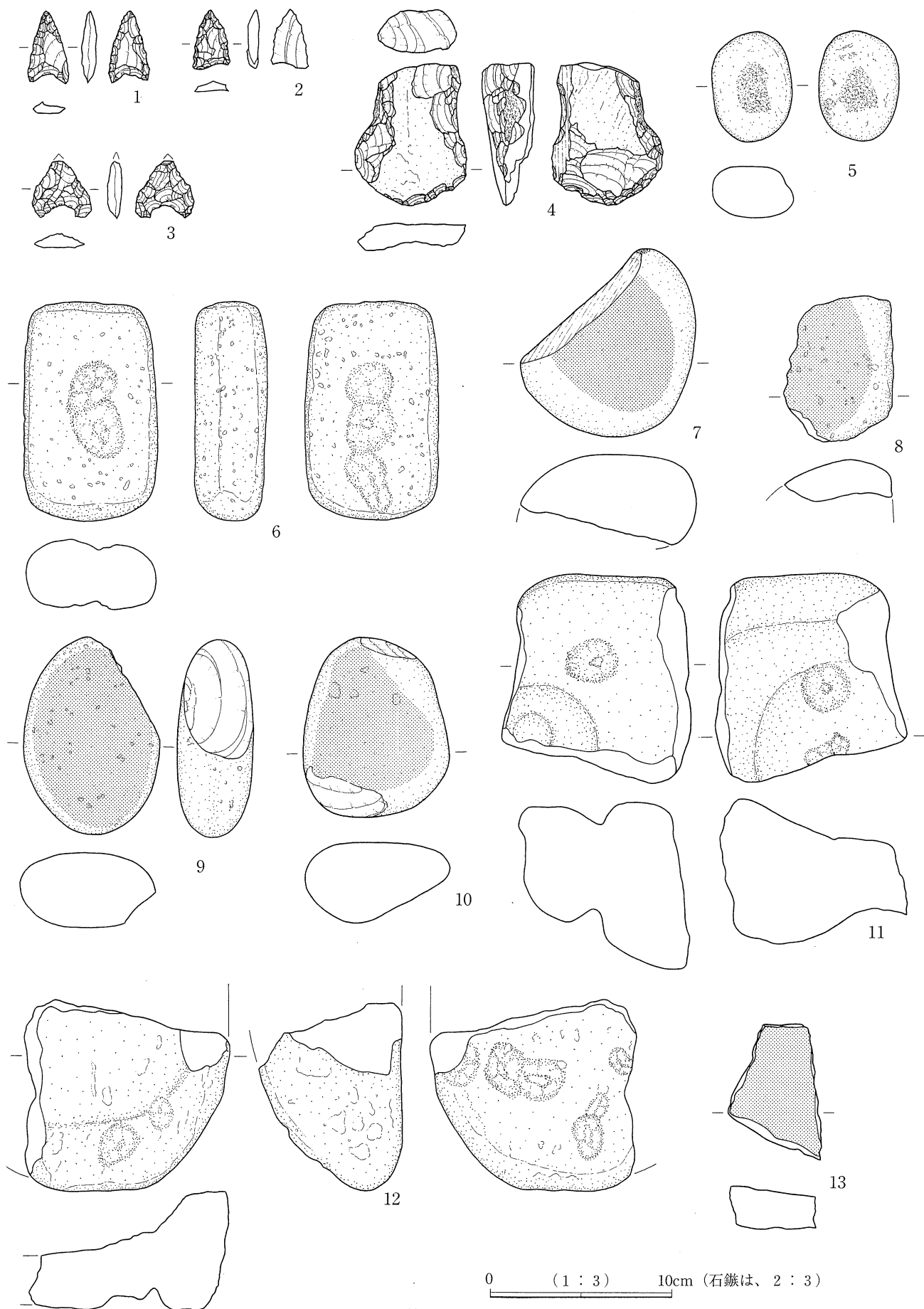
第38図 貝製品

第4表 貝刃計測表

挿図 番号	出土位置	注記番号	貝 種	L/R	殻長 cm	殻高 cm	備 考	挿図 番号	出土位置	注記番号	貝 種	L/R	殻長 cm	殻高 cm	備 考
1	001号跡	SI-22	ハマグリ	L	7.6	6.2	内面剥離	9	004号跡	SI-107	ハマグリ	R	8.0	4.7	内面剥離
2	001号跡	SI-22	ハマグリ	L	7.4	5.7	内面剥離	10	019号跡	SK-106	ハマグリ	L	7.2	5.5	外面剥離
3	001号跡	SI-22	ハマグリ	L	7.0	5.5	内面剥離	11	019号跡	SK-106	カガミガイ	L	6.6	6.1	外面剥離
4	001号跡	SI-22	ハマグリ	R	6.8	5.5	内面剥離	12	021号跡	SK-114	ハマグリ	R	7.9	6.2	外面剥離
5	001号跡	SI-22	ハマグリ	R ?	4.4	2.7	外面剥離	図なし	018号跡	SK-109	ハマグリ	R	6.5	5.3	外面剥離
6	003号跡	SK-102	ハマグリ	L	6.7	5.2	外面剥離	図なし	018号跡	SK-109.2	ハマグリ	R	7.5	6.0	外面剥離
7	004号跡	SI-107	ハマグリ	L	7.3	5.5	内面剥離	図なし	018号跡	SK-109.2	カガミガイ	L	6.3	6.0	外面剥離
8	004号跡	SI-107	ハマグリ	L	7.5	5.7	外面剥離								

7. 石 器 (第39図)

石器は、石鏃 3 点、打製石斧 1 点、敲石 1 点、凹石 1 点、磨石 4 点、石皿 3 点が出土している。遺構内から出土しているものがほとんどである。石器の時期は、土器の出土量が最も多かった縄文時代後期称名寺式から堀之内式期に属する可能性が高い。1～3 は石鏃である。1・2 は二等辺三角形を呈し、基部の挟りは小さい。ともに縁辺の調整は粗く、1 は完成品と思われるが 2 は未製品と思われる。1 の石材はチャート、重量は 0.7 g、001 号跡から出土。2 の石材はチャート、重量は 0.5 g、024 号跡から出土。3 はやや二辺に丸みがあり、基部の挟りが大きい。先端を若干欠損している。石材は黒曜石、重量は 0.6 g、024 号跡から出土。4 は打製石斧である。基部を欠損している。撥形よりも分銅形の可能性が高い。両側縁に着柄による潰れがある。石材はチャートである。重量は 140 g、007 号跡から出土。5 は磨石である。やや偏平な小円礫の両面に敲打痕を伴う。石材はチャートである。重量は 130 g、003 号跡から出土。6 は凹石である。所謂石鹼形のものである。両面に凹みを伴う。石材は安山岩である。重量は 560 g、002 号跡から出土。7～10 は磨石である。7 は若干の敲打痕を伴う。石材は硬質砂岩である。重量は 550 g、001 号跡から出土。8 の石材は礫岩である。重量は 140 g、001 号跡から出土。9 は一面が磨られている。石材は安山岩である。重量は 420 g、007 号跡の貝層付近から出土。10 も一面のみが磨られている。石材は礫岩である。重量は 540 g、001 号跡から出土。11～13 は石皿であるがみな破片である。11・12 は底面にも凹みを伴う。11 の石材は安山岩である。重量は 1015 g、010 号跡から出土。12 の石材は安山岩である。重量は 800 g、018 号跡から出土。13 は偏平な破片である。石材は安山岩である。重量は 120 g、002 号跡から出土。



第39図 石器

第2節 古墳時代

1. 竪穴住居跡

概要

調査によって検出された古墳時代の竪穴住居跡は、5棟である。台地の中央に1棟、台地の南側本調査区で4棟が検出された。かつての自然地形においては南側に面する緩斜面に集落が展開していたものと考えられる。ただ各竪穴住居跡のカマドの方位は2棟を除いて異なっており、重複するものもあることから時期差を伴うものと考えられる。

022号跡（第40・41図）

位置 E8-71グリッドを中心に検出された。南側に開く緩斜面上に位置する。

形態 南西側において、023号跡と重複する。また、南東側隅部は後世の斜面成形によって消滅している。方形プランであり、南北軸長5.63m・東西軸長5.97mを測る。

構造 床面は、全体に平坦かつ堅固であり主柱穴に囲まれた内区では硬化面が確認された。壁高は、40～70cmを測り壁溝が全周する。また、西側を中心として中～下層に焼土が、厚さ15～20cmにわたって堆積しており、火災を受けたものと考えられる。断面観察から重複する023号跡より新しいと考えられる。

主柱穴P1～P4は、掘り込みの深さが0.65～0.8mを測りP3を除いて上面径が大きく、柱が抜き取られたと考えられる。柱当たりは4穴とも確認された。P5は出入り口に伴うピットと考えられるが掘り込みの深さは、10cm程度である。P6は、貯蔵穴と考えられ、掘り込みの深さは22cmを測る。

カマドは、北辺中央に位置し白色粘土・山砂によって壁体を構築しており、側壁長は70cmを測る。火床面における焼土の厚さは8cmである。また、屋外に40cm程突出する短い煙道部を有する。

遺物出土状況 遺物はカマド右ソデ脇床面上において、小型甕7が出土し、左ソデ脇壁溝上において1・2が出土している。また、北辺壁溝上において5の高杯が出土している。

023号跡（第40・41図）

位置 E8-70グリッドを中心に検出された。南側に開く緩斜面上に位置する。

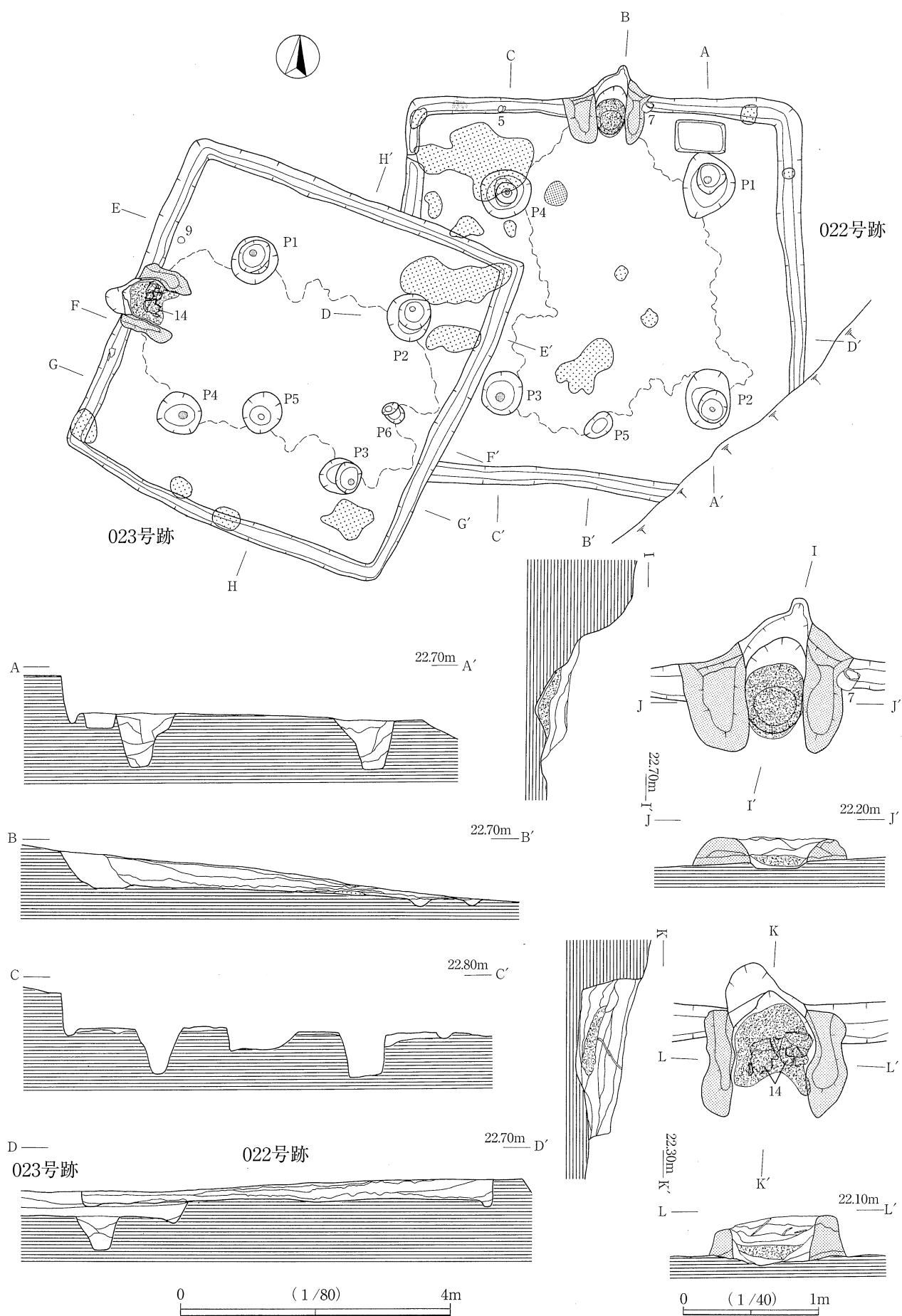
形態 北東側において、022号跡と重複する。方形プランであり、北東―南西軸長5.37m・南東―北西軸長5.32mを測る。

構造 床面は、全体に平坦かつ堅固であり主柱穴に囲まれた内区では硬化面が確認された。壁高は、20～60cmを測り壁溝が全周する。また、南側を中心として下層に焼土が、厚さ10～20cmにわたって堆積していた。断面観察から重複する022号跡より古いと考えられる。

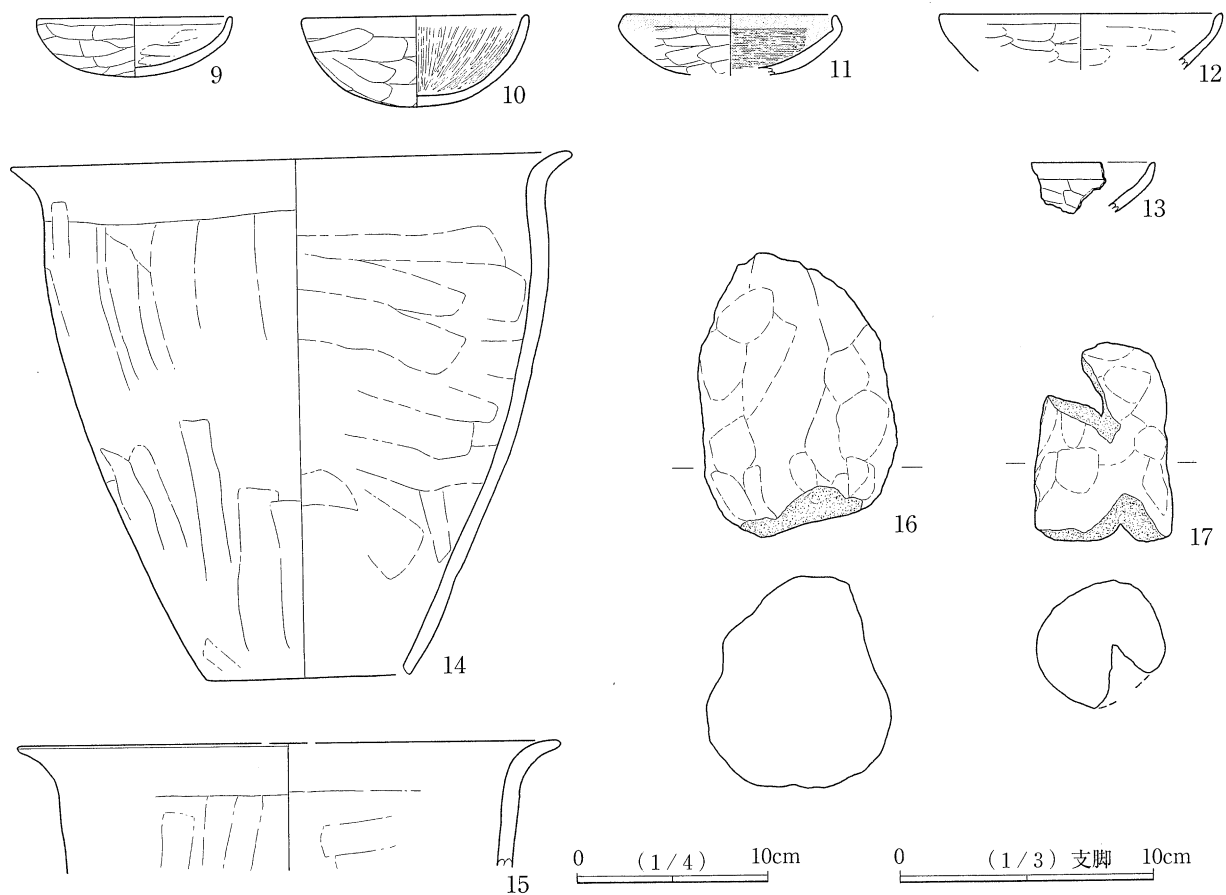
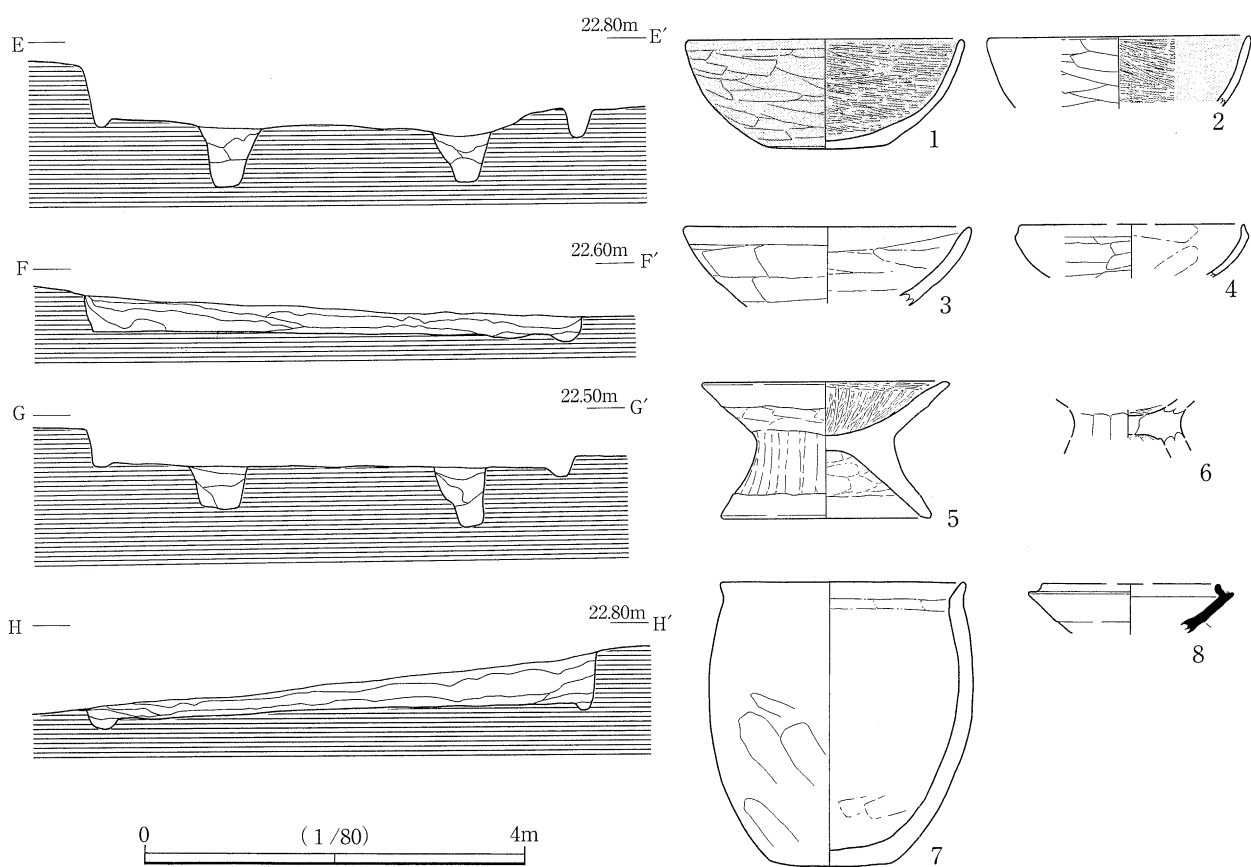
主柱穴P1～P4は、掘り込みの深さが0.46～0.62mを測り、いずれも上面径が大きく柱が抜き取られたと考えられる。柱当たりは4穴とも確認された。またP5は柱穴状の掘り込みであるが、柱当たりは確認されなかった。掘り込みの深さは50cmを測り、貯蔵穴の可能性もあるが新しい時期の掘り込みとも考えられる。P6は、出入り口に伴うピットと考えられる。掘り込みの深さは30cmである。

カマドは、北西辺中央に位置し白色粘土・山砂によって壁体を構築しており、側壁長は78cmを測る。火床面における焼土の厚さは10cmである。また、屋外に30cm程突出する短い煙道部を有する。

遺物出土状況 遺物はカマド右ソデ脇覆土下層において、杯12が出土している。また、北西側床面上において杯9が出土している。他にはカマド内に落ち込むようにして甕14が出土している。



第40图 022号・023号跡



第41図 022号跡・023号跡及び出土遺物 (022号 1～8、023号 9～17)

024号跡（第42図）

位置 E8-35グリッドを中心に検出された。

形態 北側において、027号跡と重複する。方形プランであり、北西—南東軸長5.79m・南西—北東軸長5.61mを測る。

構造 床面は、全体に平坦かつ堅固であり主柱穴に囲まれた内区では硬化面が確認された。壁高は、20～30cmを測り壁溝が存在する。また、北東辺及び南東辺の一部に焼土が、厚さ10cmにわたって堆積していた。断面観察等から重複する027号跡より古いと考えられる。

主柱穴P1～P3は、掘り込みの深さが0.52～0.7mを測り、P1は柱痕部分が一段深く掘り込まれていた。いずれも上面径が大きく、柱が抜き取られたと考えられる。柱当たりは3穴とも確認された。また掘り方精査の過程で、床面下から別の柱穴群P5～P7が検出されている。主柱穴P1～P3より明らかに前の時期の柱穴であるが、それぞれが対応する柱穴の外側に位置しており本遺構の継続的な柱の建て替えを示すものか、时期的に隔たる過去の住居に伴うものであるのかは明確でない。P4は、出入り口に伴うピットと考えられる。掘り込みの深さは26cmである。カマドは、北西辺中央に位置し右側ソデ部分は027号遺構によって切られている。白色粘土・山砂によって壁体を構築しており、側壁長は71cmを測る。火床面における焼土の厚さは10cmである。また、屋外に30cm程突出する短い煙道部を有する。

遺物出土状況 遺物はP3から小型甕2が出土している。また、北東辺覆土上～中層において甕3が出土している。

025号跡（第43図）

位置 D9-43グリッドを中心に検出された。南側に開く緩斜面下に位置する。

形態 南西側は調査区外となる。方形プランであり、北西—南東軸長3.68mを測る。

構造 床面は、全体に平坦かつ堅固であり中央から南西側にかけて硬化面が確認された。壁高は、10～40cmを測り壁溝が全周すると考えられる。また、北東辺及び南東辺の一部に焼土が、厚さ5～10cmにわたって堆積していた。柱穴と考えられるピットはP6を除いていずれも脆弱であり、P1～P5は、掘り込みの深さが6～24cm程である。柱当たりは確認されなかった。しかし、P6は柱穴状の掘り込みを呈し、深さは60cmを測る。底面中央に柱当たりが確認された。この柱穴が主柱穴となって本住居を支えていた可能性がある。P7は、出入り口に伴うピットと考えられる。掘り込みの深さは20cmである。カマドは、北西辺中央に位置し上面は後世の砂利舗装によって削平されていた。白色粘土・山砂によって壁体を構築しており、側壁長は68cmを測る。火床面における焼土の厚さは8cmである。また、屋外に26cm程突出する短い煙道部を有する。

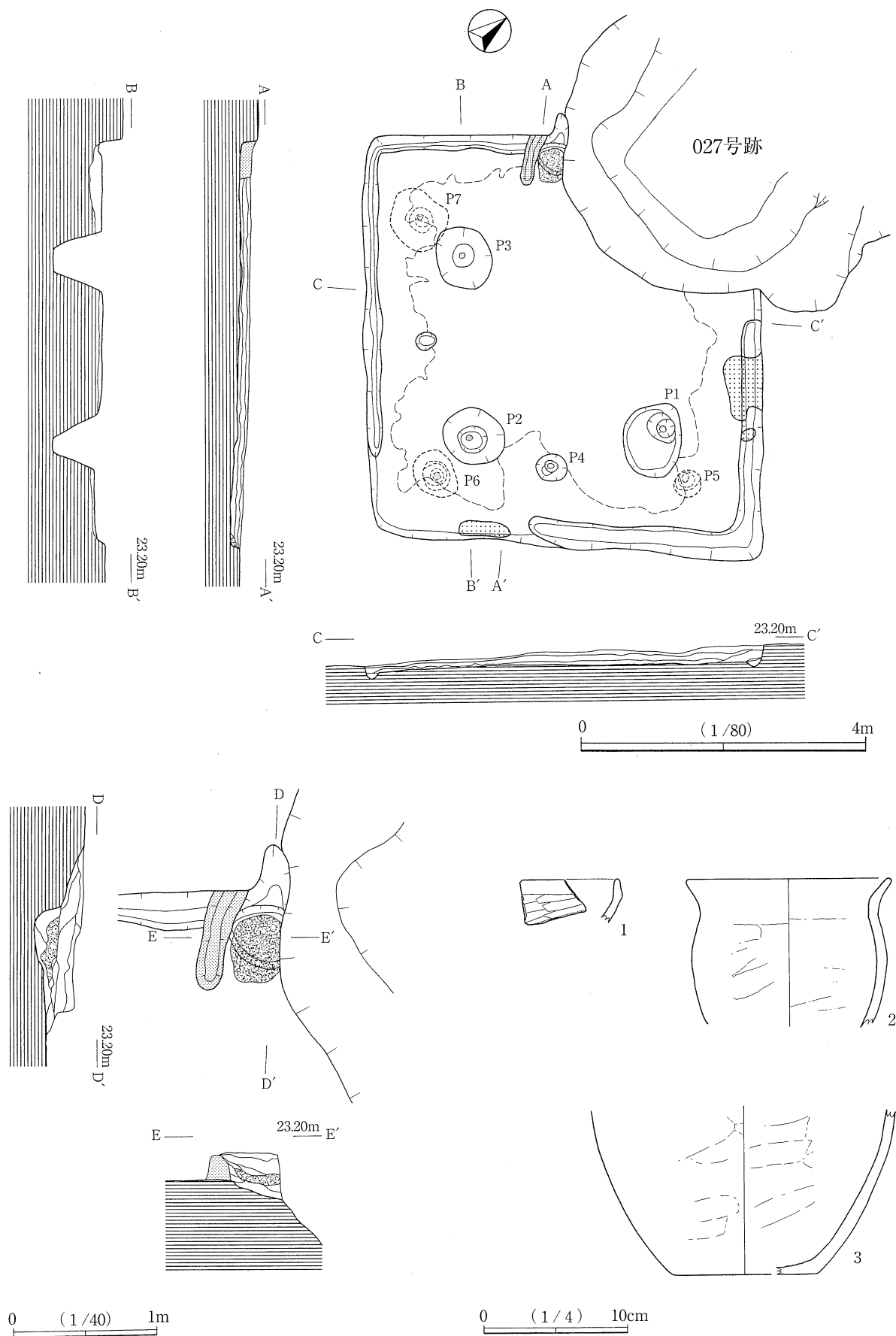
遺物出土状況 遺物はカマド右脇床面直上において、杯1が出土している。また、カマド内火床面より甕2が出土している。他には中央床面直上より甕4が出土し、カマド左脇から甕3、支脚5が出土している。

026号跡（第44図）

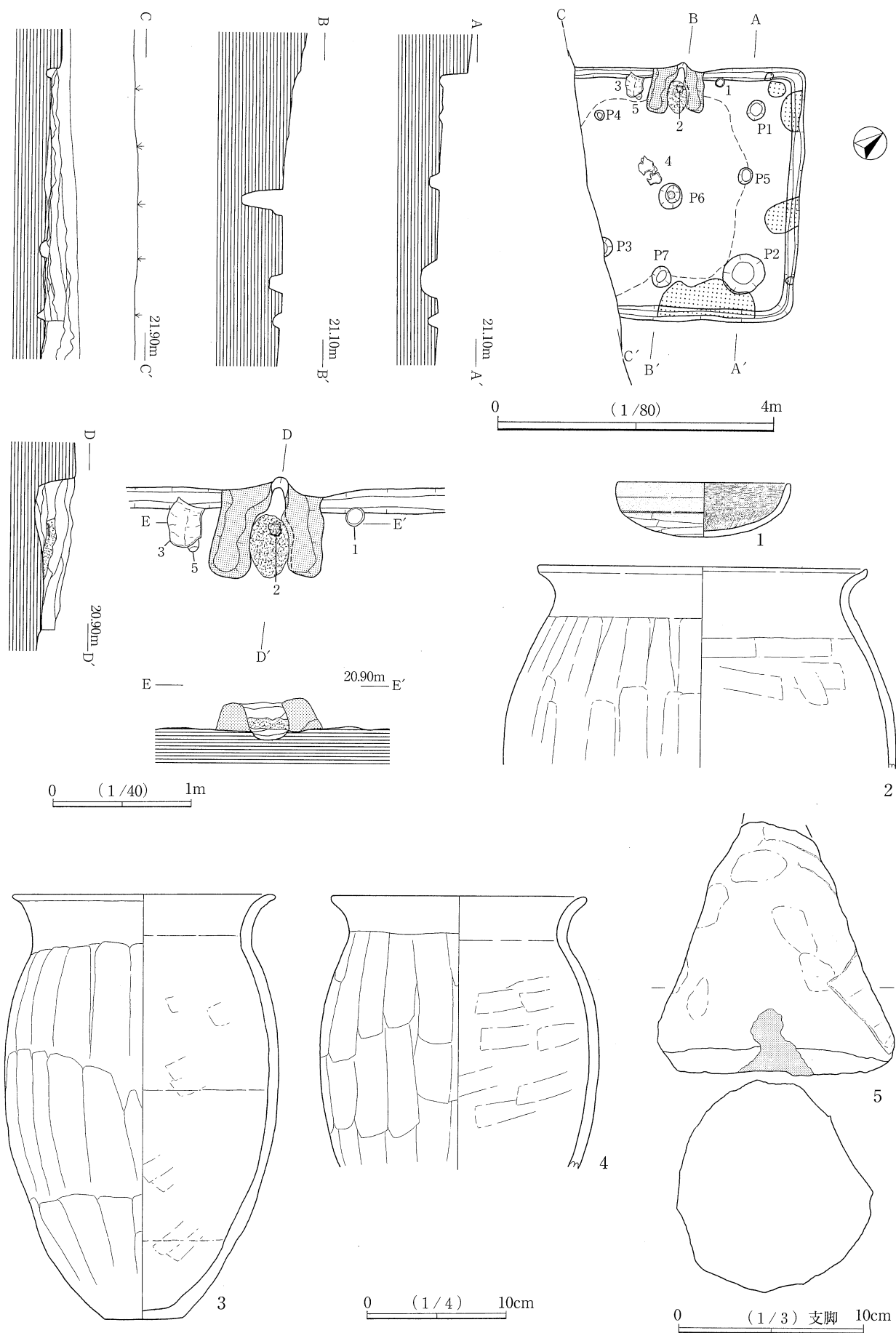
位置 D7-05グリッドを中心に検出された。本台地のほぼ中央に位置する。

形態 方形プランであり、北西—南東軸長5.54m・南西—北東軸長5.76mを測る。

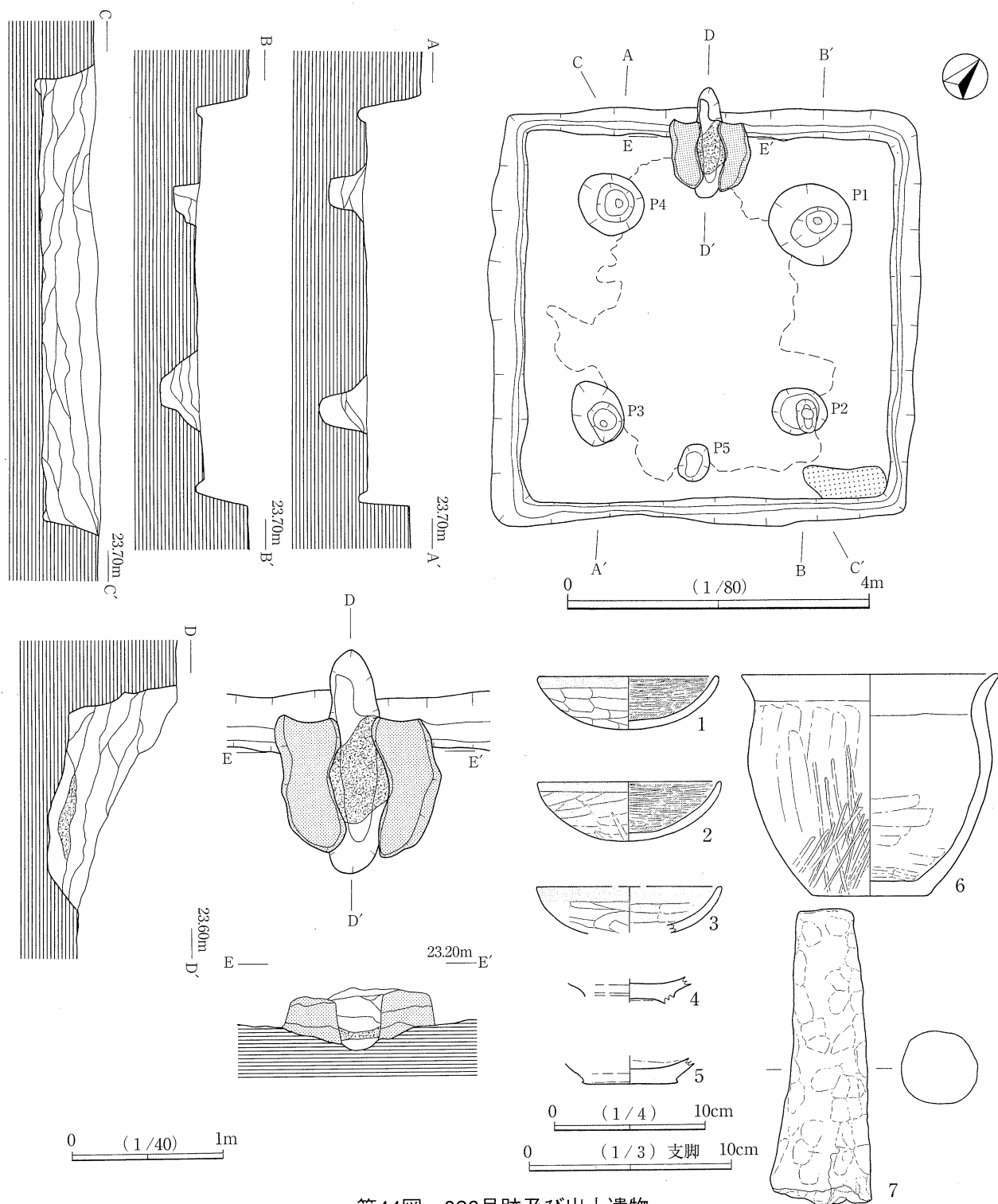
構造 床面は、全体に平坦で主柱穴に囲まれた内区では硬化面が確認された。壁高は、68～84cmを測



第42図 024号跡及び出土遺物



第43図 025号跡及び出土遺物



第44図 026号跡及び出土遺物

り壁溝が全周する。また、南東隅部において覆土中～下層に焼土が、厚さ10cmにわたって堆積していた。主柱穴P1～P4は、掘り込みの深さが0.36～0.62mを測る。柱当たりは4穴とも確認された。またP5は、出入りに伴うピットと考えられるが、掘り込みは浅く6cm程である。カマドは、北西辺中央に位置し白色粘土・山砂によって壁体を構築しており、側壁長は88cmを測る。火床面における焼土の厚さは5～10cmである。

遺物出土状況 遺物は、南東隅の覆土下層において小型甕6が出土している。また、カマド左ソデ内において支脚7が出土した。

第5表 土器観察表

単位はcm。()は推定口径及び器高。

遺構 番号	断面 番号	種 別	器 種	外 面 の 特 徴	内 面 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調 (外面) 色 調 (内面)	口 径	器 高	底 径
021	1	土師器	直口壺	ヘラケズリ。	ヘラナデ。	密	良	鈍いこぶい赤褐色 ※一部赤彩顔料残存か?			
022	1	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 漆仕上げ。	ヘラミガキ、漆仕上げ。	密	良	橙色 橙色	(15.0)	5.8	6.4
022	2	土師器	杯	ヘラケズリ(ミガキのように強い)。	ヘラミガキ、全面漆仕上げ。	密	良	こぶい黄橙 こぶい黄橙	(14.0)	(3.7)	(11.0)
022	3	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	やや粗	良	橙色 ※火熱受け赤色味帯びる。	(15.2)	(4.2)	(8.5)
022	4	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、口縁部ヨコナデ一部残る。	やや粗	良	こぶい黄橙 こぶい黄橙	(11.8)	(2.8)	(8.6)
022	5	土師器	高杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ミガキのような強いナデ。口縁部ヨコナデ。	密	良	橙色 こぶい黄橙	10.1	5.4	8.2
022	6	土師器	高杯	ヘラケズリ。	ヘラミガキ、脚部内面ヘラナデ。	密	良	橙色 こぶい黄橙 ※一部赤彩顔料付着	(6.2)	(2.0)	(6.0)
022	7	土師器	小型甕	ヘラケズリ。	ヘラナデ。	粗(0.5~1.5mm大・白色粒・石英均等に散る)	やや不良	明赤褐色 灰赤色	(12.9)	24.9	6.5
021	8	須恵器	杯	ロクロ調整、口縁部ヨコナデ、ヘラケズリは確認できない。	ロクロ調整。	緻密(0.5~0.5mm白色粒微量だが散る)	良好	灰色 灰色	10.8	2.6	(5.9)
022	9	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	やや粗	良	橙色 橙色	10.4	3.2	3.4
023	10	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラミガキ。	粗(2~3mm大・石英粒等少量混入)	やや不良	こぶい橙色 橙色	(12.0)	4.8	2.4
023	11	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、漆仕上げ。	ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、全面漆仕上げ。	密(0.5~1.0mm大・赤色粒少量だが均等に散る)	良	明褐色 こぶい褐色	(11.2)	(3.2)	(4.2)
023	12	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ。	密	良	橙色 橙色	(14.8)	(3.0)	(10.8)
023	13	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	密	良	こぶい褐色 灰褐色			
023	14	土師器	甕	体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ。	密	良	橙色 ※下半分一部黒斑付着 橙色	(29.6)	27.4	10.7
023	15	土師器	甕	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	密	良	橙色 橙色 橙色	(28.6)	(6.7)	(23.6)
023	16		支脚	ナデ、コビオサエ。 重量349.6g		粗(5~8mm大・小石粒が少量だが均等に混入)	やや不良	橙色	(3.2)	(11.2)	(7.3)
023	17		支脚	ナデ、コビオサエ。一部指頭痕残る。 重量136.1g		やや粗(2~4mm大・小石粒含む)	良		(4.1)	(7.9)	(5.4)
024	1	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ナデ。	密	良	橙色 橙色			
024	2	土師器	小型甕	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、口縁部ヘラナデ。	やや粗(0.5~1.0mm大・赤色粒少量だが均等に散る)	良	橙色 ※黒斑付着 橙色	(14.5)	(10.5)	(11.7)
024	3	土師器	甕	ヘラケズリ。	ヘラナデ。	密(1mm大・赤色粒・微量)	良	橙色 橙色	(21.3)	(11.6)	(10.0)
025	1	土師器	杯 ※蓋模倣	体部ヘラケズリ、体部中位に若干の段。口縁部ヨコナデ、漆仕上げ。	丁寧なヘラミガキ、全面漆仕上げ。	密	良	こぶい黄橙 灰褐色	12.6	3.9	3.4
025	2	土師器	甕	ヘラケズリ。口縁~頸部ヨコナデ。	ヘラナデ。口縁~頸部ヨコナデ。	密(5mm大・小石等微量混入)	良	橙色 橙色	(24.0)	(14.4)	(28.4)
025	3	土師器	甕	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ。下段は輪積み痕明瞭に残る。	比較的密(5mm大・小石微量含む)	良	橙色 こぶい橙色	19.1	30.9	5.6
025	4	土師器	甕	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ、口縁部ヨコナデ。	やや粗(5mm大・長石、石英粒等少量混入)	良	橙色 橙色	(18.6)	(19.8)	(17.2)
025	5		支脚	ナデ及び指頭によるユビオサエ痕残る。右側下半分に土師甕片溶着した痕跡残す。		きわめて粗。砂粒多くボソボソしている。	やや不良	明赤褐色 ※よく火熱受け赤色味帯びる。	(4.0)	(13.6)	12.8
026	1	土師器	杯	ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ、漆仕上げ。	ヘラミガキ、漆仕上げ。	比較的密	良	こぶい黄橙 こぶい黄橙 ※黒漆部黒色	12.0	3.5	2.4
026	2	土師器	杯	ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。全面漆仕上げ。	ヘラミガキ、全面漆仕上げ。			こぶい黄橙 こぶい黄橙	(12.2)	4.0	(2.2)
026	3	土師器	杯	体部ヘラケズリ後、口縁部ヨコナデ、漆仕上げ。	体部ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。全面漆仕上げ。	比較的密	良	こぶい黄橙 ※漆部分褐灰色 黒褐色	(12.2)	(3.1)	(5.4)
026	4	土師器	高台 (皿)	ロクロ調整。	ロクロ調整。ナデ。	密	良	明黄褐色 橙色	(8.2)	(1.8)	(5.4)
026	5	土師器	杯	ロクロ調整。	ナデ。	きわめて密。(カワラケのような水被した粘土の感じ)	良	明黄褐色 明黄褐色	(8.6)	(1.7)	(6.2)
026	6	土師器	小型甕	ヘラケズリ後、下半分一部ヘラミガキ。最後に口縁部ヨコナデ。	ヘラナデ後、口縁部ヨコナデ。底部にハケ目状にヘラナデ痕残る。	密	良	橙色 ※ミガキ部赤彩残る 橙色 ※内面漆仕上げか?	17.0	14.8	7.7
026	7		支脚	ナデ、ユビオサエ。一部指頭痕残る。 重量320.6g		比較的密。(1~2mm大・黒色粒少量含む)	良	橙色	3.5	(20.2)	(6.9)
027	1	土師器	杯	ヘラケズリ。	ヘラナデ。	密	良	橙色 橙色			
027	2	土師器	長頸壺	ロクロ調整。底部回転糸切り離し後、外周部ナデ。	ロクロ調整。	緻密。(0.2~0.5mm大・白色粒少量含む)	良	灰色 こぶい黄橙 ※黒漆部黒色	(13.2)	(5.3)	8.7
027	3	土師器	甕	下端部横方向ヘラケズリ後、ミガキのような比較的強いナデ。上部はヘラケズリ。	ヘラナデ。	比較的密	良	こぶい赤褐色 こぶい橙色	(13.8)	(5.1)	(7.8)

第3節 奈良・平安時代

1. 方形周溝状遺構

027号跡（第45～48図）

位置 E7-85グリッドを中心に検出された。

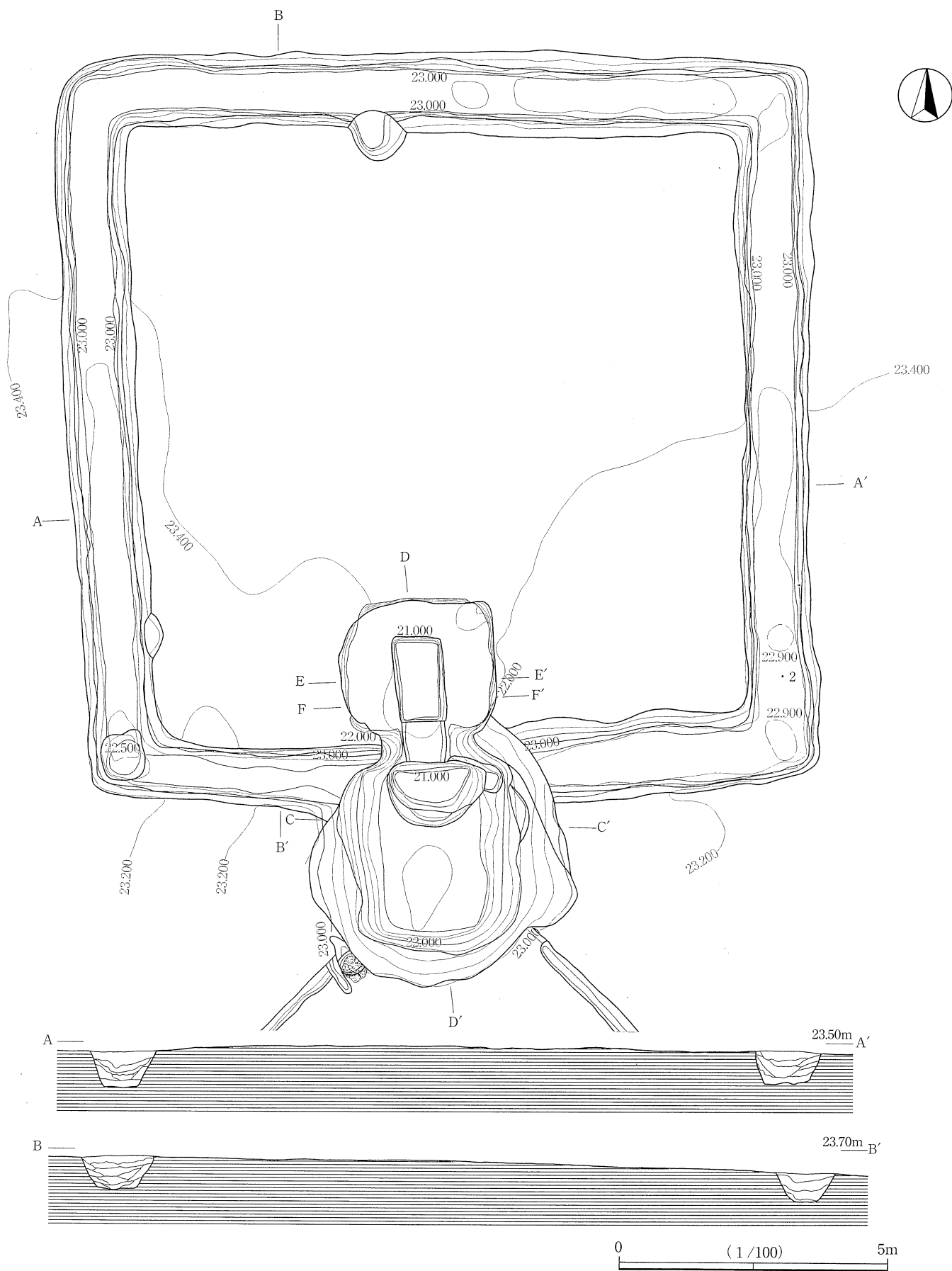
形態 南側において、024号遺構と重複する。周溝外周、方台部共に明確に屈曲する方形である。

周溝 確認面における規模は東溝が13.45m、西溝が13.71m、南溝が13.54m、北溝が13.94mを測る。また、東西方向断面A-A'外周で13.68m、方台部で11.16m、内部施設を含めた南北方向最大長で外周17.49m、方台部11.34mを測る。方位については南北辺中心線を基準とした場合、N-4°-Wを示す。周溝は、断面A-A'東溝で上幅1.21m、深さ0.62m、底幅0.78m、西溝で上幅1.22m、深さ0.66m、底幅0.63m、断面B-B'南溝で上幅1.08m、深さ0.52m、底幅0.49m、北溝で上幅1.34m、深さ0.64m、底幅0.72mを測る。堆積土はいずれも自然堆積を示し、ローム粒を少量含む暗黒色土及び暗褐色土を基本とする。

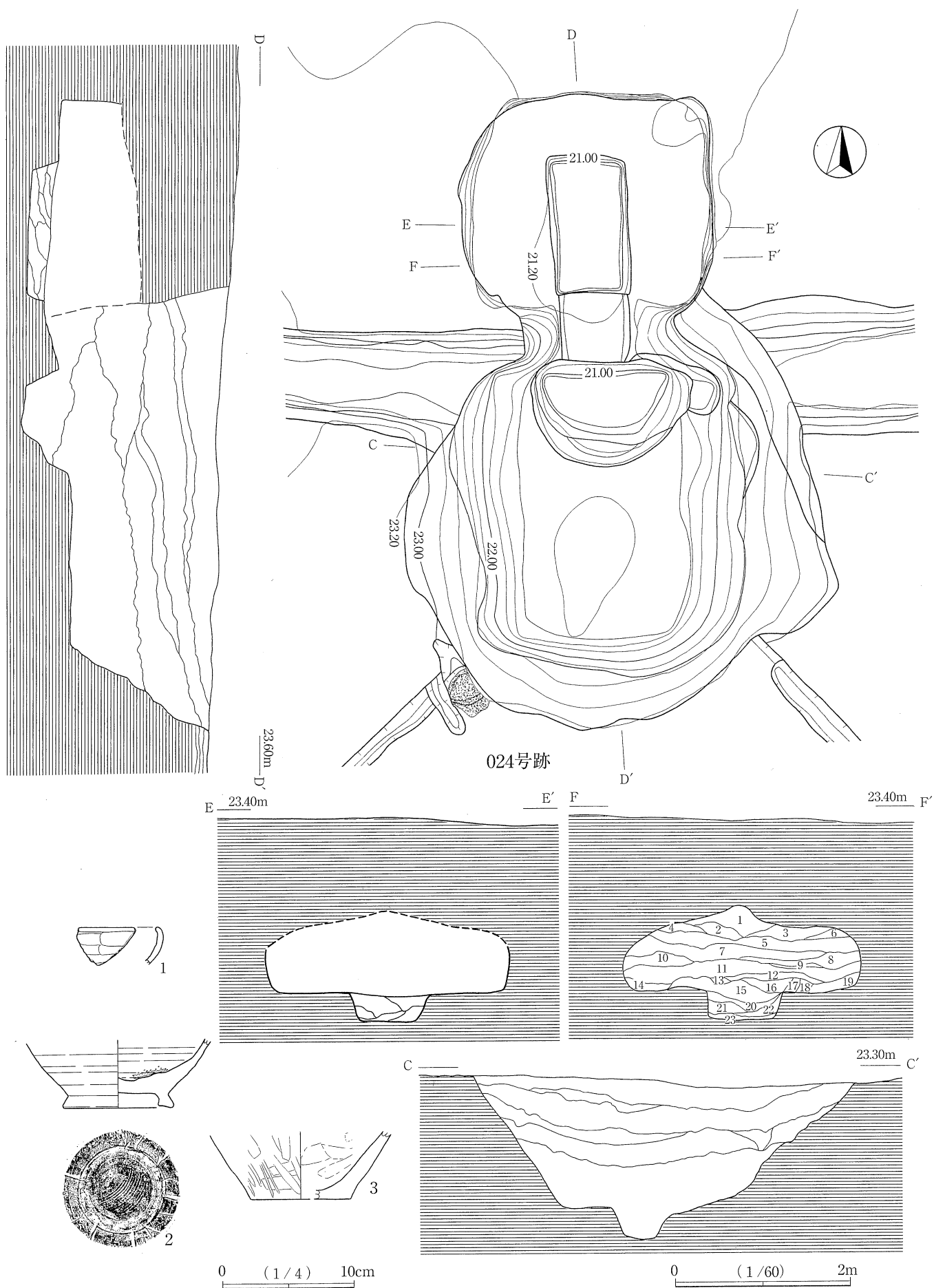
内部施設 南溝中央よりやや西寄りに地下式墳が検出された。入口部である竪坑と、埋納部である玄室に分けることができ、竪坑東側側壁に若干の階段状の平場が存在している。主軸方位は、玄室・竪坑中心線を基準とした場合、N-6°-Wを示す。竪坑の規模は、上場で東西長4.84m、南北長4.48m、底面で東西長1.86m、南北長3.20m、確認面からの深さは1.72mを測る。また、竪坑内玄門部付近において半月状のピットが存在し、南側には階段状を呈する平場面がある。規模は、上場で東西長1.84m、南北長1.22m、底面で東西長1.36m、南北長0.58m、竪坑底面からの深さは0.54mを測る。

堆積土は、暗黒褐色土及び暗褐色土に1～5cm大のロームブロックを大量に含む土が主体を占め、埋め戻し土であると考えられる。周溝部分の自然堆積土を切るようにして堆積しており、周溝埋没後においても遺体の追葬が行われたと考えられる。閉塞施設は検出されなかったが玄門付近に閉塞板（木板）は存在していた可能性がある。玄室の規模は、東西長2.42m、南北長2.36mを測り四隅に丸みを持つ方形を呈する。玄室断面は、底面から天井部までの高さ0.98m、横方向の最大長2.72mを測りカマボコ状を呈する。天井部までの高さが1mにも満たないことから玄室内に立った姿勢で入ることは困難であり、玄門手前にある半月状の掘り込みに立って棺を玄室内に送り込んだと考えられる。堆積土は、9層において板状の炭化材が検出されたものの他は暗褐色土に1～5cm大のロームブロックを均等に含む土を主体とする。竪坑の埋め戻し土が流れ込んだものであると考えられる。また、玄室内中央に方形の掘り込みが存在し、規模は上場で長軸1.58m、短軸0.90m、底面で長軸1.44m、短軸0.70m、玄室底面からの深さは0.30mを測る。玄室中央に方形に掘り込まれていることから棺座の可能性が高いと考えられる。堆積土は、上層が暗褐色土に1～2cm大のロームブロックが均等に含まれた土を主体とし、下層は黒色味の強い暗黒色土に粘土粒を均等に含み、5mm～2cm大のロームブロックを均等に含む土を主体とする。いわゆる木棺痕跡は確認されなかったが、下層土は大量の埋め戻し土が玄室内に流れ込み木棺痕跡土と混ざり合った可能性もある。奥壁は玄室底面から高さ0.66mにわたって検出されたが整形に伴う鋤痕跡等は確認されなかった。

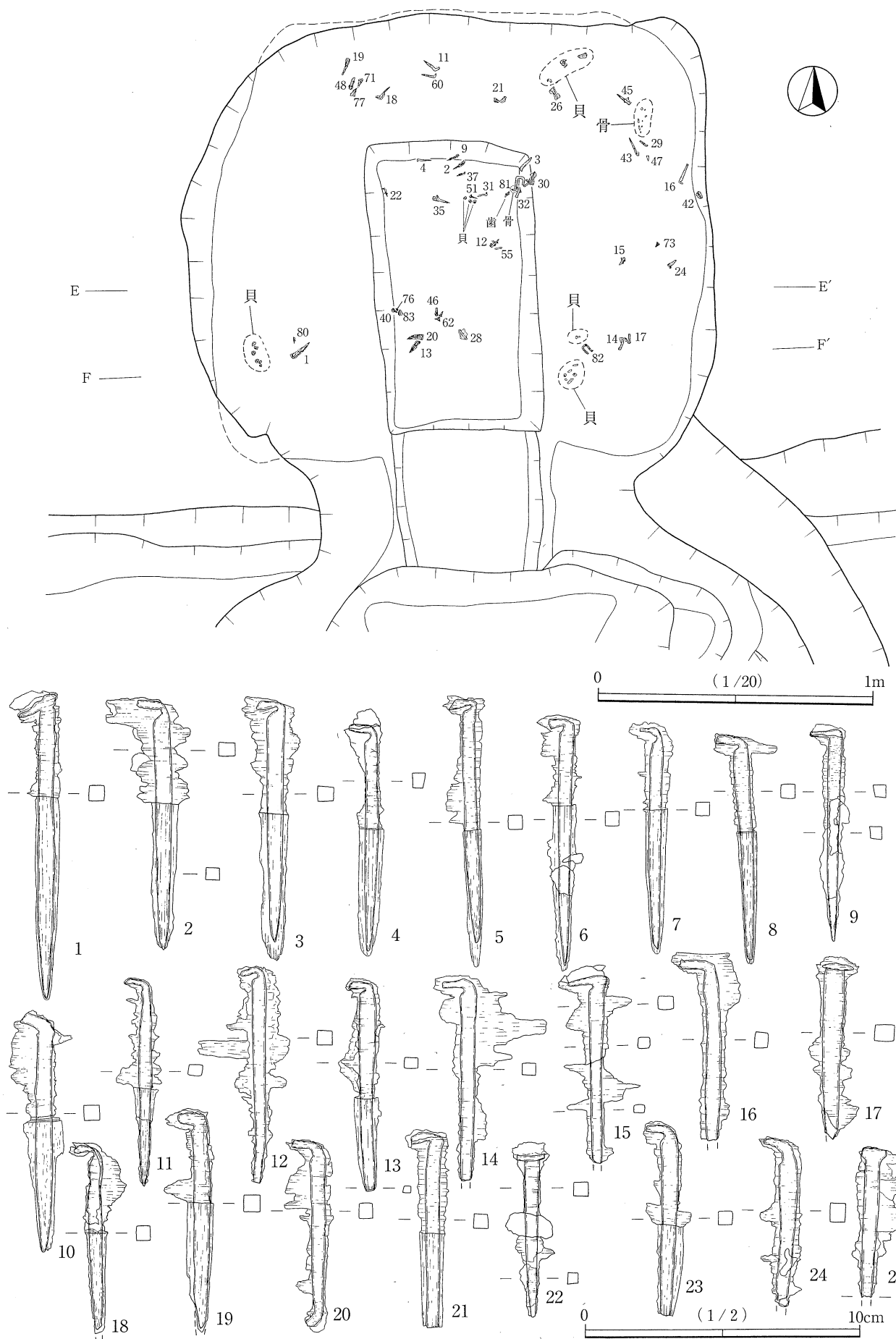
出土遺物 周溝内からは、東溝南側において灰釉陶器の長頸壺底部2が覆土下層から出土している。内部施設においては、玄室内において床面直上～下層にかけて木質を伴う鉄製釘及び木棺の門と考えられる鉄製品が計68点出土している（第47～48図、第6表参照）。81及び82は共に折り返し部を伴うU字



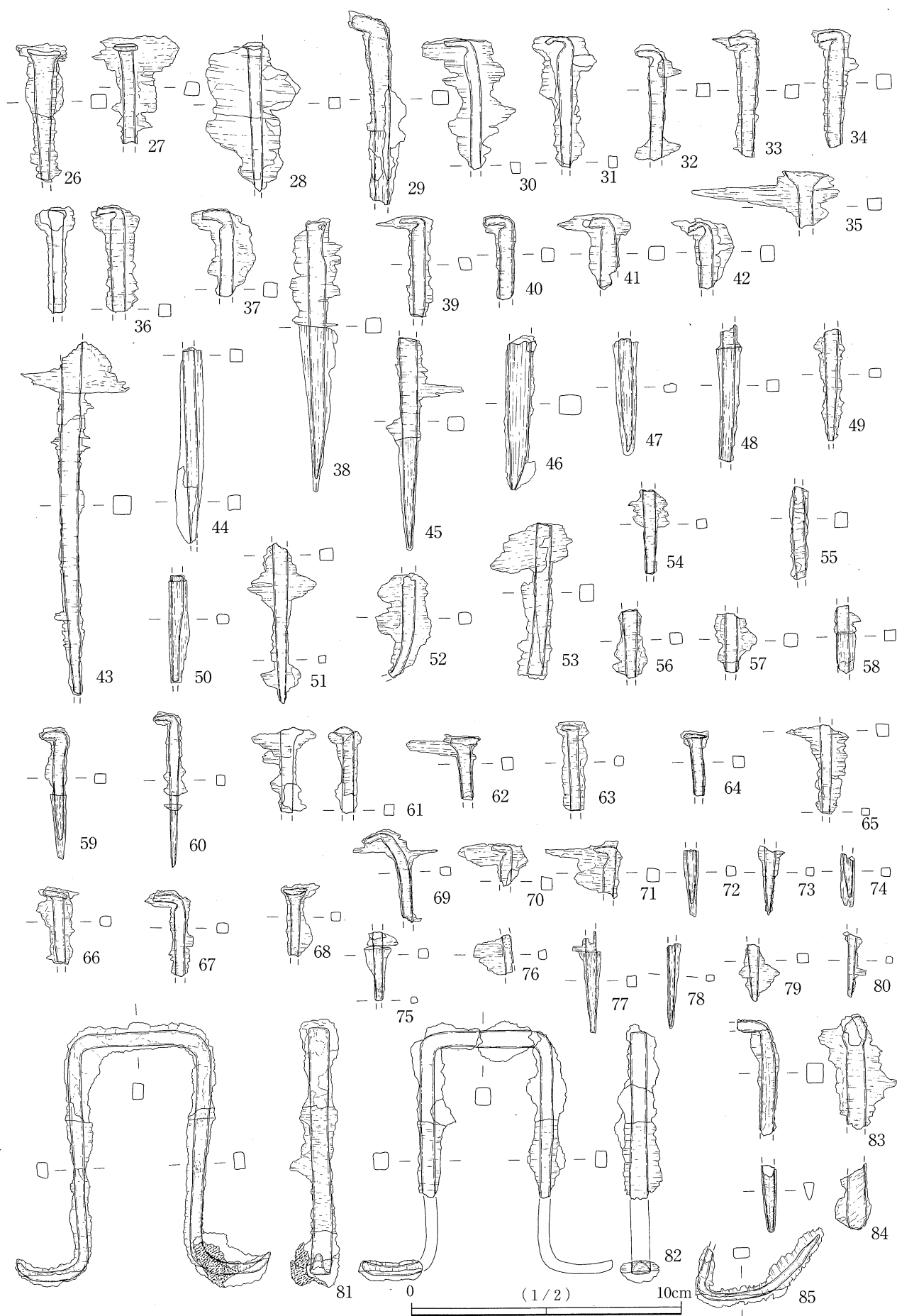
第45図 027号跡



第46図 027号跡地下式竈及び出土遺物



第47図 027号跡玄室遺物出土状況及び出土遺物



第48图 027号迹玄室出土遺物

型を呈し、棺を担ぐ横木を渡した門の部材である可能性がある。下側2/3と折り返し部の上側に横方向の木質部が付着する。U字型の鉄材を蓋である木板に打ち込んだのち、両端を折り返して木板裏側に固定したと考えられる。また、鉄製釘は多くが上半部が横方向、下半部が縦方向の木質部が付着し板目方向の異なる2材を固定したものであるが、28のように同一の横方向の2材を固定したものもあるようである。上材は3.0cm前後の厚さであることが多い。釘は2つの大きさに分けられ、全長8～10cm前後のものと5cm前後のものに分けられる。釘及び門に付着する木質はいずれも針葉樹材であると考えられる。鉄製釘は、中央の棺座と考えられる方形掘り込み面及び東側平坦面にかけて多く出土し、西側平坦面からはほとんど出土していない。骨は骨粉化したものが棺座と考えられる方形掘り込み面の北端東側及び、東側平坦面北側において検出されており、追葬に伴い東側平坦面も棺床として使用された可能性がある。棺座と考えられる方形掘り込み面の北端東側より出土した門部材81には骨が付着しており、人骨と考えられる。また、玄室の北西を除く3隅に少量の貝殻が確認された。貝種はハマグリ、シオフキ、イボキサゴ等が混在し統一性は見られなかった（第9表参照）。いずれも玄室床面直上であり、人為的に置かれたものと考えられる。棺座と考えられる方形掘り込み面の北端東側に被葬者のものと思われる歯が出土した。被葬者は北側を頭部にしていたと考えられる。

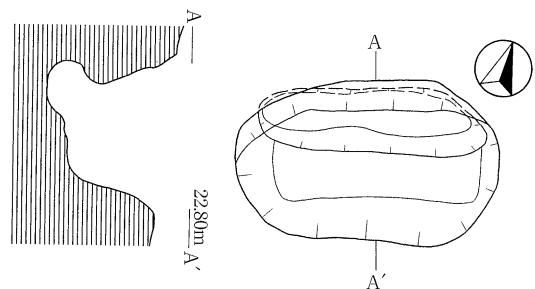
2. 土 坑

028号跡（第49図）

位置 D8-64グリッドを中心に検出された。南側に開く緩斜面上に位置する。

形態 いわゆる「有天井土坑」と呼ばれる土坑であり、底面まで掘り込んだ後、北側に向かって20cm程度袋状にローム層の地山を天井部にするように掘られている。平面規模は、2.09×1.28mを測るが、東側遺構上面はカクランによって一部切られている。掘り込みの深さは0.72～1.02mを測る。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土を主体とする。

遺物出土状況 遺物の出土は、皆無であり骨粉等も確認されなかった。



第49図 028号跡

第 6 表 027号跡出土鉄器観察表

() は残存値

挿図 番号	注記 番号	種別	遺存度	現存長 cm	厚 さ cm	重量 g	上 材 cm	下 材 cm	挿図 番号	注記 番号	種別	遺存度	現存長 cm	厚 さ cm	重量 g	上 材 cm	下 材 cm
1	23	釘	完存	11.10	0.58	27.55	横木取り 3.7	縦木取り (7.4以上)	44	1	釘		7.20	0.45	6.00		縦木取り 7.2以上
2	35	釘	完存	9.08	0.60	14.80	横木取り 3.8	縦木取り (5.3以上)	45	8	釘		7.80	0.56	9.20	横木取り (3.7以上)	縦木取り (4.2以上)
3	38	釘	完存	9.70	0.50	18.45	横木取り 4.1	縦木取り (5.4以上)	46	21	釘		5.70	0.75	8.30		縦木取り (5.8以上)
4	33	釘	完存	8.50	0.40	11.55	横木取り 3.8	縦木取り 4.7以上	47	11	釘		4.20	0.45	4.05		縦木取り 4.4以上
5	27	釘	完存	8.90	0.45	15.75	横木取り 4.7	縦木取り (4.9以上)	48	2	釘		5.10	0.98	3.85	横木取り (0.9以上)	縦木取り (4.2以上)
6	27	釘	完存	9.00	0.48	18.90	横木取り 3.2	縦木取り (6.1以上)	49	31	釘		4.10	0.40	2.80		横木取り (4.1以上)
7	27	釘	完存	8.10	0.48	13.85	横木取り 3.0	縦木取り (5.3以上)	50	14	釘		3.90	0.40	2.95		縦木取り (3.8以上)
8	27	釘	完存	8.20	0.50	12.85	横木取り 3.4	縦木取り (4.8以上)	51	47	釘		5.90	0.45	4.00	横木取り (2.1以上)	横木取り (3.8以上)
9	34	釘	完存	7.80	0.40	7.95	上材・下材区別つかず 横木取り (3.3以上)		52	14	釘		3.85	0.48	4.25		横木取り (3.9以上)
10	36	釘	完存	8.70	0.52	10.90	横木取り 3.5	縦木取り (4.8以上)	53	27	釘		5.60	0.50	13.10	横木取り (1.6以上)	横木取り (4.2以上)
11	5	釘	完存	7.60	0.48	7.20	横木取り 4.0	縦木取り 3.6	54	14	釘		3.10	0.40	1.80		横木取り (2.1以上)
12	48	釘		7.90	0.45	10.80	横木取り 3.2	横木取り (4.4以上)	55	49	釘		3.48	0.50	2.15	上材・下材区別つかず 横木取り (3.5以上)	
13	27	釘		7.70	0.50	12.70	横木取り 4.1	縦木取り (3.4以上)	56	14	釘		2.50	0.42	2.70		横木取り (2.6以上)
14	19	釘		7.30	0.45	17.05	上材・下材区別つかず 横木取り (7.5以上)		57	14	釘		2.10	0.35	0.60		横木取り (2.1以上)
15	16,17	釘		6.90	0.40	14.40	上材・下材区別つかず 横木取り (6.7以上)		58	1	釘		2.60	0.40	1.65	横木取り (1.0以上)	縦木取り (1.5以上)
16	12	釘		6.60	0.48	13.05	上材・下材区別つかず 横木取り (6.8以上)		59	14	釘	完存	4.10	0.35	3.70	横木取り 2.4	縦木取り (2.4以上)
17	18	釘		6.40	0.60	11.05	上材・下材区別つかず 横木取り (6.6以上)		60	5	釘	完存	5.70	0.32	3.65	横木取り 3.6	縦木取り (2.1以上)
18	4	釘		6.70	0.48	9.35	横木取り 3.1	縦木取り (3.7以上)	61	1	釘		3.20	0.35	2.25	横木取り (3.1以上)	
19	3	釘		7.80	0.58	13.85	横木取り 3.4	縦木取り (4.7以上)	62	21	釘		1.80	0.40	1.71	横木取り (1.9以上)	
20	27	釘		6.80	0.48	11.35	上材・下材区別つかず 横木取り (6.8以上)		63	14	釘		3.20	0.35	3.85	横木取り (3.2以上)	
21	27	釘		7.10	0.48	16.25	横木取り 3.4	縦木取り (3.5以上)	64	14	釘		2.30	0.38	1.05		横木取り (2.3以上)
22	32	釘	完存	5.90	0.40	5.80	横木取り 2.9	横木取り (3.4以上)	65	46	釘		3.30	0.30	3.40		横木取り (3.3以上)
23	27	釘		7.00	0.50	14.85	横木取り 3.6	縦木取り (3.3以上)	66	14	釘		2.60	0.35	4.05	横木取り (2.8以上)	
24	15	釘		5.90	0.58	12.95	上材・下材区別つかず 横木取り (6.1以上)		67	14	釘		3.10	0.40	4.50	横木取り (3.1以上)	
25	1	釘		5.40	0.30	8.30	上材・下材区別つかず 横木取り (5.5以上)		68	14	釘		2.45	0.35	2.05	横木取り (2.6以上)	
26	7	釘		4.80	0.58	9.95	上材・下材区別つかず 横木取り (5.0以上)		69	14	釘		3.40	0.40	2.90		横木取り (3.5以上)
27	14	釘		3.70	0.50	6.75	横木取り (3.9以上)		70	1	釘		1.50	0.40	3.10	横木取り (1.5以上)	
28	50	釘	完存	5.60	0.40	7.30	横木取り 2.5	横木取り (3.1以上)	71	2	釘		1.90	0.48	3.95	横木取り (2.1以上)	
29	9	釘		7.00	0.55	17.55	横木取り 4.3	縦木取り (2.7以上)	72	14	釘		2.00	0.30	1.15		縦木取り (2.5以上)
30	42	釘		4.80	0.30	9.05	横木取り (4.8以上)		73	14	釘		2.50	0.28	1.15		横木取り (2.6以上)
31	46	釘		4.80	0.30	7.40	上材・下材区別つかず 横木取り (4.8以上)		74	14	釘		1.60	0.30	0.40		縦木取り (2.0以上)
32	40	釘		4.10	0.48	4.00	横木取り (4.1以上)		75	1	釘		2.60	0.35	1.35	横木取り (0.5以上)	縦木取り (2.0以上)
33	27	釘		4.50	0.48	8.20	横木取り (4.7以上)		76	22	釘		1.40	0.35	0.70	上材・下材区別つかず 横木取り (1.5以上)	
34	27	釘		4.80	0.52	9.50	横木取り (4.3以上)		77	2	釘		3.70	0.35	1.90	横木取り (0.7以上)	縦木取り (3.0以上)
35	37	釘		2.20	0.50	3.95	横木取り (2.1以上)		78	14	釘		3.10	0.25	0.75		縦木取り (3.2以上)
36	1	釘		4.00	0.45	7.55	横木取り (4.0以上)		79	14	釘		2.20	0.45	2.20		横木取り (2.3以上)
37	1	釘		3.30	0.50	3.75	横木取り (3.2以上)		80	24	釘		2.30	0.23	0.45		横木取り (2.2以上)
38	27	釘		9.50	0.55	18.25	横木取り (4.0以上)	縦木取り (6.1以上)	81	39	門	完存	10.00	0.40	52.50		
39	14	釘		3.60	0.40	6.20	横木取り (3.7以上)	縦木取り (7.4以上)	82	20	門		(9.20)	0.58	30.85		
40	22	釘		3.10	0.48	4.85	横木取り (3.1以上)	縦木取り (7.4以上)	83	22	部材?		4.20	0.60	5.50	横木取り (4.1以上)	
41	14	釘		2.60	0.58	4.10	横木取り (2.7以上)	縦木取り (7.4以上)	84	14	部材?		2.50	0.30	1.55	横木取り (2.5以上)	
42	13	釘		2.50	0.50	4.35	横木取り (2.5以上)		85	27	部材?		2.00	0.40	6.70		
43	10	釘		13.10	0.65	38.00	横木取り (1.9以上)	横木取り (11.2以上)									

第4節 動物遺存体について

概 要

本遺跡は、いわゆる地点貝塚とも言え、縄文時代後期前葉の遺構と3カ所の貝層が検出された。貝層内からはハマグリを始めとする貝類及び獣・魚骨などの動物遺存体が検出された。貝類を除けば動物遺存体の出土量はいたって少なかった。貝類は腹足綱8種、二枚貝綱7種が同定された。ここでは、貝種組成表、ハマグリ殻高度数分布グラフから上げられる特徴を指摘したいと思う。なお、貝以外の動物遺存体については十分な分析作業までには至らなかったため、確認できた脊椎動物種名のみを記すことにしたい。

1. 貝 類

腹足綱	CLASS	GASTROPODA	二枚貝綱	CLASS	BIVALAVIAA
イボキサゴ		Umbonium (Suchium) moniliferum	ハイガイ		Tegillarca granosa
ウミナナ属		Batillaria sp.	マガキ		Crassostra gigas
ツメタガイ		Glossaulax didyma	シオフキガイ		Mactra quadrangulati
アカニシ		Rapana venosa	アサリ		Ruditapes philippina
イボニシ		Thais (Reishia) clavigera	ハマグリ		Meretrix lusoria
バイ		Balytonia japonica	オキシジミ		Cyclina sinensis
アラムシロガイ		Hinia festiva	カガミガイ		Phacosoma japonicum
キセルガイ		Family clausiliidae			

2. 脊椎動物

軟骨魚綱 CHONDRICHTHYES

エイ目 Rajiformes

エイ類 Fam.indet

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

ウナギ目 Anguilliformes

ウナギ Anguilla japonica

スズキ亜目 Percoidei

タイ科 Sparidae

クロダイ属 Acanthopagrus sp.

クロダイ Acanthopagrus schlegeli

アジ科 Carangidae

マアジ Trachurus japonicus

サバ亜目 Scombroidei

サバ科 Scombridae

ハゼ亜目 Gobioidae

ハゼ科 Gobiidae

種不明 Gen.et sp.indet.
 カサゴ目 Scorpaeniformes
 コチ科 Platycephalidae
 種不明 Gen.et sp.indet.
 哺乳綱 MAMMALIA
 齧歯目 Rodentia
 ネズミ科 Muridae
 食肉目 Canivora
 イヌ科 Canidae
 イヌ Canis familiaris
 偶蹄目 Artiodactyla
 イノシシ科 Suidae
 イノシシ Sus scrofa

3. 各貝層の貝類組成比率 (第7～9表)

001号跡

二枚貝綱においてはハマグリが全体の67%以上を占める。以下シオフキが24.4%、アサリが8.1%であり、他はいずれも0.1%である。巻貝は、イボキサゴが96～98%と圧倒的な多数を占め個体数、重量とも多量であり、以下アラムシロ、ウミニナ、ツメタガイ等が続く。

003号跡

二枚貝綱においてL・R共にハマグリが多数を占めている。これにアサリ・カガミガイが少数含まれる。腹足綱においてはイボキサゴが圧倒的な多数を占めほぼ100%である。

004号跡

二枚貝綱において各層、L・R共にハマグリが多数を占め80～90%の比率を示す。以下シオフキ・マガキが少数を占める。腹足綱においては各層共にイボキサゴが圧倒的な多数を占める。

013号跡

二枚貝綱においてL・R共にハマグリが100%を占めている。腹足綱においてはイボキサゴが80%を占め、ウミニナ・カワニシ・ツメタガイが少量続く。

014号跡

二枚貝綱においてL・R共にハマグリが多数を占め87～95%の比率を示す。腹足綱においてはイボキサゴが多数を占める。

017号跡

二枚貝綱において各層、L・R共にハマグリが70%以上を占めている。シオフキがこれに続き、以下アサリ・マガキが少数含まれる。腹足綱は上層にはあまり含まれず下層を中心に多く含まれ、イボキサゴが多数を占める。

018号跡

二枚貝綱においてL・R共にハマグリが多数を占め83%前後の比率を示す。シオフキがこれに続き、

以下アサリ・オキシジミ・マガキが少数を占める。腹足綱においてはイボキサゴが圧倒的多数を占める。また、本遺構では貝類に混じって哺乳類及び魚類の骨が含まれており、イヌの下顎骨やネズミの脛骨及びウナギの椎骨やエイ目の骨片が含まれており、魚骨はその数量も多く、この点が他の遺構とは異なる特徴となっている。

019号跡

二枚貝綱においてL・R共にハマグリが多数を占め85%前後の比率を示す。以下シオフキ・マガキが少数含まれる。腹足綱においてはイボキサゴが圧倒的多数を占め、以下ウミニナ・ツメタガイがごく少量含まれる。

021号跡

遺構南東側上層にハマグリを中心とする貝層が層厚40cmにわたって堆積し、上層が破碎されたハマグリ、下層が完形のハマグリを主体としていた。組成は、ハマグリが91.7%と圧倒的な比率を占め、以下シオフキが7.8%、アサリが0.3%、マガキが0.2%と続く。ハマグリ、シオフキ、アサリが上位を占める点は縄文時代後期の001号遺構内貝層と同様の傾向を示す。巻貝は、アカニシ、イボキサゴ、アラムシロが少量含まれるのみである。

027号跡

二枚貝綱においては、ハマグリ・及びシオフキの破碎貝が含まれ、腹足綱では、ウミニナ・カワニナ・ツメタガイが含まれていた。

4. ハマグリ of 殻高計測値 (第10表)

竪穴住居跡の001号跡から出土したハマグリ of 殻高を計測し、グラフにしたところ殻高 of 最頻値は各層L・Rとも2.6cm～3.0cmであった。一方、土坑 of 021号跡から出土したハマグリ of 殻高度数分布グラフを見ると、殻高 of 最頻値は各層L・Rとも5.0cm～5.3cmであった。この2遺構 of 殻高比 of 違いはかなり大きなものと考えられる。001号跡においては2年から3年程度 of 個体が多く、021号跡においては3年から4年程度 of 個体が主体を占めていると思われる。これは単純に考えれば001号跡においては生物量に対して採取圧高かった可能性を示しており、逆に021号跡では生物量が採取量を上回っていると推測される。殻高 of 計測は他の貝層 from のものでは実施していないので確かなことは言えないが、ほとんどの貝層では001号跡と類似した傾向であると思われる。忍澤成視氏による祇園原貝塚出土 of ハマグリ of 殻高分析の結果では、称名寺式期には2.8～3.6cmの間にピークがあり、堀之内I式期には2.0～3.6cmにピークが見られるという。これに対して、021号跡 of ピークが5.0cm～5.3cmにある点はかなり異質であると言える。採取 of 時期(時代)が全く異なっているか、あるいは特殊な選択性がそこにあるのではないと思われる。021号跡は明確に土器が伴出していないため、他の貝層 of 時期と同じく称名寺式から堀之内I式にかけて of 時期と推定しているが、これは妥当ではないかもしれない。

第7表 貝類組成表1

001号跡 貝層（10mm）同定結果（二枚貝）

	第1層						第2層						第3層						第4層(伊内貝)						合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%			
アサリ	65	243.2	9.1	80	275.5	10.6	48	167.6	6.6	45	154.3	5.8	6	26.8	5.7	6	32.6	5.3				134	475.7	8.1			
オオノガイ													1	2.7	0.9							1	2.7	0.1			
オキシジミ													1	5.0	0.9							1	5.0	0.1			
カガミガイ				1	5.0	0.1																1	5.0	0.1			
シオフキ	236	523.1	33.2	239	630.0	31.6	113	289.8	15.5	134	289.0	17.2	20	64.2	18.9	31	104.3	27.2				405	1043.0	24.4			
ハイガイ	1	5.0	0.1																1	19.7	50.0	405	1043.0	24.4			
ハマグリ	408	1072.6	57.4	436	1203.4	57.7	567	1385.2	77.8	599	1473.9	76.9	77	331.6	72.6	77	235.7	67.5	4	36.8	100.0	1	23.2	50.0	1116	3045.7	67.1
マガキ	1	3.4	0.1				1	7.0	0.1	1	4.3	0.1										2	10.4	0.1			
ヤマトシジミ													1	3.7	0.9							1	3.7	0.1			
合計	711	1847.3	100.0	756	2113.9	100.0	729	1849.6	100.0	779	1921.5	100.0	106	434.0	100.0	114	372.6	100.0	4	36.8	100.0	1662	4596.2	100.0			
サンブル総乾燥重量				40680						37300						30530								810			
フルイ水洗後貝殻重量				6997.0						5568.0						1780.0								101.8			
湿土率(%)				32.9						27.8						15.3								28.3			
総乾燥重量				285950						159770						60100								810		506630	

001号跡 貝層（10mm）同定結果（巻貝）

	第1層			第2層			第3層			第4層(伊内貝)			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ				4	106.5	0.2							4	106.5	0.1
アラムシロ	1	2.1	0.0	3	6.3	0.1	1	1.7	0.1				5	10.1	0.1
イボキサゴ	2188	1579.0	98.7	2220	1520.0	98.6	697	490.0	99.0	53	50.6	100.0	5158	3639.6	98.7
イボニシ	3	5.2	0.1	3	10.1	0.1							6	15.3	0.1
ウミナナ	12	15.5	0.5	12	16.5	0.5	4	5.6	0.6				28	37.6	0.5
オカミミガイ															
カワニナ							1	2.6	0.1				1	2.6	0.0
キセルガイ															
ツメタガイ	11	62.3	0.5	8	67.1	0.4							20	135.5	0.4
バイ	1	5.0	0.0										2	16.2	0.0
合計	2216	1669.1	100.0	2251	1737.7	100.0	704	506.0	100.0	53	50.6	100.0	5224	3963.4	100.0
サンブル総乾燥重量				40680						30530			810		
フルイ水洗後貝殻重量				6997.0						5568.0			1780.0		
湿土率(%)				32.9						27.8			28.3		
総乾燥重量				285950						159770			60100		

003号跡 貝層（10mm）同定結果（二枚貝）

	第1層						合計					
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アサリ				5	12.7	12.8				5	12.7	12.8
オオノガイ												
オキシジミ												
カガミガイ				1	3.0	2.6				1	3.0	2.6
シオフキ												
ハイガイ												
ハマグリ	31	64.2	100.0	33	69.0	84.6				33	69.0	84.6
マガキ												
ヤマトシジミ												
合計	31	64.2	100.0	39	84.7	100.0				39	84.7	100.0
サンブル総乾燥重量				6340						6340		
フルイ水洗後貝殻重量				590.0						590.0		
湿土率(%)				30.1						30.1		
総乾燥重量				36610						36610		

003号跡 貝層（10mm）同定結果（巻貝）

	第1層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ						
アラムシロ						
イボキサゴ	461	350.0	99.6	461	350.0	99.6
イボニシ						
ウミナナ	2	2.5	0.4	2	2.5	0.4
カワニナ						
キセルガイ						
ツメタガイ						
バイ						
フジツボ						
合計	463	352.5	100.0	463	352.5	100.0
サンブル総乾燥重量				6240		
フルイ水洗後貝殻重量				590.0		
湿土率(%)				30.1		
総乾燥重量				36610		

004号跡 貝層（10mm）同定結果（二枚貝）

	第15層						第16層						合計					
	L			R			L			R			L			R		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アサリ	2	12.4	0.6	3	13.9	0.8				1	3.9	0.3	4	17.8	0.6			
オオノガイ																		
オキシジミ	1	5.7	0.3	1	5.3	0.3	4	17.4	1.3	3	8.8	1.0	5	23.2	0.7			
カガミガイ							1	7.8	0.3				1	7.8	0.1			
シオフキ	32	124.7	9.0	37	130.0	10.2	15	46.6	4.8	14	36.3	4.8	52	166.3	7.7			
ハイガイ	3	17.9	0.8	4	25.1	1.1				3	18.2	1.0	7	43.3	1.0			
ハマグリ	307	860.0	86.7	308	920.0	85.3	278	890.0	89.4	263	760.0	90.1	586	1810.0	86.6			
マガキ	9	26.7	2.5	8	20.8	2.2	13	21.6	4.2	8	29.2	2.7	22	48.3	3.2			
ヤマトシジミ																		
合計	354	1047.4	100.0	361	1115.6	100.0	311	983.4	100.0	292	856.4	100.0	677	2116.7	100.0			
サンブル総乾燥重量				7700						6150			14150					
フルイ水洗後貝殻重量				2750.0						2150.0			4900.0					
湿土率(%)				50.6						45.3			48.2					
総乾燥重量				73290						86200			159490					

004号跡 貝層（10mm）同定結果（巻貝）

	第15層			第16層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ	3	35.9	1.3	1	5.3	1.2	4	41.2	1.3
アラムシロ									
イボキサゴ	216	172.9	96.4	83	59.7	96.5	299	232.6	96.5
イボニシ									
ウミナナ	3	4.1	1.3				3	4.1	1.0
オカミミガイ									
カワニナ				1	2.4	1.2	1	2.4	0.3
キセルガイ									
ツメタガイ	2	25.2	0.9	1	4.9	1.2	3	30.1	1.0
バイ									
合計	224	202.2	100.0	86	67.0	100.0	310	310.4	100.0
サンブル総乾燥重量				7700			6450		
フルイ水洗後貝殻重量				2750.0			2150.0		
湿土率(%)				50.6			45.3		
総乾燥重量				73290			86200		

013号跡 貝層（10mm）同定結果（二枚貝）

	第7層						合計					
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アサリ												
オオノガイ												
オキシジミ												
カガミガイ												
シオフキ												
ハイガイ												
ハマグリ	8	18.0	100.0	10	29.4	100.0				10	29.4	100.0
マガキ												
ヤマトシジミ												
合計	8	18.0	100.0	10	29.4	100.0				10	29.4	100.0
サンブル総乾燥重量										-		
フルイ水洗後貝殻重量				129.6						129.6		
湿土率(%)				-						-		
総乾燥重量				-						-		

013号跡 貝層（10mm）同定結果（巻貝）

	第7層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ	2	18.5	6.3	2	18.5	6.3
アラムシロ						
イボキサゴ	26	21.0	81.3	26	21.0	81.3
イボニシ						
ウミナナ	3	3.8	9.4	3	3.8	9.4
オカミミガイ						
カワニナ						
キセルガイ						
ツメタガイ	1	2.7	3.1	1	2.7	3.1
バイ						
合計	32	27.5	100.0	32	27.5	100.0
サンブル総乾燥重量						
フルイ水洗後貝殻重量		129.6			129.6	
殻土留(%)		-			-	
総乾燥重量		-			-	

第8表 貝類組成表 2

017号跡 貝層 (10mm) 同定結果(二枚貝)

	第1層						第2層						第3層						第4層					
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アサリ	1	2.8	0.9	1	4.0	1.0	1	3.9	1.3										11	23.3	5.7	6	13.7	3.1
オオノガイ																								
オキシシジミ																								
カガミガイ																								
シオフキ	26	51.0	24.5	23	53.9	23.7	11	18.9	13.9	8	13.7	12.3				2	3.3	9.5	38	102.4	19.8	43	118.1	22.4
ハイガイ																								
ハマグリ	79	162.2	74.5	73	149.8	75.3	65	129.6	82.3	57	114.3	87.7	11	13.5	100.0	19	28.0	90.5	142	310.0	74.0	143	300.0	74.5
マガキ							2	3.5	2.5										1	5.9	0.5			
ヤマトシジミ																								
合計	106	216.0	100.0	97	207.7	100.0	79	155.9	100.0	65	128.0	100.0	11	13.5	100.0	21	31.3	100.0	192	441.6	100.0	192	431.8	100.0
サンプル総乾燥重量					2490						2750												8190	
フルイ水洗後貝殻重量					614.4						500.8												1249.1	
湿土率(%)					35.5						27.5												28.2	
総乾燥重量					2490						2750												16580	

	第5層						第6層						第7層						合計					
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アサリ	14	28.4	7.8	7	17.0	4.6	3	6.6	6.0	1	2.3	2.4	11	22.1	3.6	14	36.9	3.6	44	103.1	4.3	8	151.7	2.9
オオノガイ																			1	2.8	0.1			
オキシシジミ																								
カガミガイ																								
シオフキ	9	22.8	5.0	4	12.8	2.6	1	7.8	2.0	4	6.8	9.8	23	50.5	8.4	29	52.6	7.5	124	279.5	12.1			
ハイガイ																								
ハマグリ	155	264.4	86.6	142	242.2	92.8	42	103.3	84.0	36	77.4	87.8	263	400.0	85.8	341	500.0	87.9	844	1492.5	82.3			
マガキ	1	6.1	0.6										7	19.3	2.3	4	9.6	1.0	11	34.8	1.1			
ヤマトシジミ																								
合計	179	321.7	100.0	153	272.0	100.0	50	135.5	100.0	41	86.5	100.0	303	491.9	100.0	388	599.1	100.0	1025	1920.5	100.0			
サンプル総乾燥重量					8680						9090												40930	
フルイ水洗後貝殻重量					934.3						292.0												5269.4	
湿土率(%)					23.9						7.5												25.4	
総乾燥重量					16370						9090												64840	

017号跡 貝層 (10mm) 同定結果(巻貝)

	第1層			第2層			第3層			第4層			第5層			第6層			第7層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ	2	36.0	33.3	2	46.5	9.1	1	17.7	50.0	1	23.6	11.1	1	19.1	1.4	1	8.8	4.8				8	151.7	2.9
アラムシロ																								
イボキサゴ	1	1.8	16.7	5	5.7	22.7	1	1.8	50.0	7	5.7	77.8	60	41.9	85.7	18	13.1	85.7	145	95.3	100.0	237	165.3	86.2
ウミナシ													1	2.9	1.4							1	2.9	0.4
カワニナ																								
オカミガイ																								
ツメタガイ	3	23.7	50.0	15	100.7	68.2				1	10.2	11.1	8	59.6	11.4	2	14.2	9.5				29	208.4	10.5
ハイ																								
フジツボ																								
合計	6	61.5	100.0	22	152.9	100.0	2	19.5	100.0	9	39.5	100.0	70	123.5	100.0	21	36.1	100.0	145	95.3	100.0	275	528.3	100.0
サンプル総乾燥重量					2490				830		8190			8680			9090			8900			40930	
フルイ水洗後貝殻重量					614.4				70.5		1249.1			984.3			292.0			1558.3			5269.4	
湿土率(%)					35.5				18.3		28.2			23.9			7.5			40.2			25.4	
総乾燥重量					2490				830		16580			16370			9090			16730			64840	

018号跡 貝層 (10mm) 同定結果(二枚貝)

	第2層						合計					
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アサリ	12	28.6	1.7	12	42.6	1.8	12	42.6	1.7			
オオノガイ	1	2.9	0.1				1	2.9	0.1			
オキシシジミ	15	68.5	2.1	17	64.4	2.5	17	64.4	2.4			
カガミガイ												
シオフキ	84	292.9	12.0	84	238.0	12.5	84	292.9	11.9			
ハイガイ												
ハマグリ	585	1740.0	83.5	554	1730.0	82.6	585	1740.0	83.2			
マガキ	4	9.8	0.6	4	16.6	0.6	4	16.6	0.6			
ヤマトシジミ												
合計	701	2142.7	100.0	671	2141.6	100.0	703	2159.4	100.0			
サンプル総乾燥重量					25940			25940				
フルイ水洗後貝殻重量					6040.0			6040.0				
湿土率(%)					35.3			35.3				
総乾燥重量					230740			230740				

018号跡 貝層 (10mm) 同定結果(巻貝)

	第2層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ	5	71.8	0.4	5	71.8	0.4
アラムシロ						
イボキサゴ	1274	978.8	98.5	1274	978.8	98.5
イボニシ	2	4.2	0.2	2	4.2	0.2
ウミナシ	6	8.7	0.5	6	8.7	0.5
オカミガイ						
カワニナ	1	3.9	0.1	1	3.9	0.1
オカミガイ						
ツメタガイ	6	38.6	0.5	6	38.6	0.5
ハイ						
合計	1294	1034.2	100.0	1294	1034.2	100.0
サンプル総乾燥重量				25940		
フルイ水洗後貝殻重量				6040.0		
湿土率(%)				35.3		
総乾燥重量				230740		

019号跡 貝層 (10mm) 同定結果(二枚貝)

	第4層						合計					
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アサリ	2	10.0	0.6	2	10.0	0.6	2	10.0	0.6			
オオノガイ	2	5.5	0.6				2	5.5	0.6			
オキシシジミ	3	23.6	0.9	4	19.5	1.2	4	19.5	1.1			
カガミガイ	3	10.9	0.9	2	17.5	0.6	3	10.9	0.8			
シオフキ	31	140.7	9.3	36	155.7	10.4	36	155.7	10.2			
ハイガイ												
ハマグリ	284	1140.0	85.0	298	1270.0	85.9	298	1270.0	84.2			
マガキ	9	20.5	2.7	7	13.7	2.0	9	20.5	2.5			
ヤマトシジミ												
合計	334	1351.2	100.0	347	1476.4	100.0	354	1492.1	100.0			
サンプル総乾燥重量					14400			14400				
フルイ水洗後貝殻重量					5330			5330				
湿土率(%)					52.2			52.2				
総乾燥重量					106340			106340				

019号跡 貝層 (10mm) 同定結果(巻貝)

	第4層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ	4	60.6	0.3	4	60.6	0.3
アラムシロ						
イボキサゴ	1468	1190.0	98.0	1468	1190.0	98.0
イボニシ						
ウミナシ	11	12.1	0.7	11	12.1	0.7
オカミガイ	1	3.2	0.1	1	3.2	0.1
カワニナ	3	3.6	0.2	3	3.6	0.2
キセルガイ	1	1.6	0.1	1	1.6	0.1
ツツミガイ	10	76.4	0.7	10	76.4	0.7
バタ						
合計	1498	1296.9	100.0	1498	1347.5	100.0
サンパシ総産後重量		14400			14400	
フルヒ水産後重量		5330.0			5330.0	
湿土重量		52.2			52.2	
総乾燥重量		10623.0			10634.0	

第9表 貝類組成表3

027号跡 貝層 (10mm) 同定結果(二枚貝)

	第28層						第30層						合計		
	L			R			L			R			個数	重量g	%
アサリ															
オオノガイ															
オキシシジミ															
カガミガイ															
シオフキ	3	3.4	42.9	1	3.5	11.1							3	3.4	25.0
ハイガイ							1	1.4	100.0	1	2.2	100.0			
ハマグリ	4	8.7	57.1	8	14.6	88.9							9	16.8	75.0
マガキ															
ヤマトシジミ															
合計	7	12.1	100.0	9	18.1	100.0	1	1.4	100.0	1	2.2	100.0	12	20.2	100.0
サンプル総乾燥重量	-						-						-		
フルイ水洗後貝総重量	69.0						6.9						75.9		
湿土率(%)	-						-						-		
総乾燥重量	-						-						-		

027号跡 貝層 (10mm) 同定結果(巻貝)

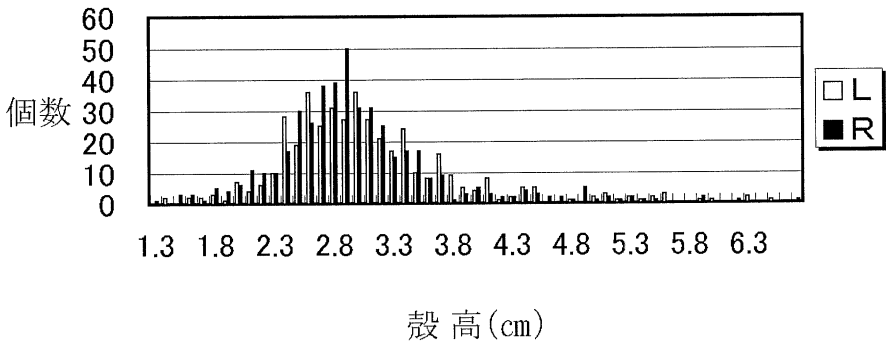
	第28層			第44層			合計		
	個数	重量g	%	個数	重量g	%	個数	重量g	%
アカニシ									
アラムシロ									
イボキサゴ									
イボニシ									
ウミナシ	1	1.2	50.0				1	1.2	33.3
オカミミガイ									
カクニナ	1	1.8	50.0				1	1.8	33.3
キセルガイ									
ツメタガイ				1	2.8	100.0	1	2.8	33.3
ハイ									
合計	2	3.0	100.0	1	2.8	100.0	3	5.8	100.0
サンプル総乾燥重量	-			-			-		
フルイ水洗後貝総重量	69.0			2.8			71.8		
湿土率(%)	-			-			-		
総乾燥重量	-			-			-		

第10表 ハマグリ殻高度数分布

001号跡 10mmハマグリ殻高度数分布表

	1.3	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9	2.0	2.1	2.2	2.3	2.4	2.5	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0
L		2		2	2	3	1	7	4	6	10	28	19	36	25	31	27	36	27	21	17	24	10	8	16	9	5	4
R	1		3	3	1	5	4	6	11	10	10	17	30	26	38	39	50	31	31	25	15	17	17	8	9	1	3	5

	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.8	4.9	5.0	5.1	5.2	5.3	5.4	5.5	5.6	5.7	5.8	5.9	6.0	6.1	6.2	6.3	6.4	6.5	6.6	6.7	合計
L	8	1	2	5	5			1		2	3	1	2	1	2	3				1	1			2		1		421
R	3	2	2	4	3	2	2	1	5	1	2	1	2	1	1					2			1			1	452	

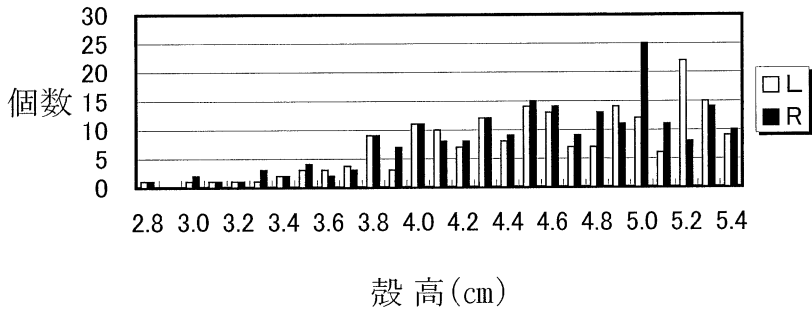


L		R	
平均	3.1	平均	3.0
中央値	3.0	中央値	2.9
最頻値	2.6, 3.0	最頻値	2.9
標準偏差	0.78	標準偏差	0.73
最小	1.4	最小	1.3
最大	6.5	最大	6.7
標本数	421	標本数	452

021号跡 10mmハマグリ殻高度数分布表

	2.8	2.9	3.0	3.1	3.2	3.3	3.4	3.5	3.6	3.7	3.8	3.9	4.0	4.1	4.2	4.3	4.4	4.5	4.6	4.7	4.8	4.9	5.0	5.1	5.2	5.3	5.4	5.5
L	1		1	1	1	1	2	3	3	4	9	3	11	10	7	12	8	14	13	7	7	14	12	6	22	15	9	12
R	1		2	1	1	3	2	4	2	3	9	7	11	8	8	12	9	15	14	9	13	11	25	11	8	14	10	8

	5.6	5.7	5.8	5.9	6.0	6.1	6.2	6.3	6.4	6.5	6.6	6.7	6.8	6.9	7.0	7.1	7.2	合計
L	9	11	11	7	6	8	5	3	8	5	2	1	2	2	1		4	293
R	7	8	10	8	7	9	4	3	5	2	2	4		3			1	294



L		R	
平均	5.1	平均	5.0
中央値	5.1	中央値	5.0
最頻値	5.2	最頻値	5.0
標準偏差	0.88	標準偏差	0.85
最小	2.8	最小	2.8
最大	7.2	最大	7.2
標本数	293	標本数	294

第3章 まとめ

今回の調査では、縄文時代後期称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式前葉の竪穴住居跡が6棟検出された。このうちの3棟から覆土内で貝層が確認された。また遺構に伴わない貝層が3地点で検出された。各貝層の規模はいたって小規模で貝層の厚さも薄いもので、貝の廃棄時期を明確にする資料には乏しかったが、竪穴住居跡の時期とほぼ同時期と考えられる。また、遺物を伴って時期等を明確にできる土坑は少なかったものの、縄文時代の土坑と判断できるものは全部で12基検出されており、このうちの7基に貝のブロックが認められた。廃棄のされ方には共通性はないようであったが、伴出した土器から竪穴と同時期の称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式前葉の時期であることが判明した。今回の調査によって検出された貝層や貝ブロックの状況は、北野原遺跡がいわゆる縄文時代後期の地点貝塚であることを示している。前後型式の称名寺Ⅰ式土器が微量であったことや堀之内Ⅰ式中葉からⅡ式にかけての土器がほとんど認められなかったことは、この集落が短い期間の集落であったことを示している。対岸に位置する祇園原貝塚の調査でも称名寺式から堀之内Ⅰ式前葉までの遺構・遺物はあまり多くはなかったことから、今回の調査によってこの地域の称名寺式から堀之内Ⅰ式前葉の集落が、比較的小規模で、しかも短期間であった可能性が高いことを指摘することができる。北野原遺跡から南東約4kmの位置にある武士遺跡では426棟の竪穴住居跡が検出されており、集落の時期は中期加曽利EⅢ式から後期加曽利BⅠ式まで継続的に営まれている。この内中期加曽利EⅢ・EⅣ式期の竪穴は90棟、後期称名寺式期は15棟、堀之内Ⅰ・Ⅱ式期227棟などとなっており、武士遺跡においても称名寺式期の集落規模が、小規模であったことを示している。

縄文時代の遺物のうち、遺構に伴わない遺物、すなわち包含層出土遺物はあまり多くなかった。土器は、遺構に関連した時期の縄文時代後期称名寺Ⅱ式から堀之内Ⅰ式土器が圧倒的に多く、他の時期の土器は微量であった。土器以外の遺物としては、土器片錘、土器片円盤、腕輪状土製品、土製蓋などが出土している。この内、特に注目したいのが、腕輪状土製品である。類例はなく、貝輪の土製品とは一線を画すると考えられる。形態はイノシシの牙製装飾品に類似しており、穿孔された小孔のあり方から2個を紐で結んでブレスレットのようにして使用していたのではないかと推測される。

一方、検出された古墳時代の竪穴住居跡は、5棟であった。台地の中央に1棟、台地の南側本調査区で4棟が検出された。かつての自然地形においては南側に面する緩斜面に集落が展開していたものと考えられる。集落規模は小規模であり、隣接する加茂遺跡の集落規模とは対照的である。

この他の検出遺構としては、平安時代の方形周溝状遺構が検出され、地下式の埋葬施設が発見されている。これについては別項で検討を加えてみたい。同時期に営まれたと考えられる天井の一部を残した、いわゆる「有天井土坑」が検出されている。遺物はなく、時期を特定できないが、方形周溝状遺構と近い時期の埋葬施設の一つと判断されよう。

027号跡について

本遺跡において、南側緩斜面を望む台地縁辺部に地下式壙を伴う方形周溝状遺構027号跡が検出された。内部施設である玄室内から多量の本質を伴う鉄製釘が出土した。ここでは027号跡について、市内で調査された他の地下式壙を伴う方形周溝状遺構と比較しながら、その相違点を上げてみたいと思う。

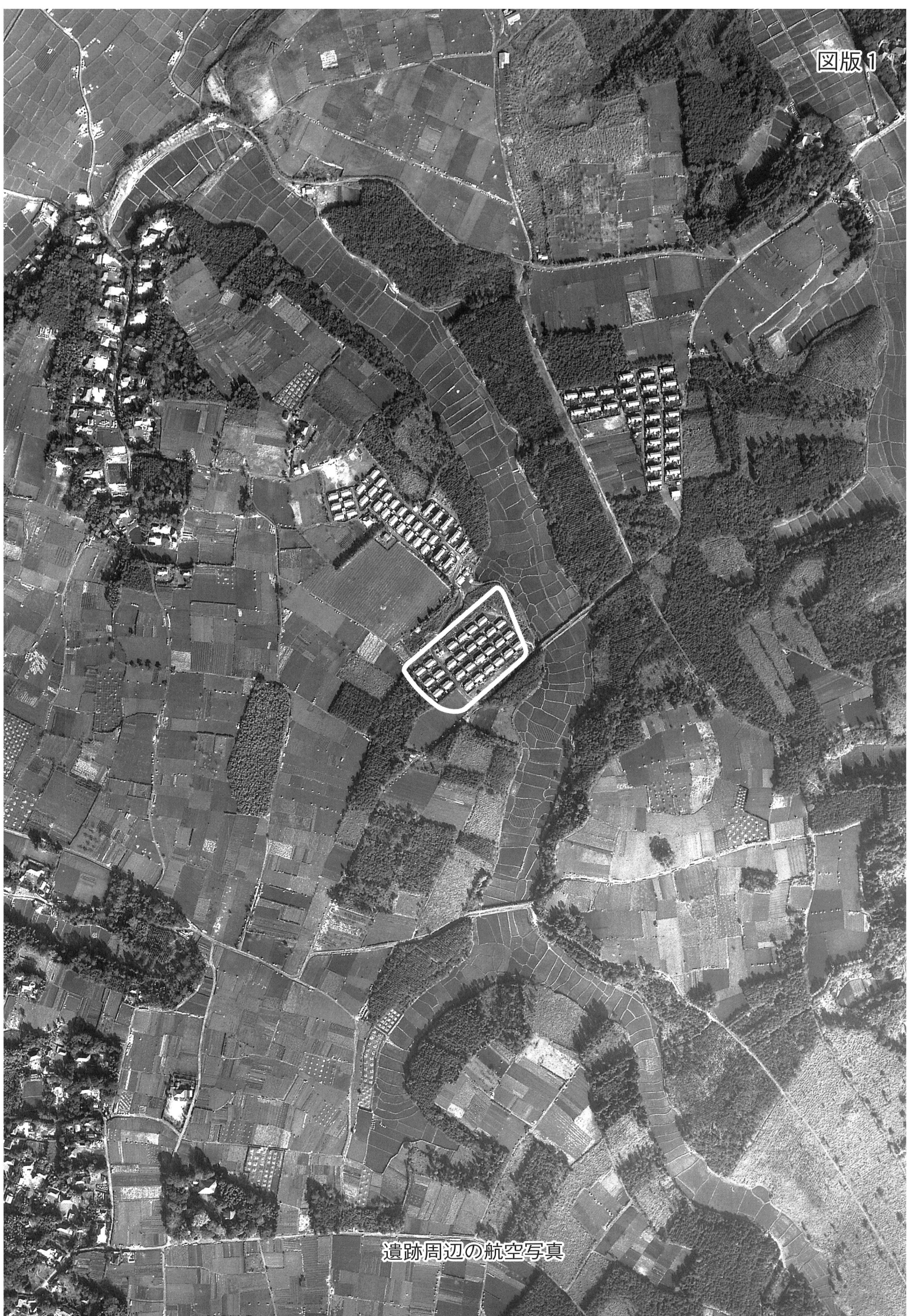
これまで、本遺構のような地下式壙を伴う方形周溝状遺構は市原市内において、その調査は数例にとどまっている。本遺構に類似する例としては、1985年に(財)市原市文化財センターによって調査された下鈴野遺跡06号方形周溝状遺構及び、千草山遺跡第103号方形周溝状遺構を上げることができる。遺構の立地は、本遺構が、南西に開く緩斜面に向かって内部施設を掘り込んでいるのに対して、下鈴野遺跡06号方形周溝状遺構が南東に開く斜面に向かって内部施設を掘り込んでおり、千草山遺跡第103号方形周溝状遺構は台地縁辺からやや奥まるものの、南東に開く斜面に向かって内部施設を掘り込んでいる。周溝部分の平面規模は3遺構例共にほぼ同様である。一方、内部施設である竪坑(前室)においては下鈴野遺跡及び千草山遺跡遺構例では、南側に比較的明瞭な階段状になる墓道状の施設があり、この点は本遺構と異なる。また、下鈴野遺跡においては玄門付近に閉塞板(木板)をはめ込んだと思われる台形の掘り込みが認められるが、本遺構では確認されなかった。堆積土はいずれの遺構とも前室の埋め戻し土を基本としているが玄室への流入土が下鈴野遺跡及び千草山遺跡遺構例においては天井部付近においては空隙が多くあいているのに対して、本遺構では天井部まで流入土が充満していた。また、玄室内の方形の掘り込み部分が、本遺構では長径1.6m前後で立ち上がるのに対して、下鈴野遺跡及び千草山遺跡遺構例においては玄室入り口部から奥壁まで貫通し、両遺跡ともその形状から中央の方形掘り込み部分を通路とし、両側を棺座と報告している。ちなみに、玄門付近における床面から天井部までの高さは、下鈴野遺跡及び千草山遺跡遺構例共に1 m前後であり、本遺構の規模とほぼ一致する。

出土遺物は、下鈴野遺跡例が玄室・竪坑(前室)共に皆無であり、千草山遺跡例では、玄室内東側区画部及び中央部から人骨片、中央部からウマの歯を検出し、方形掘り込み部中央から須恵器長頸壺頸部、東側奥壁付近において須恵器長頸壺底部が出土しているが、本遺構においては、玄室中央の方形掘り込み内で木質を伴う多量の鉄製釘及び門の部材と思われる鉄製品、人骨・歯が出土したほか、北西隅を除いた玄室の隅に何らかの目的で置かれたと考えられる少量の貝殻片等が検出されている。本遺構においては、人骨の出土位置及び木棺に使用されたと考えられる鉄製釘等の出土状況と玄室中央の掘り込みが奥壁にまで達していないことなどから、中央の方形掘り込み部自体が木棺を置く棺座として使用された可能性が高いと考えられる。また、玄室内北東側においても骨粉及び鉄製釘の集積があることから追葬が行われたことも考えられ、追葬時に当初中央掘り込み部に置かれた木棺を北東側にずらすように押しやり、新たな木棺を再び棺座である中央掘り込み部に置いた可能性がある。先述したように本遺構並びに両遺跡例における玄門付近の床面から天井部までの高さは1 m前後であり、玄室内に入って屈んだ状態での葬送行為は困難を伴ったものと考えられ、下鈴野遺跡及び千草山遺跡遺構例における中央の方形掘り込み部を通路とする見解については検討の余地があるかもしれない。

参考文献

- 加納 実ほか『市原市武士遺跡2』財団法人千葉県文化財センター調査報告 第322集 1998
- 忍澤成視『祇園原貝塚-上総国分寺台遺跡調査報告V-』市原市教育委員会 1999
- 大村 直『下鈴野遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書 第16集 1987
- 田中清美ほか『千草山遺跡・東千草山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書 第29集 1989

写 真 图 版



遺跡周辺の航空写真



調査風景（東から）



027（南から）



027 竪坑・玄室（北から）



001 (南西から)



001 (北西から)



001 炉 (西から)



001 注口土器 (南西から)



002 (南東から)



002 (北から)



003 (南西から)



004 (北東から)

図版 4



004 (北東から)



008 (北から)



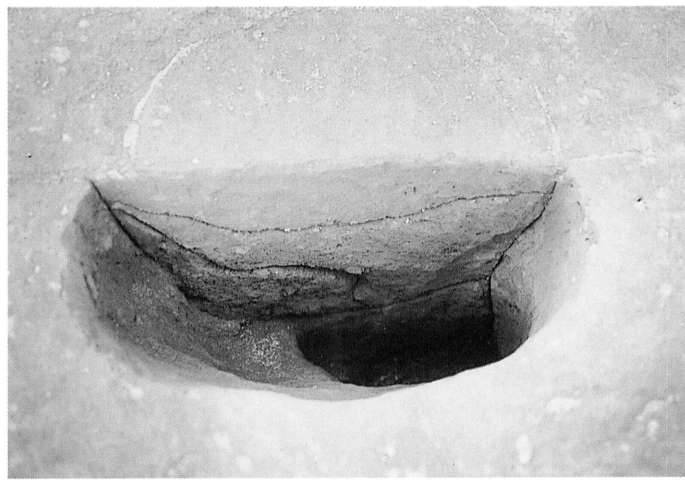
022・023 (南西から)



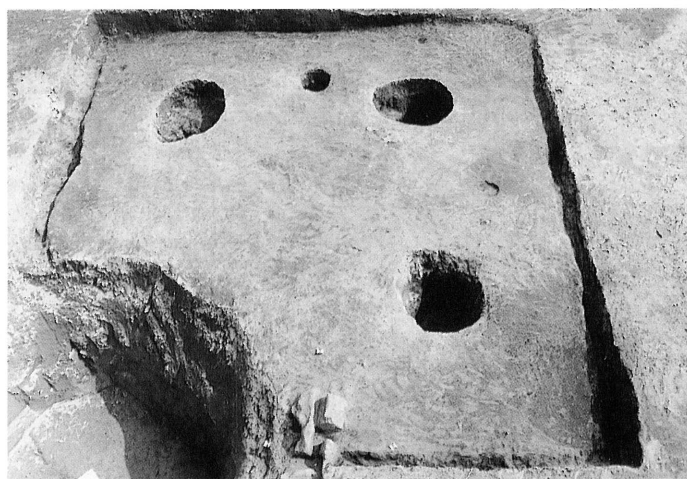
022・023 (南西から)



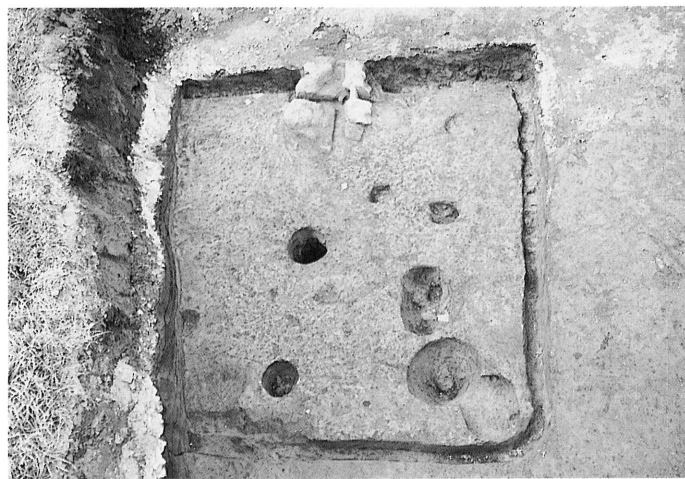
023 カマド (東から)



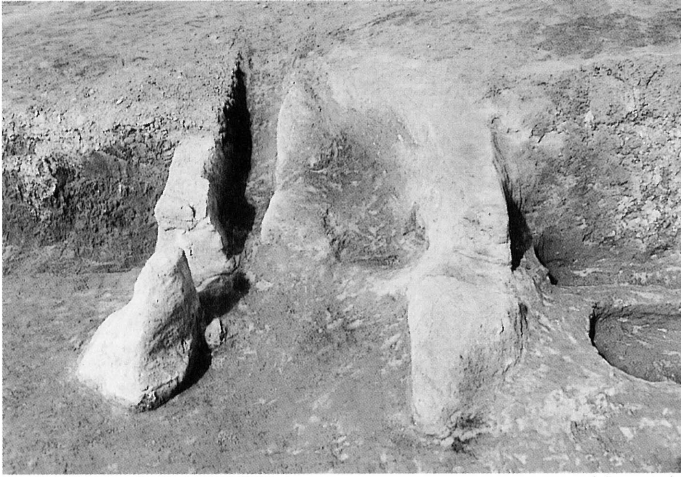
023 P2 柱穴 (南から)



024 (北から)



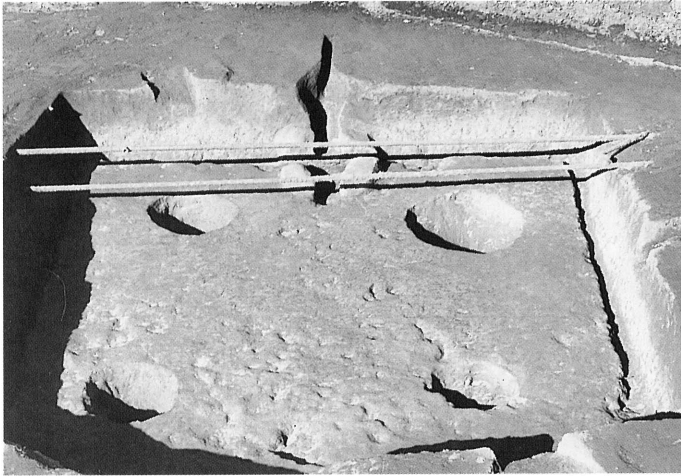
025 (南から)



025 カマド (南から)



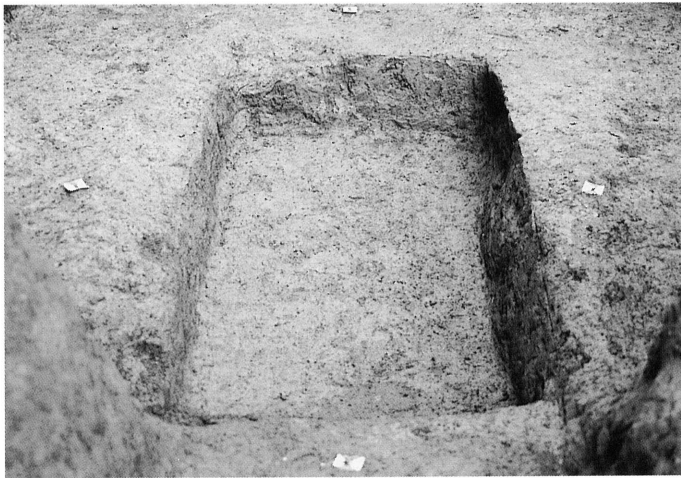
025 カマド (南から)



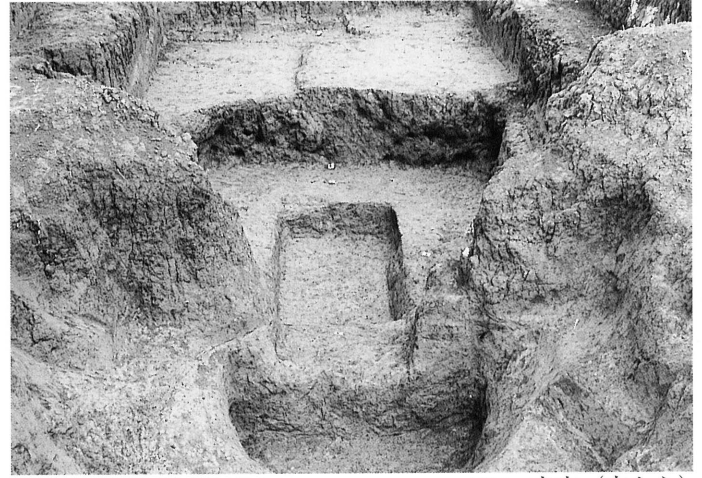
026 (南東から)



026 P1柱穴 (南西から)



027 玄室内中央掘り込み (南から)



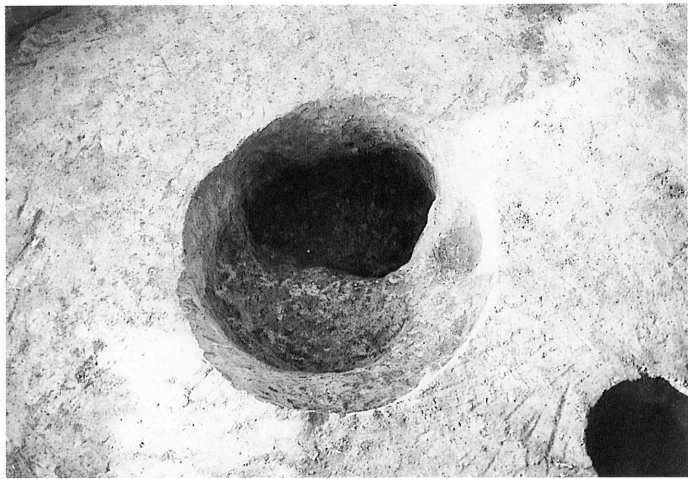
027 玄室 (南から)



027 木棺釘 (南から)



027 玄室内遺物 (南から)



010 (西から)



010 (南西から)



011 (西から)



012 (南から)



013 (南西から)



014 (南から)



014 (西から)



015 (南から)



027 竖坑北側（南から）



027 玄室奥壁（南から）



027 玄室内中央掘り込み（南から）



027 玄室入口（南から）



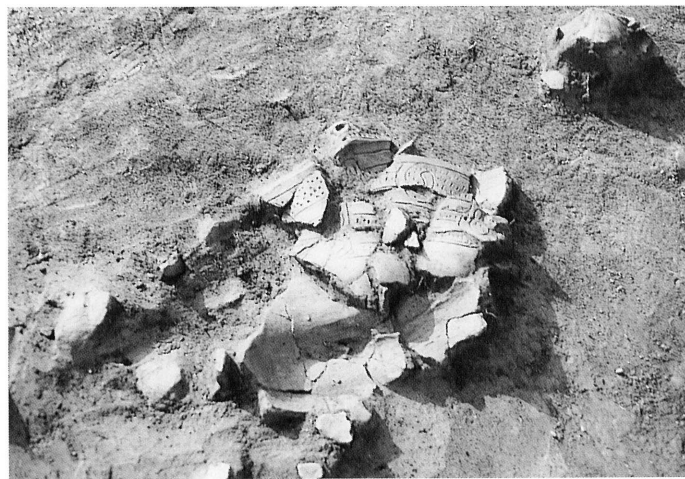
027 玄室入口（南東から）



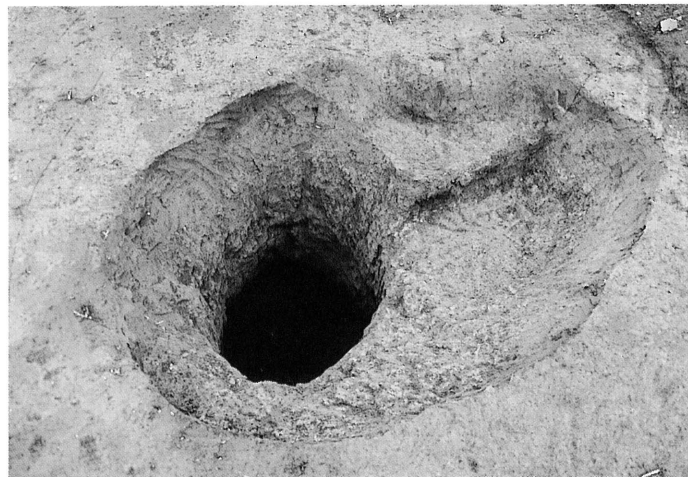
027 玄室入口（南西から）



007（南東から）



007 遺物出土状況（南東から）



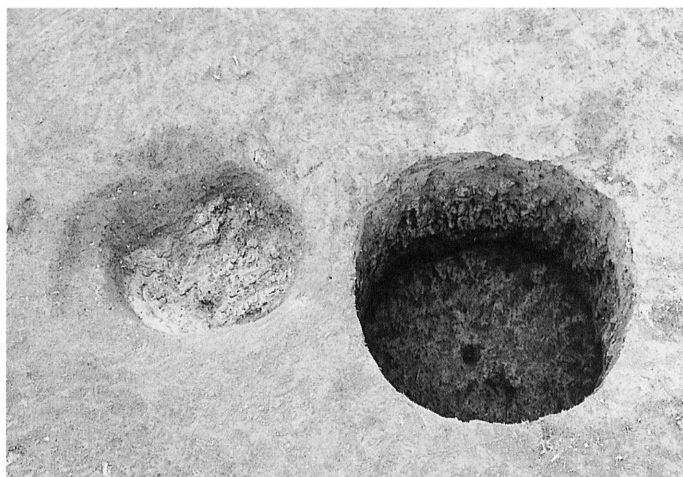
017 (南西から)



017 (南東から)



018 (南から)



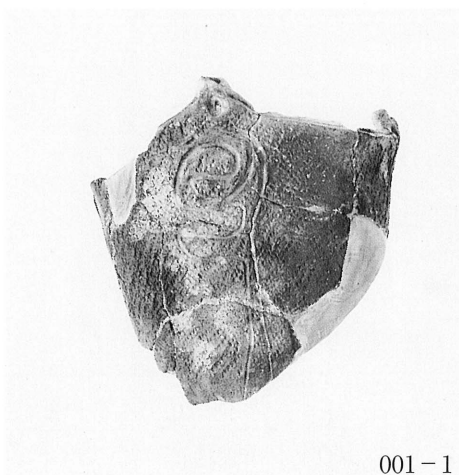
019・020 (北東から)



021 (南から)



028 (南東から)



001-1



001-2



001-3



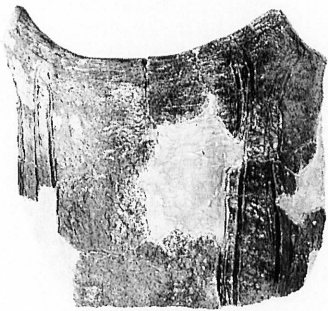
001-6



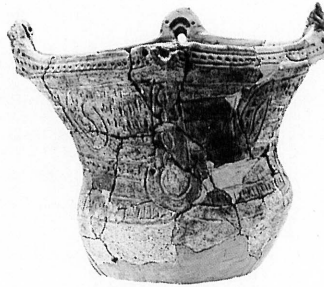
001-37



001-37



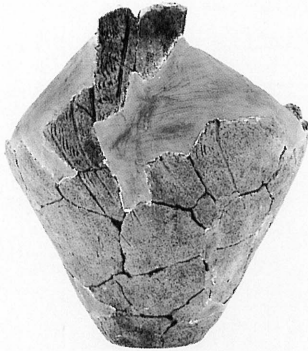
004-1



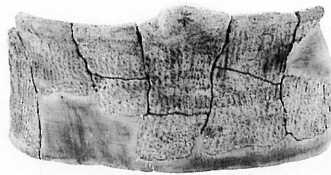
007-1



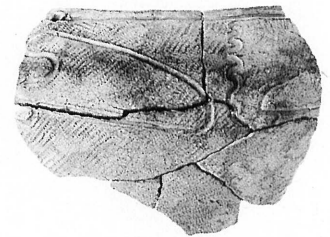
007-2



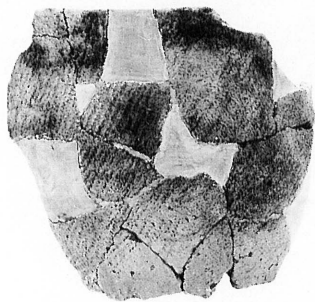
011-1



012-1



012-2



012-3



012-6



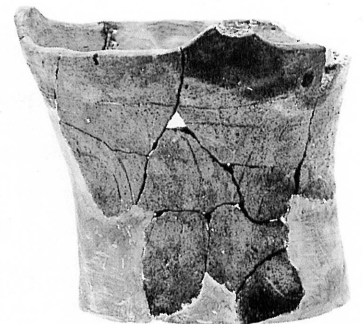
015-17



017-1



包含層-103



包含層-102



022-1



022-3



022-5



022-7



022-9



022-10



023-17



023-14



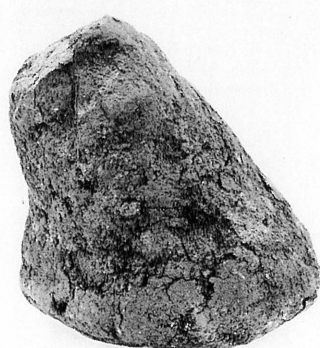
025-3



025-1



025-4



025-2



026-1



026-2



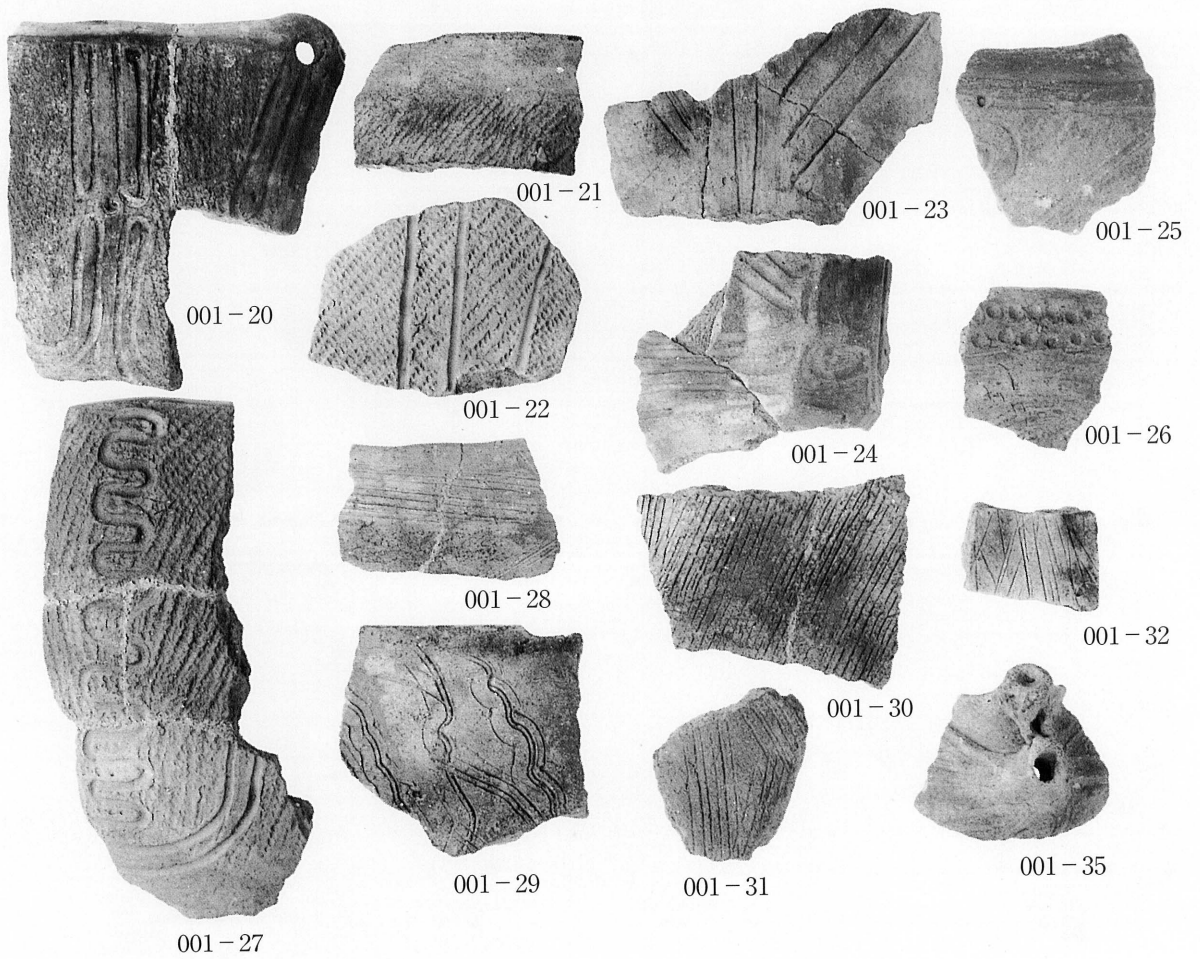
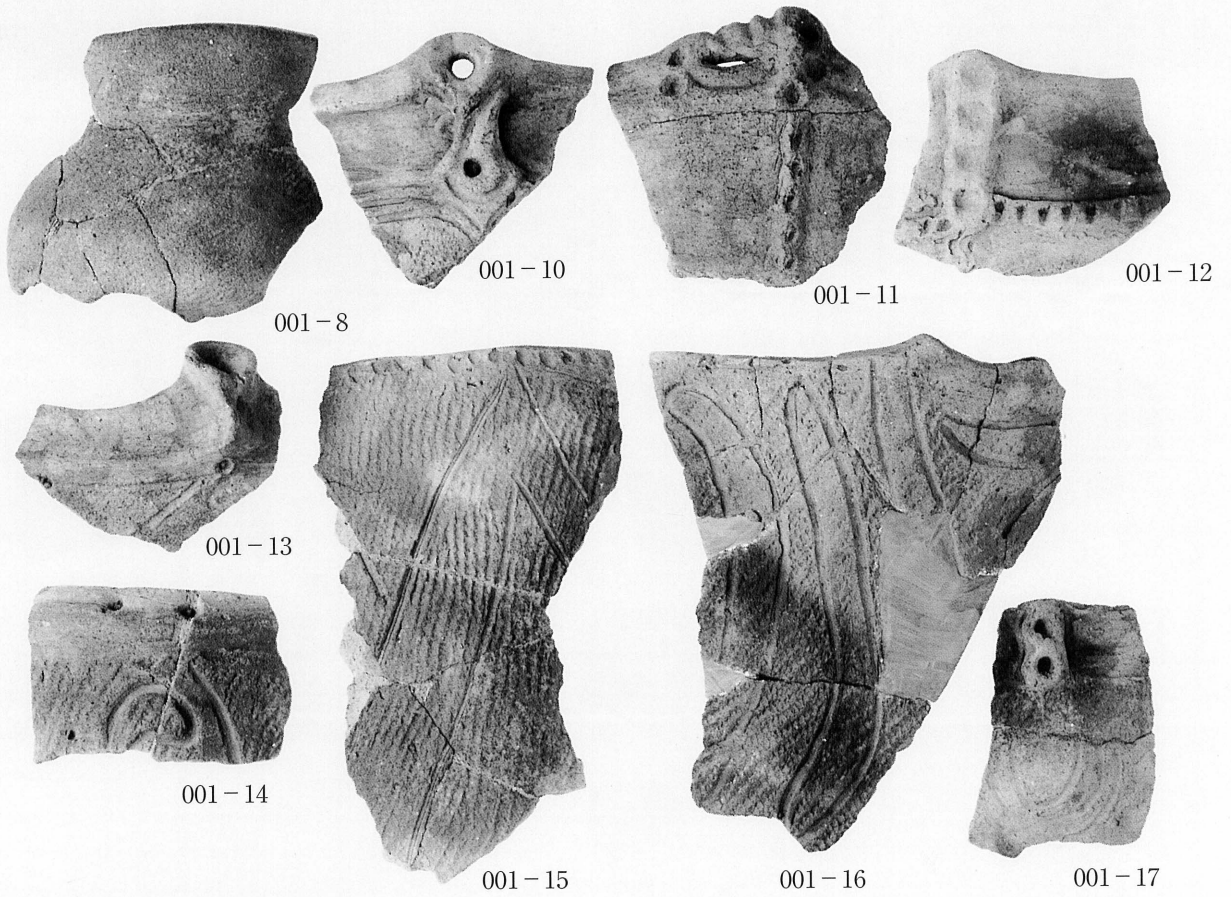
026-6

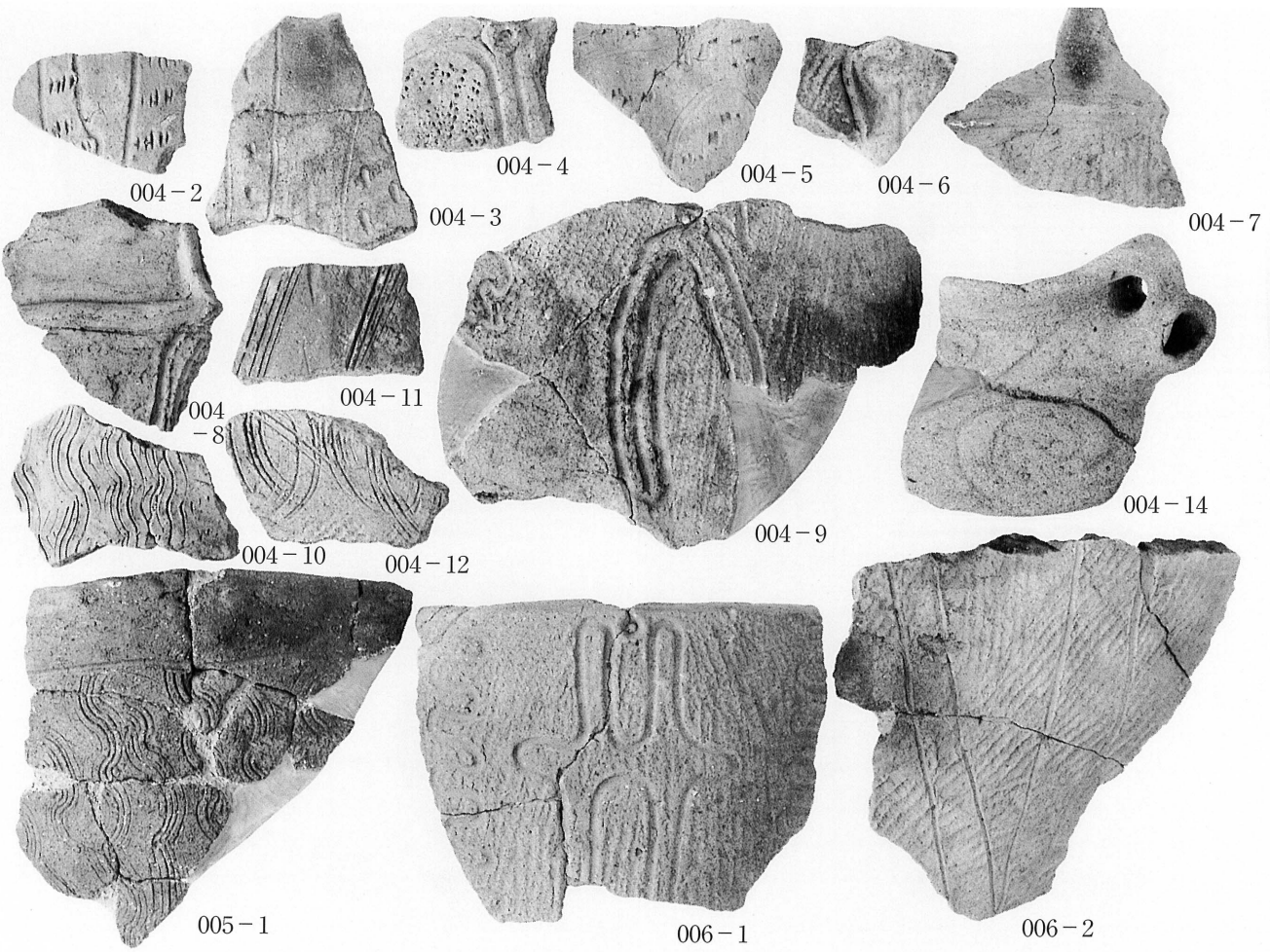
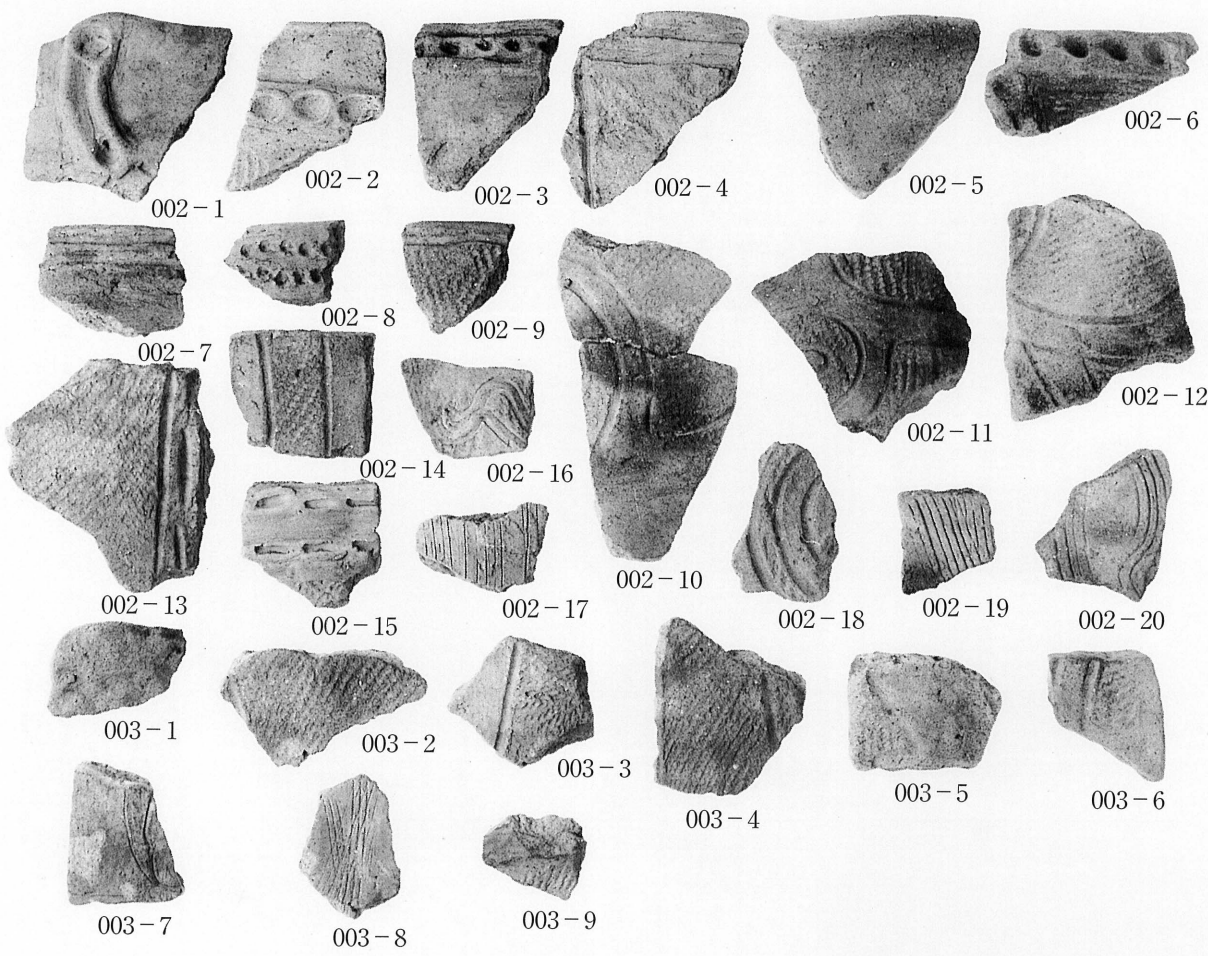


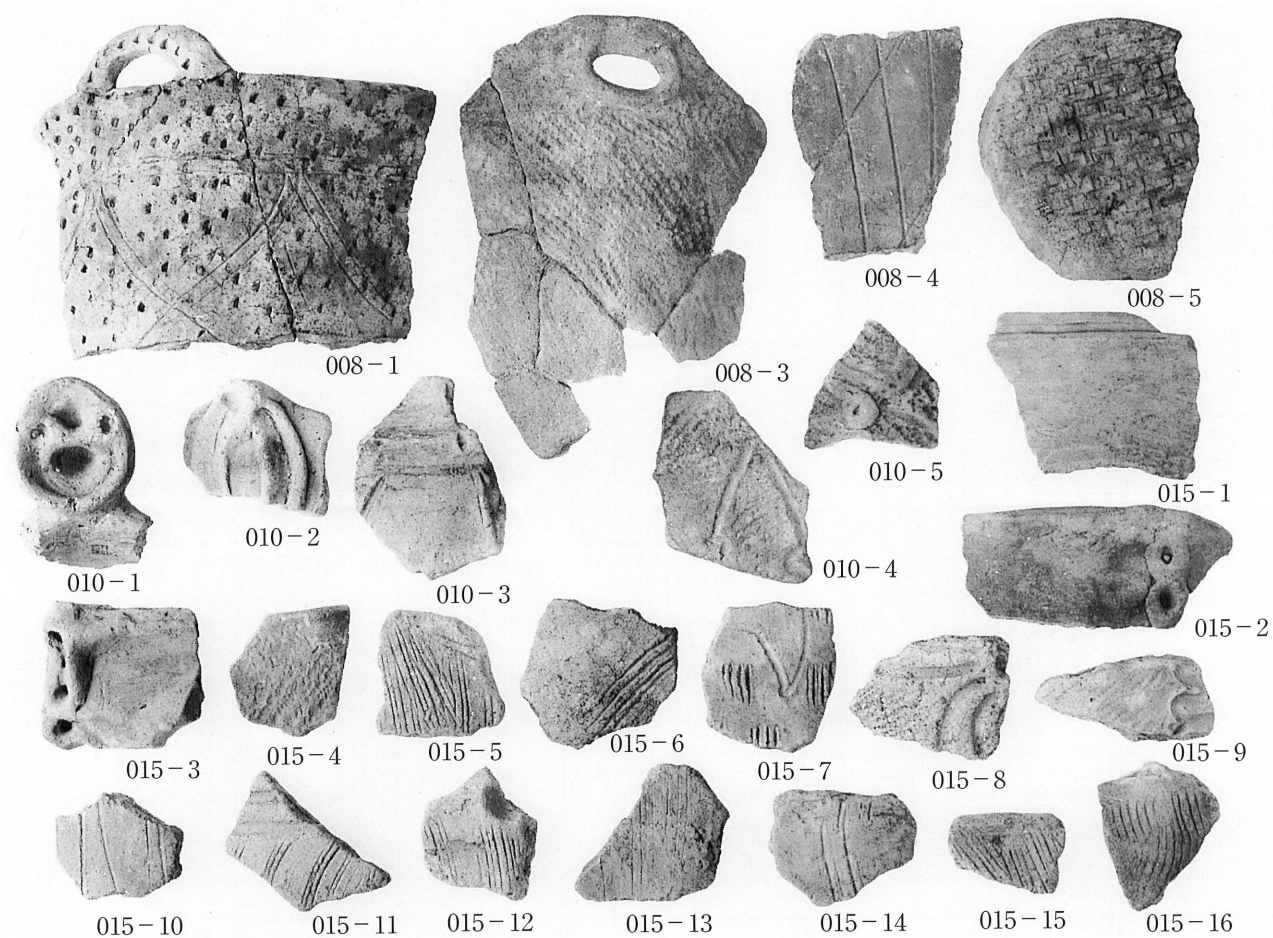
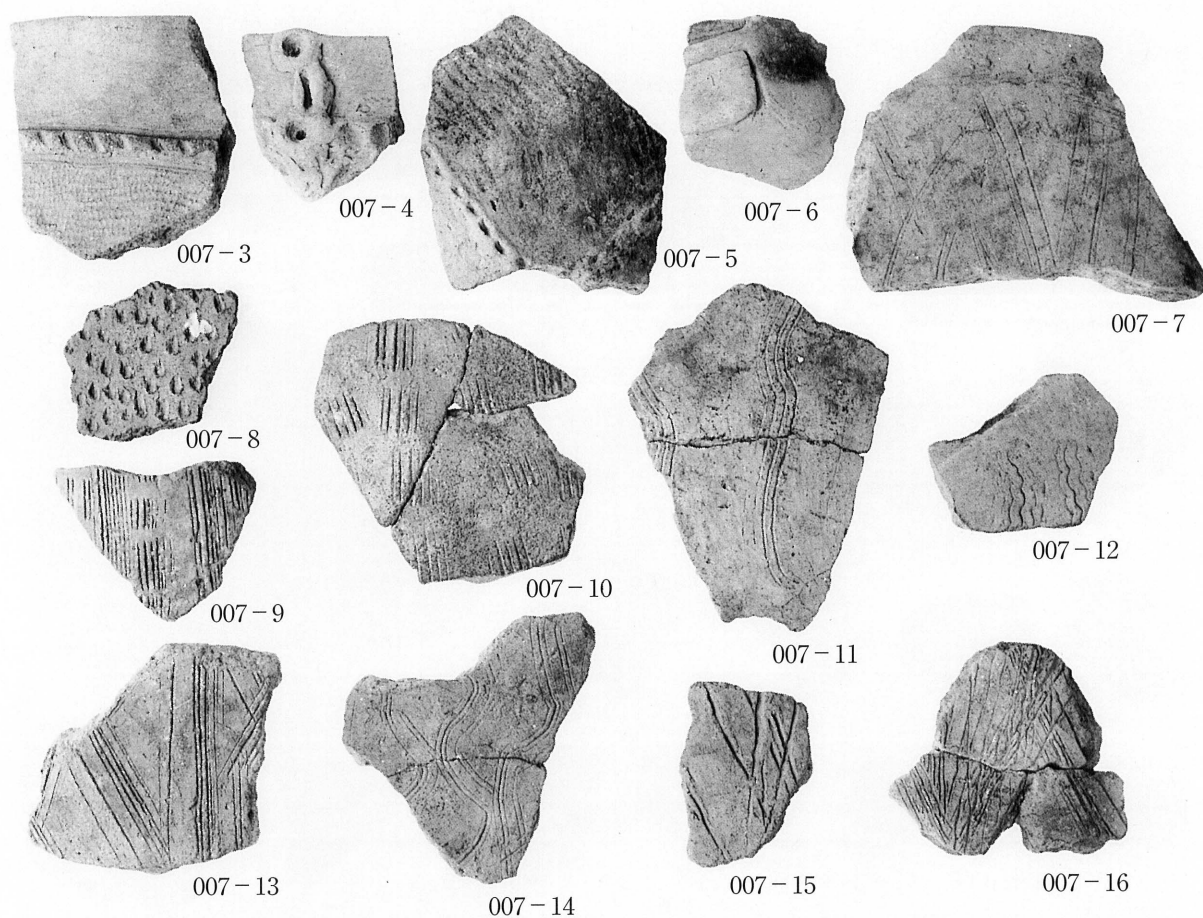
026-7

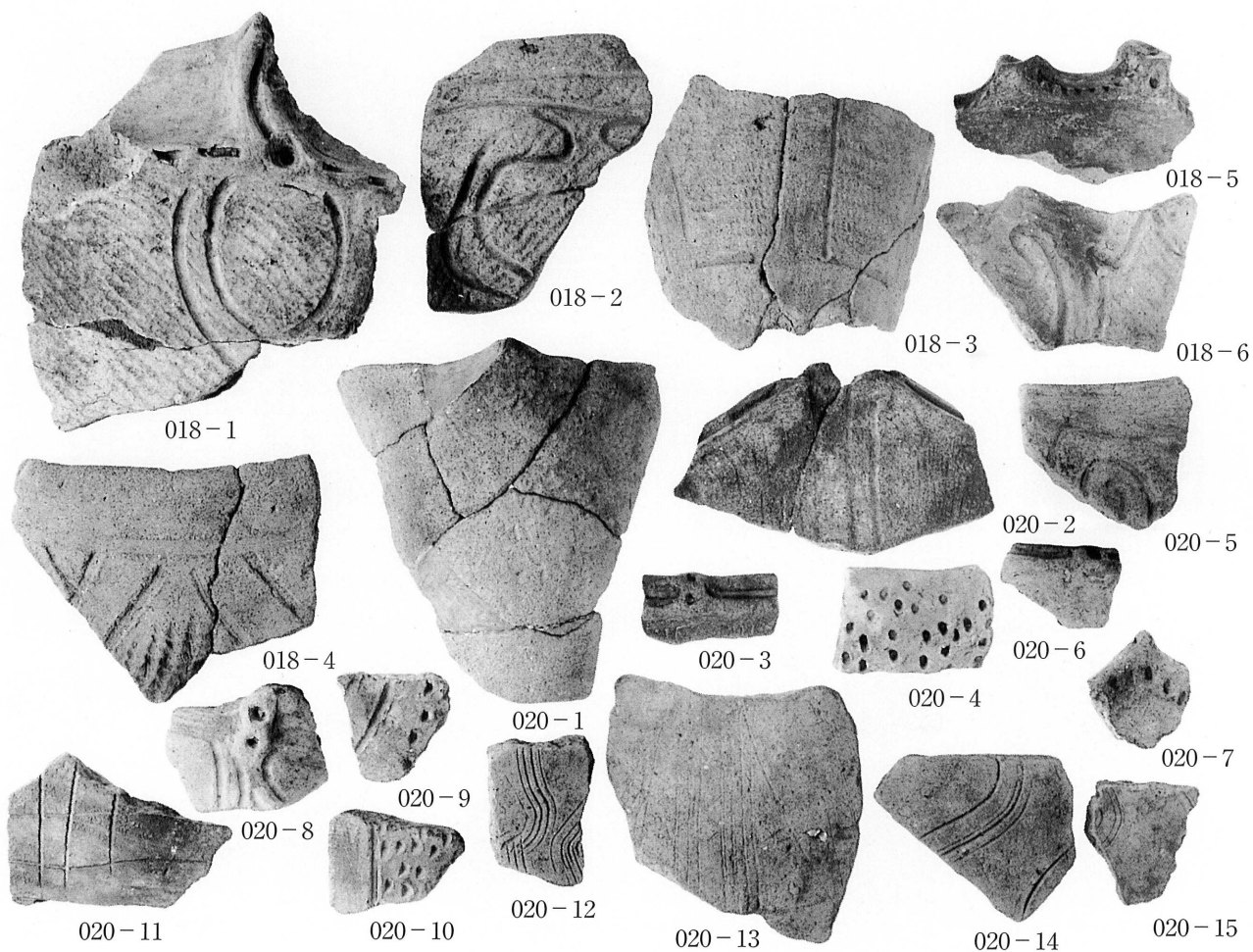
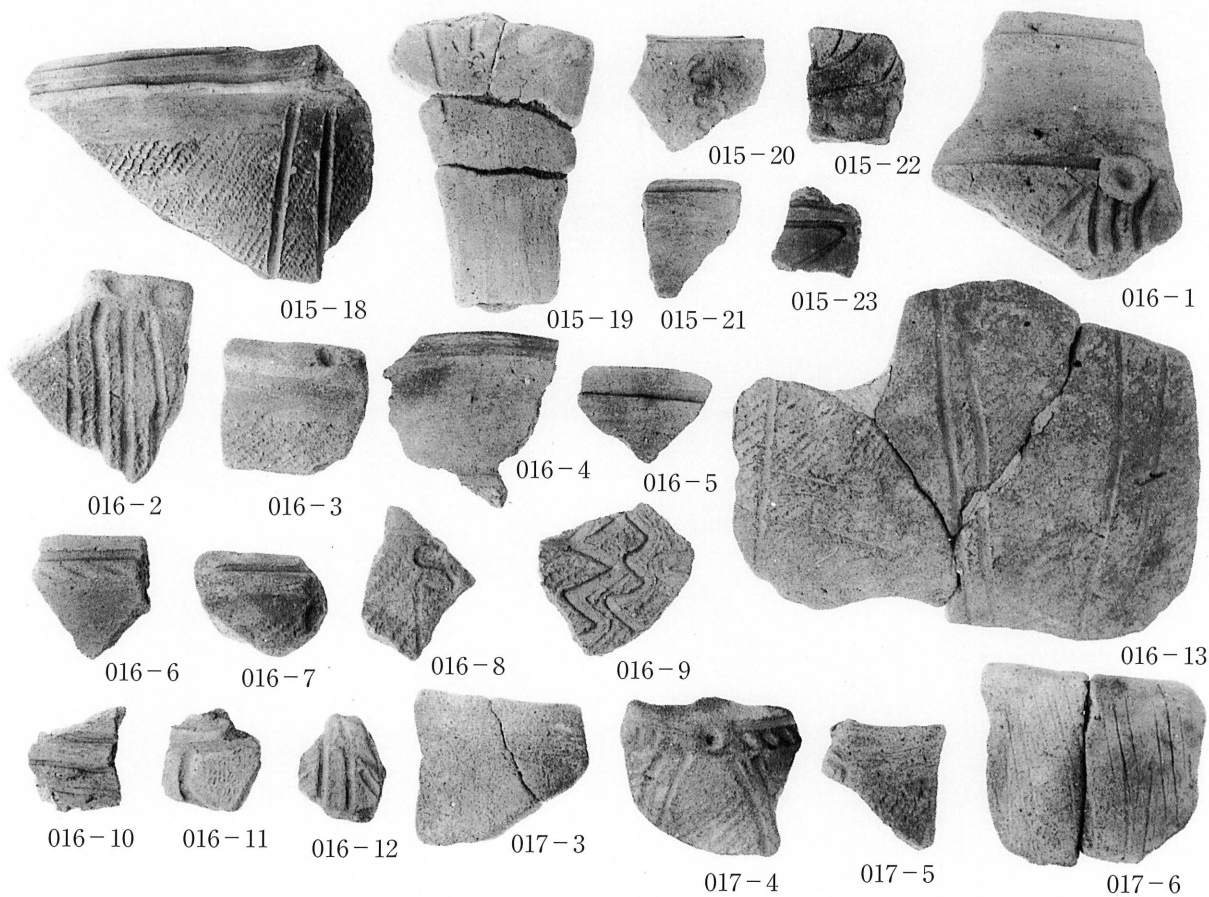


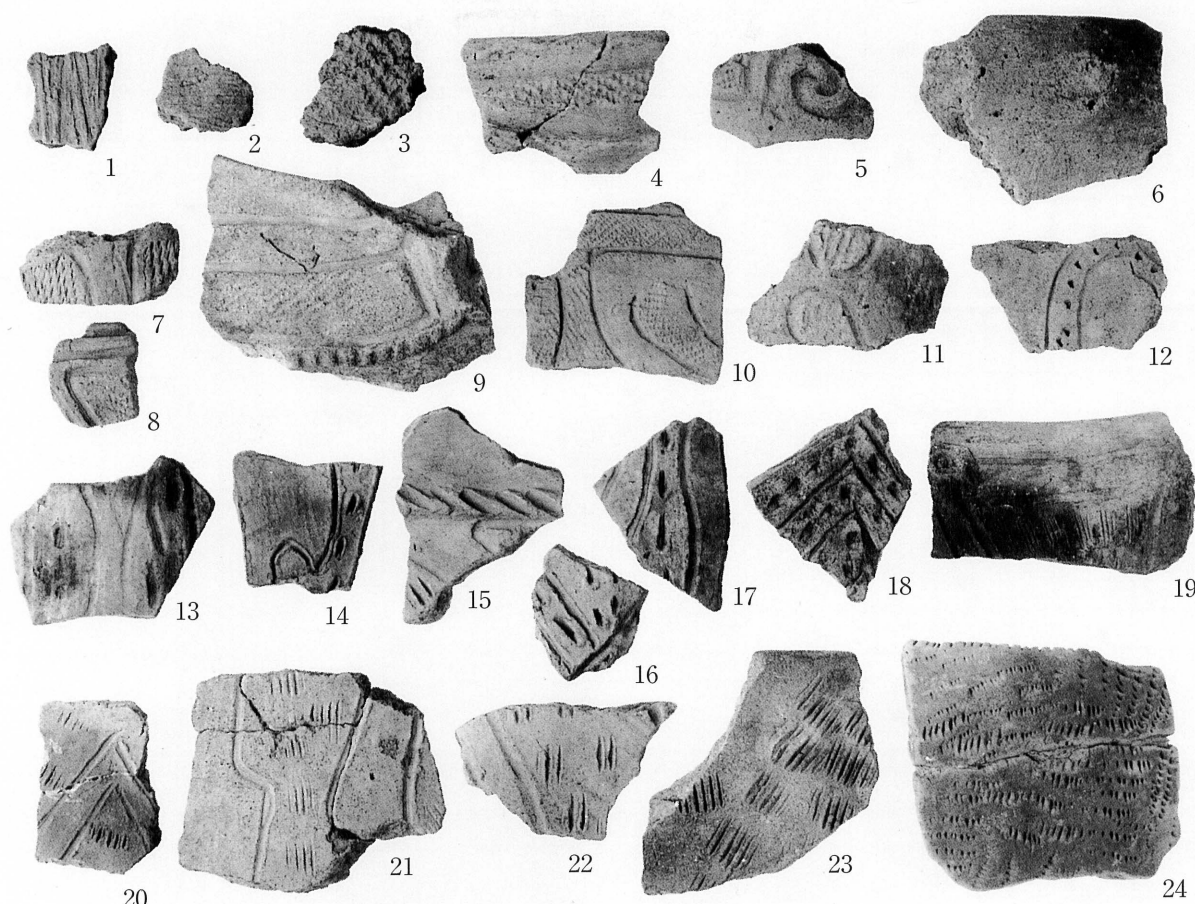
027-2



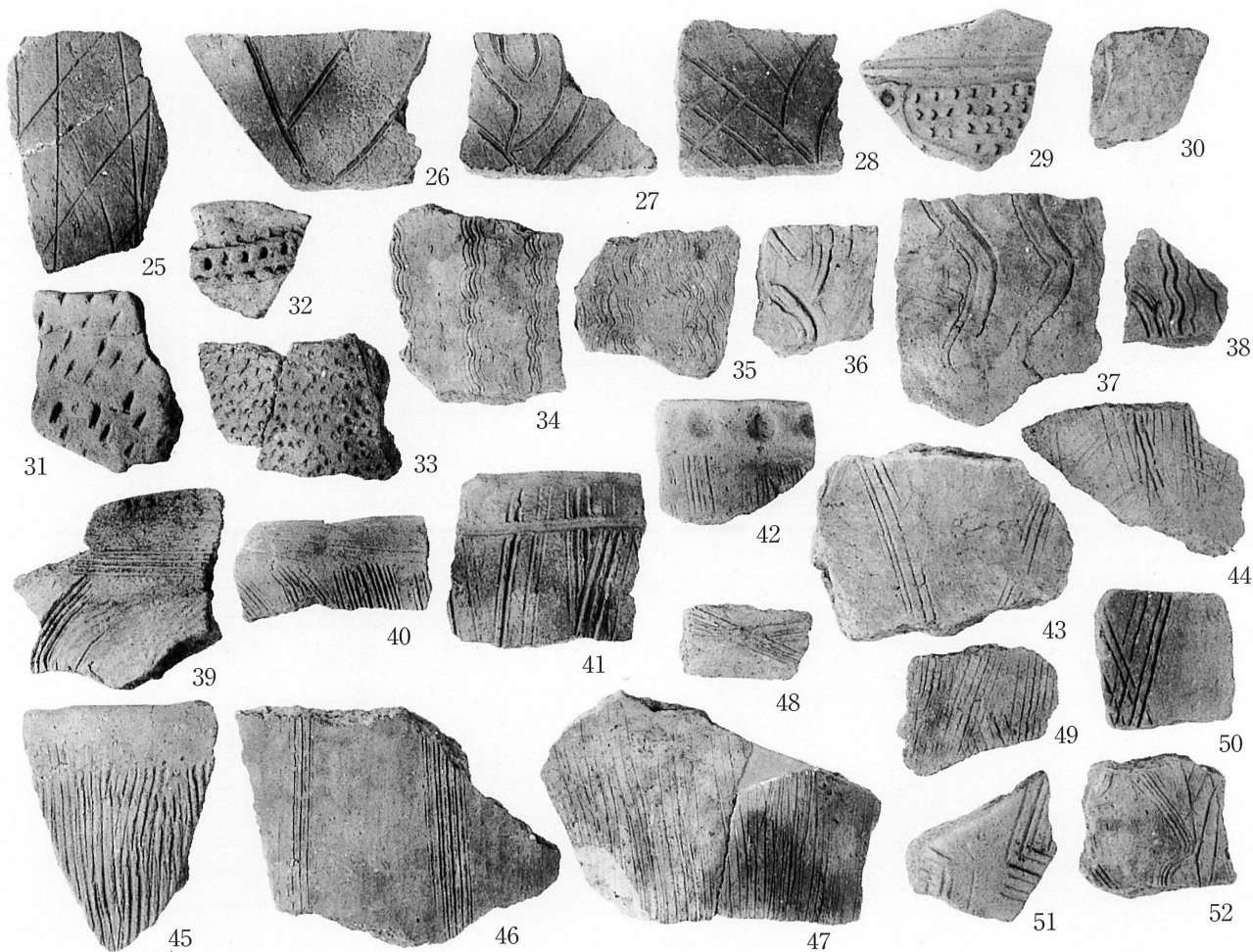




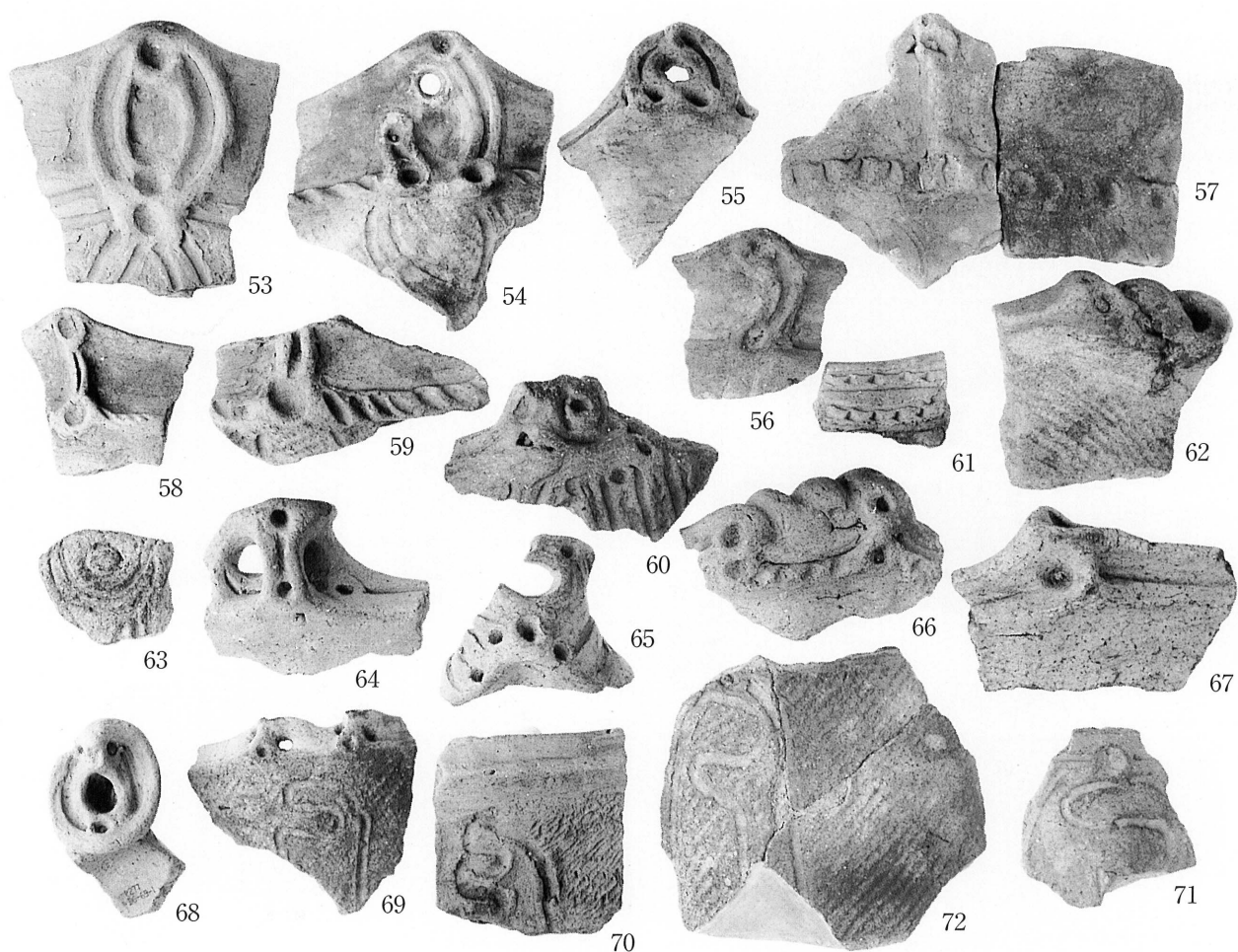




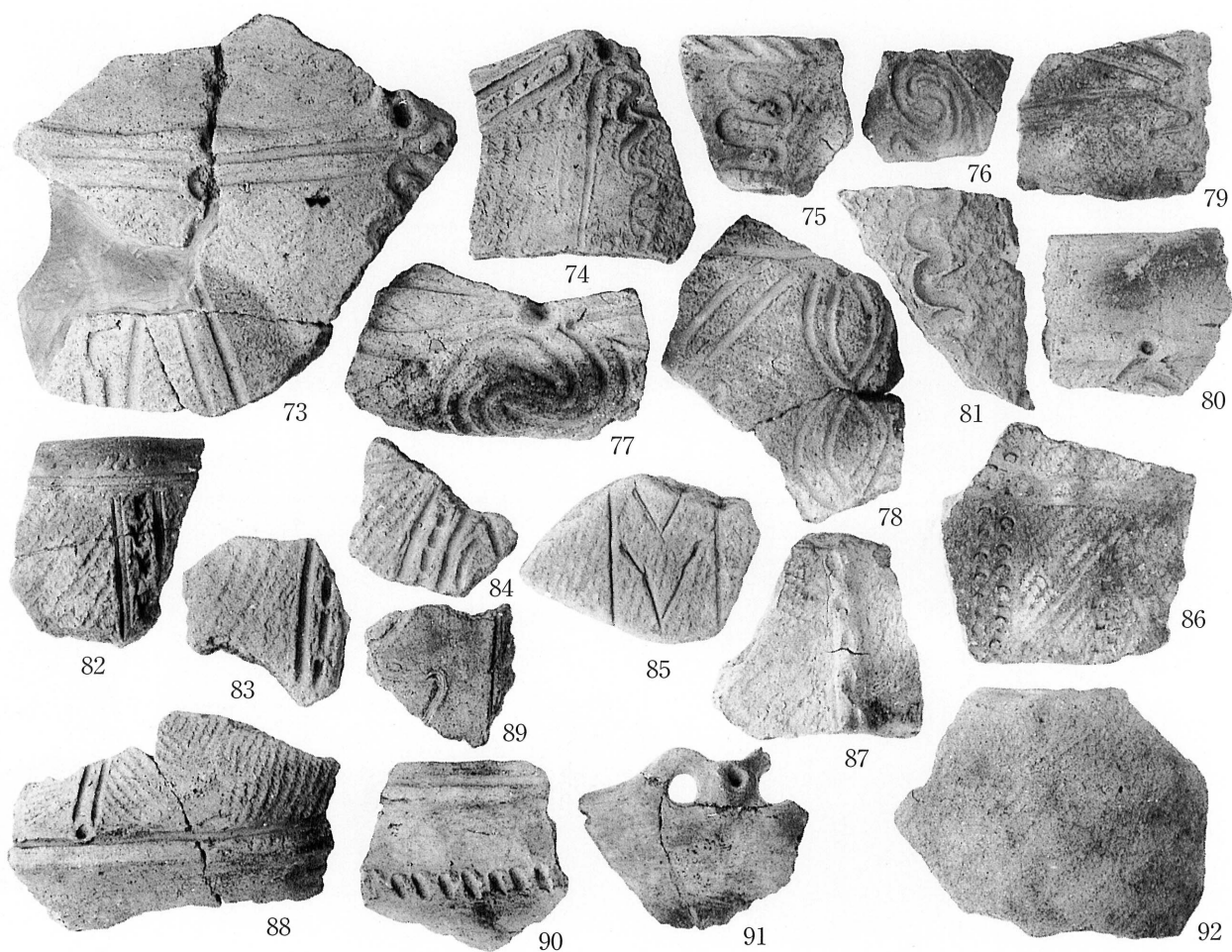
遺構外出土縄文土器



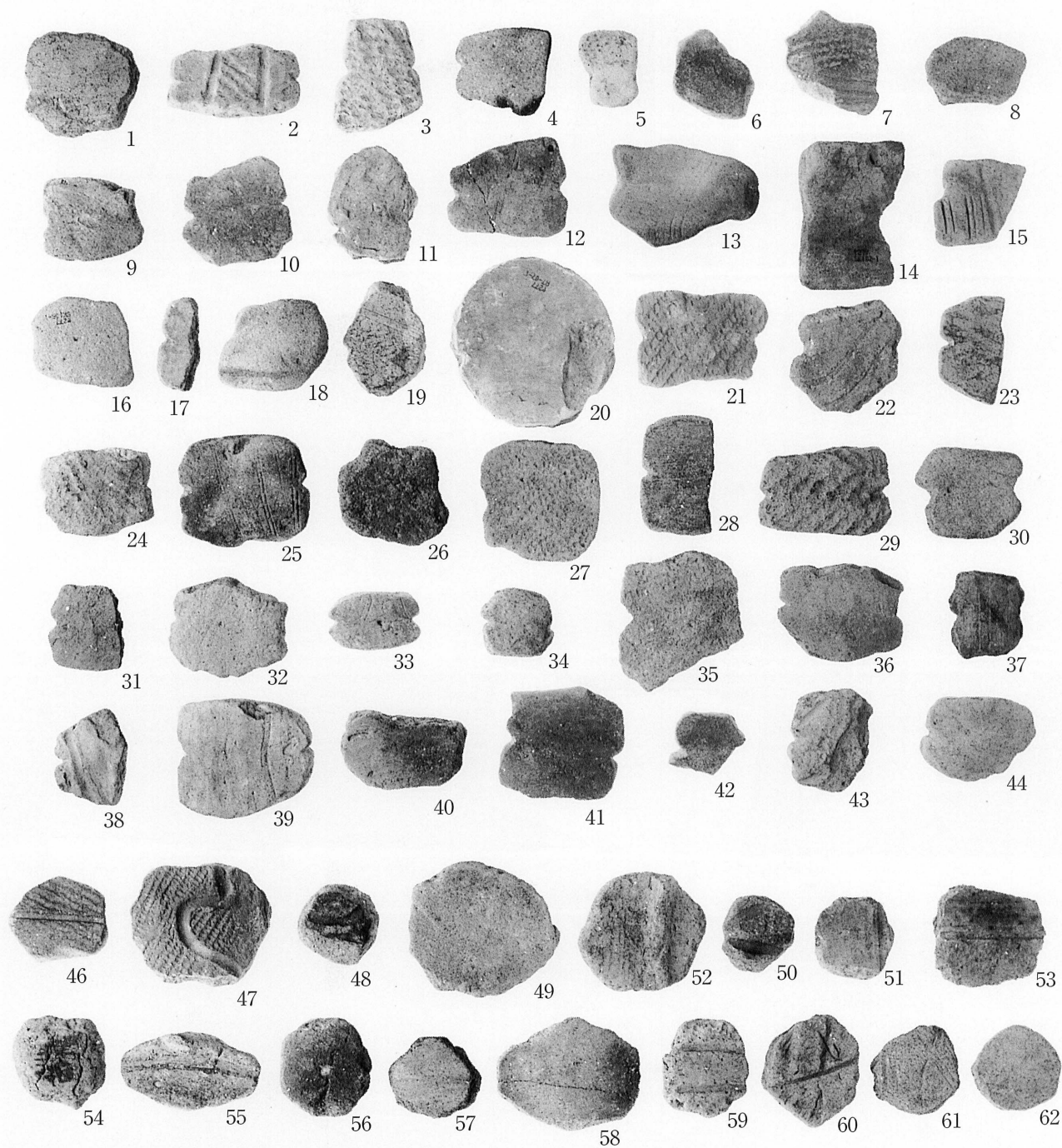
遺構外出土縄文土器



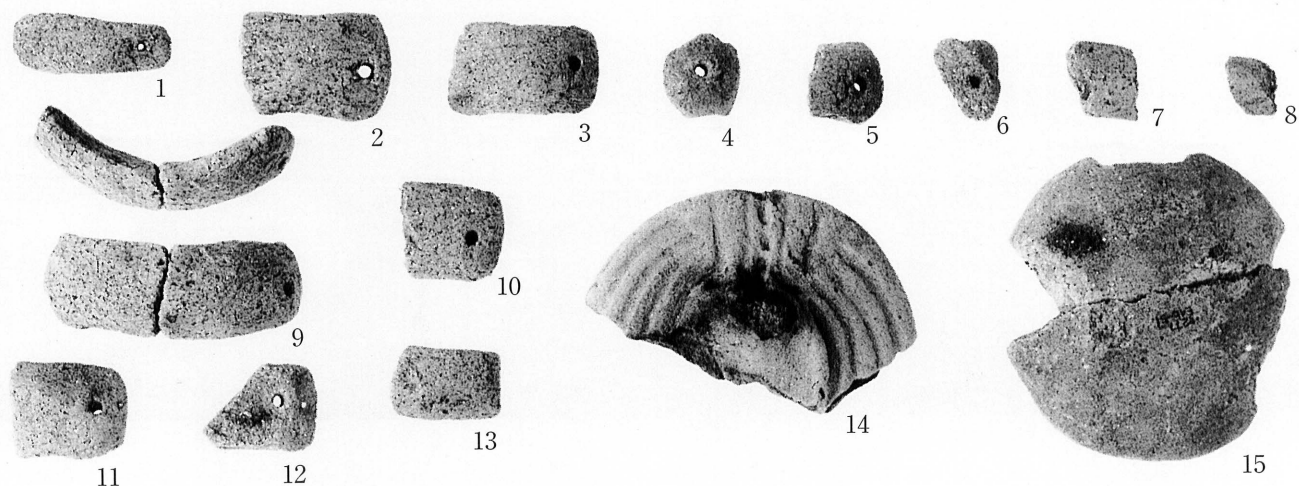
遺構外出土縄文土器



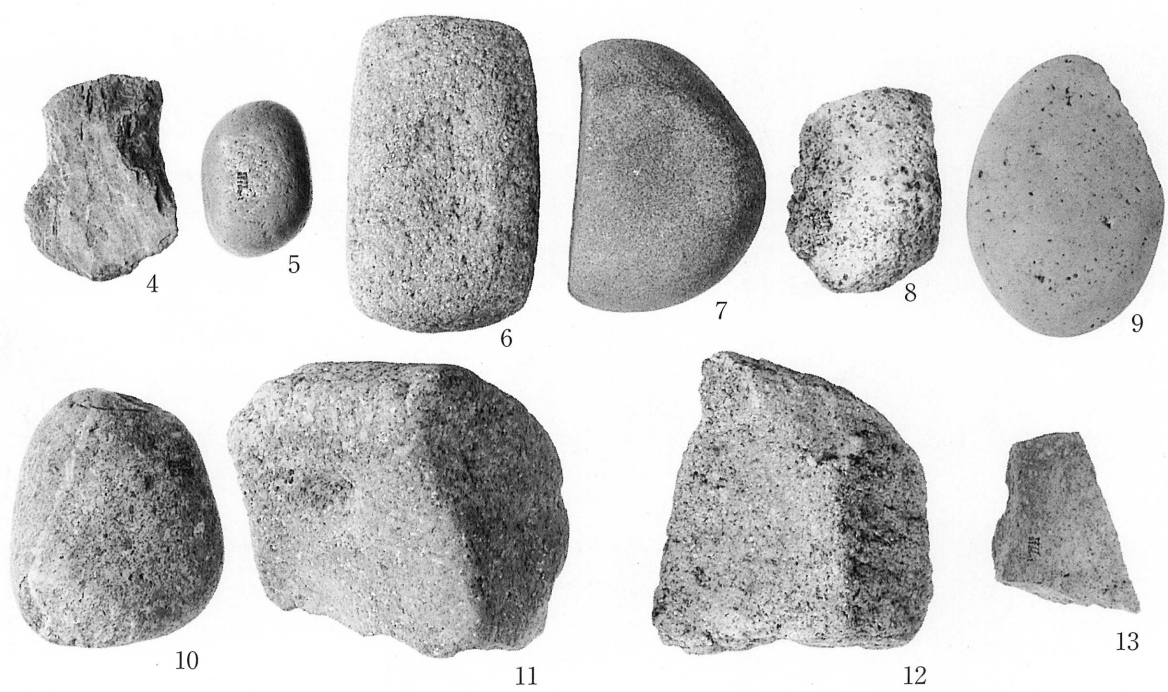
遺構外出土縄文土器



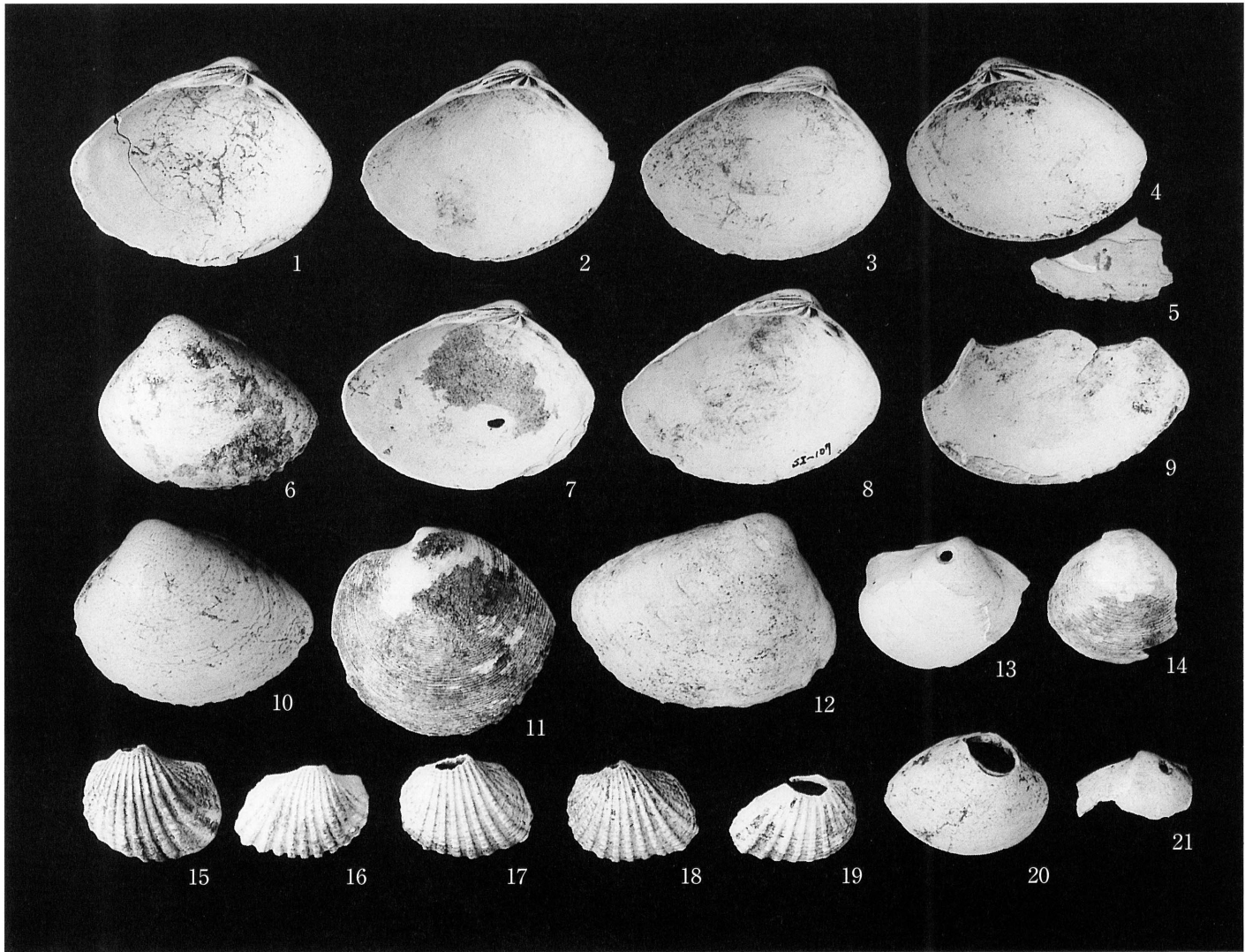
土器片鍾・土器片円盤



腕輪状土製品・土製蓋



出土石器



貝刃・加工品



報告書抄録

ふりがな	いちほらしきたのはらいせき							
書名	市原市北野原遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人 市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第68集							
編著者名	小川 浩一・蜂屋 孝之							
編集機関	財団法人 市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地					TEL 0436 (41) 7300		
発行年月日	2000年 3 月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きたのほらいせき 北野原遺跡	ちばけんいちほらし 千葉県市原市 こくぶんじだいちゅうおう 国分寺台中央 6-10-1～7	12219	277	35度 29分 14秒	140度 6分 27秒	19990125 ～ 19990318	2,340m ²	宅地開発に 伴う埋蔵文 化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北野原遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡 6棟 土坑 12基 地点貝塚 3か所		縄文土器（称名寺式・堀之内式）、土器片錘、土器片円盤、土製蓋、腕輪状土製品、貝刃、石鏃、凹石、磨石、石皿		柄鏡形住居跡が検出されている。貝層が遺構内及び遺構外で確認され、地点貝塚であることが判明した。	
	集落	古墳時代	竪穴住居跡 5棟		土師器、須恵器、支脚			
	墓域	平安時代	方形周溝状遺構 1基 有天井土坑 1基		土師器、須恵器、鉄釘他		地下式壙を伴う方形周溝状遺構が検出され、多量の鉄釘が出土。	

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第68集

市 原 市 北 野 原 遺 跡

平成12年 3 月21日 印 刷

平成12年 3 月30日 発 行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 旭 硝 子 株 式 会 社

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

TEL 0436 (41) 7300

印 刷 株式会社 弘 文 社

千葉県市川市市川南2-7-2

TEL 047 (324) 5977